



海外藝術
評論叢書

(6)

美と慧知の三哲

竹内道宣



バルビュウス論抄

バルビュウス著
青野季吉譯 1.40

創造の藝術

カアベンタア著
宇佐見文藏譯 1.50

美と慧智の生活

ロオリツヒ著
竹内逸譯 1.30

近代神秘思想

グリー・アスン著
遠藤貞吉譯 1.80

文學的回憶

ツウルグーニエフ著
宮原晃一郎譯 1.20

エゴイスト

ヒュウカラ著
芥川潤譯 1.30

篇九第

篇八第

篇七第

篇六第

篇五第

篇四第

以下續刊



土田 中 村 玉 堂 編輯 (廣川松五郎氏)

(裝幀)

外 藝術評論叢書

四六判背布上製
二五〇頁内外
定價金二圓内外
送料金十二錢

我國の文壇に今文藝評論らしい評論がなく、且つ評論が文壇に影響する力も甚だ微々たるものである事は多くの人達から常に聞く言葉だが、公平に見て其の事實に蔽へないと思ふ。現在我國には、小説や劇の叢書は數多くあるけれども、評論の叢書といふものは一つもない。實際のところ文壇の讀書子も、もう大分小説や劇に飽いた。此んな時に少し固い評論書を読んで氣分を轉換し、視野を擴大して見るのも悪いことはあるまい。——手軽な翻譯本ならば何處ででも讀め、且つ其れを讀む事によつて何かのヒントを得さうな氣がする。(編者)

第一 創造的批評論

スピングーン著
遠藤貞吉譯 1.20

篇一
内容一斑——◇新批評△劇の批評と芝居△散文と韻文△創造的鑒識△天才と趣味とに
ついて△(附)クローチエ自傳

第二 無產者文化論

トロツキイ著
武藤直治譯 1.20

内容一斑——◇無產者文化論(生活の諸問題)△(附錄)労働者の自己教育(ルナチャヤルスキイ)△勞農ロシアの教育事業△教育、宗教及び財産(ルクリュウ)△慰樂への欲求(クロボトキン)△社會主義社會に於ける文藝と藝術(ベーベル)

第三 藝術の希望と不安

モリス著
大槻憲二譯 1.20

内容一斑——◇裝飾藝術と近代生活△民衆の藝術△生活の美△文明に於ける建築の前途

海外藝術評論叢書

海外藝術評論叢書

定價金壹圓參拾錢

版



譯者 竹内逸

發行者 足立欽一

東京市四谷區新宿一ノ八五

東京市京橋區新榮町五ノ二

刷印日十二月六年五十正大
行發日二廿月六年五十正大

印刷者 中川二郎

東京市京橋區新榮町五ノ二

發行所 東京市四谷區新宿一丁目八十五番地

電話 四谷五十一番
接替東京五六一四七番

聚芳閣學術部

藝術に依つてのみ、また種々様々の部面々々に於ける完全の達成に依つてのみ、運動を開始するものであると言ふことを知る。

永遠世界は吾々塵世をその美の微風に依つて光明を與へる。而て一方吾々は吾々の精靈の全力を捧げて、壯大、熱誠、成就の高まり行く道を歩まなくてはならない。

新世界は近づけり。

譯者註。

- (1) ヴィナス・プラセンペイ。この女像は曾て考古學者に依つて發見されたものであつて、普通禮拜偶像の最も古きものであると取扱はれてゐる。
- (2) マラソンの戰。雅典市東北十八哩の地點平野で、紀元前四九〇年に希臘の大軍と波斯の大軍とが戦ひ、希臘の勝利に歸し、世界大戰中の一つと數へられ、この地の發掘が武器のみならず、紀元前五世紀の品々に於て、考古學上著名である。
- (3) エイシアン。紀元四世紀頃に於けるアリウスの唱導せる教義を奉する人々。
- (4) 鶏脚の小屋。よく露西亞の寓話に現れるものであつて、普通魔法師の住居として取扱はれてゐる。
- (5) カツボ鳥—Cuckoo—これは無論啼聲から來た名稱で、希臘時代から同一名稱で、露西亞西歐諸國皆同一である。郭公などと譯されてゐるが、京都の郊外田舎では同じくカツボ鳥と言ふ。

- (6) マヤ。メキシコから中部亞米利加地方への土族總稱である。彼等の文化及び教律などは相當進んでゐた筈で、象形文字を用ひ、多くの神話や言説が遺されてゐる。言語學的興味の一中心地である。建築物も遺つてゐる。彼等の繁榮期は基督紀元頃だとされてゐる。最近に於てメゾン氏とスピンドン博士との探検が精細に行はれて、其報告は、本年一月十七日の「紐育タイムス」の第一面に載つてゐる。
- (7) 牧神。牧神に就いては言ふまでも無いが、牧場、森林、家畜の神である。この信仰はアルカデヤより始まるもので、音樂と舞蹈とを愛するものである。藝術の神アポロに笛を教へたのも牧神である。

—「吾々は何者なるか」

—「吾々は地である」と。』

曾て古代人がその死の迫るを感じた際、實に靜謐に思念したのである。即ち

「余は憩ひへの足を進めてゐる」と。

吾々は今その時代彼等がどんな風に話してゐたかを知る由もない。然し彼等は美の用語に於て思念してゐたのである。

だからして吾々は藝術に對する人間の愛を石器時代に辿り素めたのである。去にし吾々の道は辻棲の合はないものでもなければ偶然事でもなくて、實はその道は正しく吾々を眞の藝術の始源、知識の爲の眞の念願の始源へと導けるものであつたと言ふことは瞭然たるものである。而して今私は諸君に時代の深淵より告げる。即ち最も近代人なる諸君へ、幾萬年の永き間を住み來たりし諸君へ、而てまた地球の征服者なる諸君へ告げる。

吾々は總て藝術の大なる征服なるものを念頭に置いて、現在再び、美の慈惠的魅惑と言ふものを實生活に適用すると言ふことに就いて考慮を施さなければならない。然らざれば、唯物主義はその最後の痼疾玉を振ひ起こして、現代に於て覺醒の歩を進めてゐる熱慮と靈性との呼吸してゐる。

の根を止めるぞと嚇かすことであらう。

吾々は苦情のかずくを耳にするものである。即ち、「美と言ふものは吾々の生活に於て哀れにその芽をのばしてゐる。單獨なる美しい制作品は例へ見當らうとも、あちらこちらと掛け離れてゐて、到底この存世の低劣を匡正することは不可能のことである。⁽⁷⁾ 大牧神は死せり」と。

藝術の社會に於ては人は他の社會に於てよりも遙かに度々偽善にぶつかるものである。實に多くの人々が藝術に就いて「激論」を戰はしてゐるが、同時に彼等の渡世に於て藝術を邪魔物としてゐる。

一方また吾々の眼の向きを變へれば、吾々は多くの女性及び多くのヤンガア・ゼネレイシヨンなる人々が藝術の炬火を高々と捧げてゐる事實を見て悦ぶことが能きる。

吾々は決して悲しむ必要はない。吾々は微笑を浮べての欣悅を以て宇宙の諸現象を迎へるべきである。なぜかならば吾々は目下生活の新形態を構成してゐるからである。今吾々は既に藝術が純正なる文化何れもの礎石としての位置を得てゐることを知る。人性は再び創造的な仕事とは決して不要なる贅物ではないと言ふことを理解するの道を踏み始めてゐる。それは次第に日々生活の緊要なる要素として資格を得て行く。吾々は、生活の總局面と言ふものは、たゞ

の鋼鐵のやうであつた。祝祭の仲間入りをしてゐる輕舟のかずくは深更に至るまで湖面を素速く走つたのである。

現在に於てはその言語は死滅状態とも言ふべきシベリアのヤクツ族は、その祖先は大して以前のことでもないが、常に彼等祖先の春祭の歌を唄つてゐたのである。その文字上の翻譯とは左の通りである。

「萬歳！汝樹波に富む—綠りの丘よ！。今春の溫暖は饗宴を張れり！。今銀白の樺の木は芽葉をふく！。すべてこき櫻の木はその色艶に輝き！。草の葉は渓谷深く綠りなり！。時は今まさに競技の時さんざめきの時！」

〔5〕
「カツボ鳥は啼き、鳩は喉を鳴らし、鶲は銳く叫び、雲雀は中空高く舞のぼり、鴨の雌雄は並び飛び、斑羽の小鳥は歸り來れり。而て類族互に房の如く集りて大きく群居なせり！」

「汝人々よ！。お前の市場を晝暗き森の中に見出し、お前の市をありのまゝの葉込みの眞中に見出し、お前の街を水路に沿つて見出すその人々よ！。お前の君侯は啄木鳥、お前の長老はつぐみ鳥！。汝人々大聲にて叫べよ！。歌唄ひ續けてお前の若さを再びその手に取戻せよ！」

今に時は来る。その時とは吾々が石器時代に就いていろいろと學び知つた時である。吾々は

その時代を玩味し、またその時代から學ぶこと多きものである。たゞ印度人とシャマン教徒との慧智のみが漸くその傳を有してゐたまでのことである。

自然と言ふものは吾々に事物の當初に於ける多くの神祕を擱むやう激動を與へてくれるものである。然し吾々を激動する語なるものは何等無い。即ちさうした時代から今に遺る用語は何も無い。而て吾々はそれを辿り知る一つの道さへなく、また夢想すらない。吾々は往古人に依つての歌詞なるその歌は絶対に知ることは能きまい。狩獵の、忿怒の、襲撃の、勝利の、さうした場合の叫聲とは如何なるものであつたか。一體往古人がその藝術を夢中に樂んだ場合どんな語を使つてゐたのか。その語は永遠の死である。

マヤー⁽⁶⁾Mayaーの賢者達は碑記を遺してゐる。それは三千年の昔のもので、翻譯すれば斯く書かれてゐる。

『汝等また向後に於て再び吾々に顔を合はす者共よ！。若し汝等思考することを知る人間ならば、「吾々は何者なりしや」の問を受けることにしよう。

「（だが然し）それに就いて先づ黎明に訊ねよ、森に訊ねよ、波に訊ねよ、暴風に訊ねよ、愛に訊ねよ、地に訊ねよ！。—惱みに満ち溢れたる衆望ある地に。

の項目「⁽⁴⁾鶏脚の小屋」はその出典を同じくするものである。露西亞の廣大なる湖或は大河中の無數の島々は、かうした住居が普及する根據地となつて、村落の一大集團が出現したのである。茲に於て吾々は至極簡易に、最う一度、彼方遠き石器時代の情景は定めしかうであつたに違ひないと言ふその生活の有様を眼に浮べてみよう。

湖が見える。其岸邊には長く一列びの住居が在る。彼等の裝飾は何處とはなしに醇化されたものであつて、吾々に印度か日本を思ひ偲ばせるものである。石材、毛皮の衣、枝編細工、陶器及び赤茶色をした人間の皮膚と言ふもの。かうしたものゝ色彩が大まかな調子で調和を見せてゐる。丈高い煙突の突出た屋根は暗黃色の蘆や毛皮で被はれ、また葦草を編込んだ非凡な網仕事が敷きつめてある。棟木には反りのある扁材がくゝりつけてある。大獵の記念物はまた屋上の一角に裝飾用に供されてゐる。必ず白々しく艶のある馬頭骨があつて、それは邪神除けの爲である。家壁はその全面裝飾的圖案が黃、赤、白、黒で畫かれてゐる。住居の内、住居の外には篝火の焚場所があつて、上からは容器が吊下げられてゐる。—その容器は褐色と濃き鼠色との裝飾のある美しいものである。水邊には輕舟と漁網とが在つて、その漁網とは手薄く且つ精巧に出来たものである。獸皮は其邊あたりに干しひろげてあつて、熊、狼、狐、水狸、鼬、貂など

である。

ざんざめきも在る。春陽の勝利を歓び迎えて祝祭が催される。最早人々は舉つて森の中で環形に列び、春の真先きの訪れる新芽や花や若草を楽しみ、而て花環を造つてみんな頭に冠つたのである。速調軽快の舞踏は木笛角笛の曲に連れて進む。群集に取巻かれてゐる各種な衣裳と言ふものは毛衣と色糸縫の布感觸とでしつくり整つてゐる。人々は柔革の靴と手編みの靴下とを履いて優美高尚に潤歩する。彼等の後繼ぎをする人々は歌謡や舞踏をする爲の環を造り、その身には琥珀裝具、刺繡、石珠數玉、それに魔除歎を飾り着る。

これ等の人々はお互に好き合はうとする有様であつた！。これ等の人々は屹度仕事に感激を感じてゐた！。藝術なるものが最う大役を努めてゐた。彼等もまた屹度歌を唄つてゐたから、人は彼等の混聲を湖や森の遠き彼方に聽くことが能きたのであつた。

巨大な篝火は迫り来る夕闇の中に恰も黄金の生物が呼吸を吹くやうに燃えてゐた。人々の姿はそれを背景にしてすばしく或は沈痛に動き、生活玩味の官能だけは忘れずに漲り溢れてゐた。

縹渺たる湖水の水は晝間の暴風雨が一過して今沈靜に返れるが如く、また恰もライラック色

若しが人が美術館の陳列棚の硝子枠の中に古代の石造品を見たゞけでは、その人はその品々に反證的偏見を有つてゐるその誤認を正す事はむづかしからう。然し何か石造武器の本物を取上げ、而てそれを諸君の氣に入つた近代の藝術品と列べ合せてみれば、即ち諸君は其處に何等の不和なきに大驚し、諸君の神經を痛めるやうなことはなく、却つて諸君の手帖に高貴安泰の事柄一くだりを加へることだらう。

若しが人が古代の石器制作の一品の魂を知らうと言ふ慾望ならば何處かで諸君自身それを搜し出して来るがいゝ。最初は諸君がうまいことをしたとは全然思はないかも知れない。だがそれを諸君の掌中にひねくり廻して、諸君の指を同一の人間の手で出来てゐるその窪み穴に押當てゝみるがいゝ。然らば(石をも灰色に化せしめるものである)星霜の重なりの下から、碧玉或是暗綠玉の一片の上に、愛と美との美しい制作が忽然顯れ出るのを見る。

往古人の使用してゐた工具、道具及び武器の種類は、普通知られてゐるものより遙かに多種類のものである。このことは露西亞の新石器時代が有り餘る程證據立てゝゐる。由來その用途に對して吾々の想像が全然及ばない複雑な品々が當代の遺物中に混つて實に多く在る。

これは我意を得た氣持を與へるものではあるが、決して一自國の讚美に止まるものではない。

即ち一九〇五年のペリグウに於ける先史時代會議に於て、佛蘭西の一流鑑賞家マルテリエ、リヴィエール・ド・ブレクウル、カルタリアック、及びカピタンの諸氏は、この露西亞新石器時代の解説者達を熱誠なる歓迎を以て迎へ、而て埃及からの送品と同列に取扱つて了つたのである。果して吾々はこの心々に石器時代人の住居を描き出し得るであらうか。それに對して未だ何等の答辯も得られない。然し吾々の心に銘して置かなければならぬことは、それは屢々あることであるが、實に廣大な建築の場所に於てすら、單に褐色石材の堆積のほか何物も吾々の目に留まるものは無いと言ふ點である。

木材住居の遺物は家庭生活のうまく發達した形式を吾々に示してゐる。露西亞にもそれは正しく在つたのである。スラヴ人にとっては、その住居を地面から縁切つて木材の上へ載せ置くと言ふことは古代の考である。現今に至るまでも、シベリヤなりウラルなりの獵人達が獸皮を積込み藏つてゐるこの種の小さき平屋は、幾十世紀を通じて存續してゐるのである。交易の初期に於ては、かうした積藏處と言ふものは至極確立つたものである。露西亞の初代史家ネスターは、「埋葬は路傍木材の上」と記してゐる。これは古代の「死の伏屋」を意味し、然らざれば、實際に木材の上に載つた小さき豚小屋型の小墓を意味するものである。露西亞寓話でのお馴染

依つて明瞭であつて、且つ近代の刺繡がいと遠き往古の時代に辿り戻ることの能きると言ふことは、恰も、例へば、鹿と言ふものゝ一般的圖案が中部露西亞人には不明の地であつた極地方と何等の因縁が無くて、當然、中部露西亞の地に於て燧石物の中に混つて夥しく發見される鹿の骨から推し考へて、鹿が最北の地へ遁け去る以前の時代に結論を求めなければならないのと同様である。

(3) 石器時代の粘土汀線の地には屢々毒蛇の圖案が表されてゐる。—恰度エイシアーン—Aetian—

文化の最古の制作品のやうである。

藝術の本然本能に對して如何なる反證を試みようと現物事實には頭を下げるより仕方ない。即ち、例令お互が時間と空間とに依つて離れ／＼であつたとしても、裝飾する本性は吾々も土族民も總て皆同一ではないか。

兎に角裝飾的藝術の始源の問題は原始人に依つて産み出されたもの、即ち、窪みと、線とに依る原始感觸に遡るより仕方ない。何やら彼やら發掘されると言つても總てこの二つのものに歸する。底丸の巨大な土釜を捏ね造ることに、また線で造られる網細工の蓋のある極めて小さい盆を造ることに多忙であつた彼等往古人は、本能的に其工具は、求め得られる總てのものを使用

したのである。即ち、その手、その爪、羽莖、沛然たる驟雨で轉げ來た石、糸、網などである。各人残らすその家庭生活の用器は彼等が最善を盡しての價値と美とを具えたものを造らうと骨折つてゐたのである。

吾々は穴居民が、土釜の全表面を極く小さい窪み穴や若くは錯雜した圖案で被ふてゐるのを見て、彼等の慧敏感知する。吾々は彼等がその薄布の色染を粘土の軟かき表面に依つて造らうとする爲に先づ糸なり網なり且つはみづから纏える衣なりを使つてみると思ひ當つたその時の藝術家としての感激を偲ぶことが能かる。然しこれは矢張り到底彼等の氣に喰はなかつた。其處で植物性の色料を發見して熾に實地に適用したのである。どんなに夥しく彼等の創意に成るもののが地下に埋もれたに相違ないか、また時により水に依つて抹消されたに相違ないかはさして困難なる想像をめぐらすことでもない。必ずや定めし赤、黒、灰色、黃などの、薄色の一調子で、その着物、その髪、恐らくはその皮膚までも裝飾してゐたに相違ない。實に穴居民がその環境を裝飾するために爲した萬のことの事實は歴然吾々の名折れを證するに足るものである。また吾々が藝術の爲への念願と幾萬年以前この同じ地を歩いてゐた彼等の念願とは殆ど比較することも能きない筈である。

器具などである。

人間の心に交換の要求が次第に根を張つたが故に、意圖する制作品を産まうとする想像の力は、その展開に於て束縛を受けたのである。

無論吾々には不可解の間に葬られてゐる時代ではあるが、第三紀最新世時代と新石器時代との間には斷絶がある。無論何か宇宙的變動があつたことだらう。然らざれば、異種の土族人間が出現したことだらう。然らざれば、或はまた或る往古文化の輪轉が行詰りの時期に逢着したのだらう。何れにしても、吾々がその次の時代なるものに確然辿り行けば、その時代の人間生活と言ふものは前代とは異つたものである。明かに人間の心靈に恍惚の境を振散いてゐた獨居なるものは失はれて了つてゐる。人間は社交心の魅惑いろ／＼を知つて了つたのである。この結果この知識は藝術創造物に新しき靈的 requirement を求めたのである。——而て即ち爭鬪の新手段を！。現在多く發見される當代の頭蓋骨は鈍強の武器で斷骨されてゐる。デルヴィアン時代(第四紀)の人間は生活に決闘状を突きつけたのである。——それは新石器時代に有りのまゝが形に現れてゐる。

露西亞に於ては今までにこの第三紀最新世を解説するに足る何等の鉄中品も發見されてはゐ

ない。然し露西亞の新石器時代は確實にその藝術制作品の量に於ても種類に於ても夥しきものである。武器の最高典型の種類は總て發掘することができるるのである。

波羅的人の琥珀細工は紀元前二千年代に屬する燧石品と一緒に發見された。キエフ地方ではその禮拜所に磨きをかけた武劍を安置してゐたのみならず、アスタート—紀元前十六世紀—十七世紀—(前項註)⁽²⁾の禮拜にその源を發してゐることを物語つてゐる小さき婦人石像をも納めてゐた一種不思議な宗教的土族が住まつてゐたことが判る。

マラソンの戦には幾隊かの兵士が燧石の矢を使つてゐた。これ等總ては如何に各種なる文化を有てる時代が互に入り混つてゐたかを示すものである。

露西亞新石器時代の遺物は河岸や湖畔に武器及び陶器の類が夥しい。若し人が鳴り音を立てる斷片々々、それに續いて再び世に現れる形體や圖案と一緒に列べ合せてみれば、如何に想像力が彼等の胸に輝きを與へたかに驚異を感じる。特に特徴を見せてゐるのは陶器遺物である。それ等はそれと同一の裝飾が衣類にも、木造住居にも、人間肉體にも、即ち時の壓迫に生き延びることの能なかつた總てのものに適用されてゐたことを吾々に示すものである。

これと同一の裝飾での典型はそれが金屬の時代へと移る道程に於ても在つたことは發掘物に

ゐた怪獸の石化骨は、無限の想像物語を産む畫布を形造つてゐる。然し吾々はさうした畫布は恰も人間の手にて作れる仕事同様に貴重であると心得てゐる藝術家の魂へ委ねて置くことにしよう。なほまた第三紀最新世も人間の神秘なる前驅者としてそのまゝに打捨て置かう。これは推定と構想との範圍である。

石化骨や燧石に名残りを留むる擦痕と言ふものは、因つて生ずる藝術的價値に對して資料とはならない。然し前期氷河時代に屬するケリアン時代、アケリアン時代及びムステリアン時代などは既に藝術に接近してゐる。その時代に於ては人間は自然の王として取扱ひ得る。人間は近々と迫つて巨怪物と鬭ひ、自信のある腕力で楔型を造る。—その初期争具は兩端が尖つてゐた。マンモウス、犀、象、熊、巨鹿の類は人間にその皮を與へる。

人間はその住居なる穴居を獅子なり熊なりに明け渡し、最早人間は棧にて護り圍はれたる新住居を造つてゐたから、さうした動物即ちさうして隣人に何等心配はない。最う一つ次に、征服者なる者への愉快な方法が人間の頭に浮び、而て人間は獸類を馴致したのである。

此處に於て吾々の知るものは人間が直觀的に調和と律動の本能の支配を享けると言ふことである。第三紀最新世の最後の二時代（ソルトリアン時代とマグデレニアン時代）に於ては、人

間の住居、人間の家庭生活なるものは、藝術に依つて完備してゐると言ふことが解る。それ等總て寂しき生物に依つて果されたものは當代の往古人に依つて創造されたものである。

鹿群を見れば、それは直ちに人間にとつて實用上の優秀なる材料と考へられたのである。人間が鹿の角から造り始めたものは、矢、針、裝飾器具、杷手、其他である。最初の角彫刻及び最初の圖案はこの時代に屬するものであつて、同じく世に有名な小さき女像、即ちヴィナス・ブラセンプイー *Venus Brassempui*—もこの時代に屬するものである。⁽¹⁾

吾々は種々なる裝飾を穴居に見ることが能きる。その天井には動物による圖案がある。而て極めて明瞭なる事實は、當代の藝術家と言ふものが觀察に銳敏で且つ如實に動物の動作を寫し得たことである。樂々しく且つ自由なる線描は、その線描々々の一丸調和に於て日本畫素描の最上のものに迫つてゐる。

南部地方の穴居は疑ふ處なく往古人の有てる藝術の感覺を現してゐる。それ等の穴居には最初の鑽物顏料の跡を殘してゐる。而て時にはその天井に複雜なる圖案が在る。かうした住居ではその明シは吊し燈であつたことは疑ひ無い。殊に當代の發掘物の場合、それ等は寶玉の特質に近きものである。即ち、精巧な針、鹿用の手綱、孔を穿てる貝或は動物の齒にて造れる裝飾

ふことが至當である。往古生活の美と言ふものに對する踏究は軽てはその後に尾いて來る科學的證左を阻碍すると言ふ結果にはなるものではない。

少しは妙に思はれるかも知れないが、石器時代の願慮と言ふものが、美に對する吾々近代の探究に極めて近々しく思はれると言ふ事は中々に面白い。文化の輪轉は吾々をして往古人がその時代如何なることを自覺してゐたかに導き返すのみである。と言ふ私の意味は、調和への追慕の意である。吾々が近代藝術に於て調和に對する勞苦多き探究を爲すに當つて自然思ひ當るものは、往古人がその環境を、美しき技巧を以て裝飾することに依り、可感的に且つ調和的に造り上げようとしたその心盡しである。

吾々の生活のそれゝの單獨なる項目と言ふものは、又別な原素の思考を惠むものである。槍の銳利なきツ先と言ふものはそれによく適應してゐなければならぬ把手のことを物語るものである。工具にしろ武具にしろこれと全く同一の關係である。線の印刻物、網目の印刻物は實に能辯に物語るものである。穴居民に依る家庭生活なるものは慰樂と美との確然たる本據を有つてゐたことは明瞭なことである。

石器時代なるものを深々と味つてみると言ふことは吾々に生の歡喜の味ひとして到來するも

のである。飢餓貪慾の狼人なるものはその後に現れ來れるものに過ぎない。即ち石器時代の人間なるものは森の王即ち熊に酷似せるものである。即ち、豊富なる食料に満足し、家庭的に温かく、威力あれど善良で、鈍重ではあるがすばしこく、狂暴だが温情で・保全ではあるが博愛である。斯くの如きが石器時代の人間の典型なのであつた。

諸々方々の國々には、熊と言ふものは「人間が方向を轉じた」ものとして取扱はれてゐる古譚がある。此處にこの信仰に基づく禮拜が明白に存在した譚である。なぜかならば、人性は熊に於て人間生活の第一歩の諸相に酷似せる多くの特徴を感覺するからである。穴居民は生來一夫一婦であつて、これが即ち男性をして一夫多妻たることを止めしめる家庭なるものゝ發生であり、勞働勢力の生長である。彼が子供を有つことを重んずるのは彼の創造的な仕事を存續せんとする方法としての故である。彼は事物を創造し且つ裝飾する個人的願慮を有つてゐる。交換の要求、抜目の無いと言ふ習風、而て孤獨の恐怖。かうしたものは人間生活の其後の舞臺に現れ來たものである。穴居民が社會要素を認容した場合は、たゞ個人的自由の内面的感覺を事實好まない他人と、混ぢり合ふ場合に於てのみである。一例へば狩獵に於て、漁獵に於て。

地質學者に依つて假定されてゐる處に從つての初期の一時代の遺物は一即ち其時代に住んで

吾々に於て極く最近の事柄に屬するものは、美術館の入口の廣間に塵まびれの古金属が一杯列べられてゐることを事實に見るやうになつたこと位のものであつて、これは吾々の藝術の地質學的系圖上の汚辱を圖解するものではなくして、その系圖のいと輝かしき新芽を吾々に實物に依つて見せてゐるものである。これが當然畏敬の念を思ふ存分驅り立てることは、人性が幾萬年間存立したと言ふ事實に畏敬の念を呼び起させることゝ全く同様である。

吾々は僅かな青銅の斷片やつぶれた石の山積に依つて瞞着されてはならない。それ等は往時建設された老大なる都市々々の主要地點から發掘された單なる物々に過ぎない。また吾々はそれ以來時と言ふものがさ迷ひ歩いたその微笑を悟り知つてゐる。恰度これと同じで、石器時代なるものも決して地球の表面に遺されたる僅かな石片を以て表し得る筈のものではない。

神秘は石器時代の痕跡を^{より}周り住まつてゐる。その遺物を除いては何等天成の始原に歸因すべきものはない。彼等は多くの神々が地球の空を飛翔してその槍その矢を投げ與へたのだと思つてゐたのである。

所謂古典時代に於て石造武器の眞溯源に解決を與へることは能きなかつたのである。中世時代に於てこの任務はまた失敗に終つて了つた。漸く十八世紀の末葉に近づいた頃、造詣ある人

々が往古の人間制作品の始原開明に逢着したまでのことである。然しながらその報告書とても貧弱にして且つ漠然たるものである。そのうち僅かに實證を齎してゐるに過ぎなくて、大半は依然論及の餘地を残してゐる。これには何も不思議はない。なぜかならば若し町度一千年間と言ふ時間が譯解らずに経過してゐるなら或る特定の世紀に關して絶對の斷定を與へることは能きなくなつて了ふからである。——若し數千年間を経過した場合にはその困難はとても問題にはならないではないか。二三の理論には氷河時代でさへ宇宙の俄然たる大變動の代品だと取扱はれてゐる。

今吾々が改めて念頭に納め置くべきことは、往古時代々々の名と言ふものは、命名されてもゐると言つても、「條件附きて」であると言ふこと。而てさうした名と言ふものは往古人の制作品が見出された地方の名から來てゐると言ふことの二ツである。人は今なほとも豫期し難き財寶品々が地下に埋れてゐること、而てまた新しい諸理論の樹立に依つて今に如何なる變動が來るかも知れないと言ふことは想像に難くない。

既に過去に於てこの種の喚驚すべき實例が起つたのである。往古の石材制作品に就いての吾々の知識の中へ科學的諸理論をきめこむことは實に危険なことである。藝術的な見解と言

斯くかうした往古時代のことを言つてみた。然し彼等は決して吾々と縁無きものではない。實は反対に彼等はその生活を吾々の歴史のうちに見出してゐるのである。一體吾々が金屬を有たない生活の彼方遠く何處にその限界と言ふものがあるのであるか。

吾々露西亞人が常々志してゐることは露西亞藝術の根元を遠くへと遡つて探究することである。吾々は印度、蒙古、支那、或はスカンデナヴィア、或はフイランド人のグロテスクな想像などに關係を求めて考へる。然し吾々にも、古代以後の人間生活の動きに依つて遺された痕跡以外に、他の國家々々と同様に、美に對する人間の愛を説明してゐる最古代の萬國的象形文字の時代に遡る一般的な人間の道と言ふものがある。即ちそれが石器時代を通る道である。將來人性は更に完全なる生存を乞求めて繰返し往古時代の自由人の事を想ふだらうと言ふ事は充分に豫言し得る筈である。彼自由人は、自然なる物を解してゐた。而て自然に對しての心と心、手と手を結び合つて生きてゐたのである。是は現在の吾々が失つて了つてゐる一事である。調和と言ふことは往古人の意嚮であり、敏感と言ふことは彼等の思想であつて、常に均整と言ふ點に於けるその官感、裝飾の爲へのその愛と言ふものに正鵠なものであつた。従つて往古石器時代を原夫人の時代或は根から無文化の人間の時代であると斷定するのは貧弱なる知識か

ら來る量見違ひである。石器時代の狀態に於て、現在の吾々に流れ來てゐる動物的原始の跡はそれを辿る何等の縁筋もないものである。吾々はたゞ吾々の考へてゐるものから遠くへとかけ離れた文化ある人間をその狀態の中に手索ぐるに過ぎない。即ちそれは實以て全く遠きが故に吾々はそれを文化ある人間としての取扱上殆ど困難なるものである。即ちそれは吾々が「野蠻人」と言ふものに對する間違つた概念と全く問題にならない差違である。

現在に於ける火打石の矢を使ふ殆ど絶え／＼の、無文化なる土民と、石器時代の人間との相似は、町度恰も白痴と聖人との相似同様である。即ち彼等はたゞ退嬰者の姿に過ぎない。僅かに遺る種族的意嚮がこの兩者の間に因縁を遺してゐるまでのことである。事實石器時代の人間は湧き出で来る總文化の誕生の泉を裝置したのである。その人間は斯く爲し得る力を有つてゐたのである。然るに現代の野蠻人は自然なるものを統御する力と言ふ力を失つて了ひ、而てまたそれと同時に自然の美に對する感覺力の總てを失つてゐる。

人間の存立は、その絶えざる恐怖に襲はれて戰ひまた踏迷ひ、存立みずからを五里霧中の状態に仕上げて了つた。而て今吾々が闇からのがれ出来る道々を眼前に見る爲には、それ等を吾々の出發點から見出さなければならぬのは當然である。

貴高き色調を、天然の色もて染まる森林のそのあかね色を、細き線なる蘆や燈心草のその黃色を、而てまた穴居民の頑丈なる肉體のその美しさを、これ等いろいろを念頭に思ひ浮べようではないか。吾々はこの人間の住みし時代の景氣に浸らうとするには常に上の事々を念頭に止めてゐなければならない。果して吾々はまざまざとその有様をこの眼で摑むことが、而てその響聲を聽くことが能かるか。亦正確なる見解を得ることが果して可能であるか。

モルドヴァ土族—Mordva—の傳説が物語る處に依ればかうである。

「女神アンギイ・ペティはその忿怒の結果火打石を岩面に押しつけ賜へり。—土神水神や森の神、住居の神は、其火花より現れたり。女神はこの火打石もてかく成し遂げ、而てその石を地に投げ捨て賜へり。されどその結果地は神の姿となれり。女神は地に在る創造的力を滅し賜はざりしが故なり。而してその火打石は繁殖の神となれり。その故に一碼毎の、若くは敷石の下の、小さき穴は、小さき燧石神をもて蓋をなせるなり」

茲にこの傳説をメキシコの古譯に照し合してみよう。

「その昔メキシコの御空には幻しき星なるジトラル・トンナック神と星光燐然の衣服を纏ひしジトラル・キュエ女神とがお在せませり。この星に埋れたる女神はその男神の子として奇妙な

る生物燧石小刀を産み給へり。これを見て仰天せる他の子供達は其小刀を地に投げ捨てたり。地に打ち中りてその火打石は粉微塵となり、その火花の中より千六百體の男神女神は現れ出でたり」

斯くして吾々はこの傳説に依りエルジア土族—Eziga—の宇宙觀もメキシコ人の宇宙觀に引けを取らざることを知る。

ヴォチイ土族—Voti—の犠牲儀式のお告げの言葉は「石刀をもて汝犠を殺すべし」と。

讒辯的ではない露西亞人の「治療者」達の間で信じられてゐることは、「雷より降り来る矢は分娩の痛苦をやはらぐ」と。

イエム土族—Yem—とヴィエス土族—Viess—の後裔の心に遺る言葉は、「巨人達は森々の中に石を埋めたり」と。

まだ挙げれば幾らも傳説なり古譯なりは在る。

謹。モルドヴァ、エルジア、ヴォチイ、イエム、ヴィエス。以上何れもフィンランド系スラヴ族。

各土族は今なほ石器時代の神秘なる礎石を保藏してゐる。習風なり信仰なりには、裝飾器具類の臘るながらに遺る姿と同様に、史實以前時代の物語を傳へてゐる。

金属に因つての生活の「捺印」は茲に終りを告げる。國際間の問題も經濟學の諸々の會議も茲に終りを告げ、衆愚々々の役割も終りを告げる。獨り藝術のみはそれ等の上に超然存續する。全く別個の人間が瞭然と立現れる。それは吾々にその眼光を投げる人間であつて、石器時代から立現れる者である。由來藝術の歡喜は生活の全時代を通じて波打つて來たのである。その波と波との間に落込んだ奈落は實に底知れないものであつた。然しその波峯が高々と打揚げられた場合、即ちその波峯はいと高々であるが故に、吾々は廣々と眺望を得て波狀の辯別を得ることが能きる。

若し人に依つて考古學の「死潤」を尻目で笑ひ、考古學と藝術との間に截然たる無關係の線を引く人間があるなら、さうさせて置くがいい。また克己的な藝術愛好者までが石器時代に踏み寄つて思ひも依らない戰慄を感じても見咎める必要もない。なぜかならその時代とは生活に對する吾々の近代概念と實に遠き縁にあるものであるからであつて、一彼等にしてはこの肉眼に依つて蒼空の深界を見る事が困難であるやうに石器時代の實相を圖む事は困難なものである。人性は藝術の歡喜を知る。而て吾々は今尙その跡を尋ね得るものである。吾々は暫し金属の光耀を忘れようではないか。吾々は石材の驚異すべき幽境のかずくを、貴重なる毛皮飾りの

石器時代

もなく、敵意もなく、悪徳もなく、悲哀もなく、憎惡もなく、人間は神となる……愛と自由と至尊とは世界の宗教となる」

(4) ヤロスラヴル。地名、即ちヤロスラヴル公國即ちその首都の名。ヤロスラヴとも言ふ。莫斯科の東北。「美一征服者」の譯者註参照。

(5) ロストフ。ヤロスラヴル公國內の一都市。

(6) イヴルスカヤ。この聖像イヴルスカヤは多種なる奇蹟を發せるに依り有名。イヴルスカヤ村にて發見されたに依る。今この聖像はクレムリン宮に在る筈。

(7) 露西亞皇帝。ツァーの稱號はイヴァン四世が一五四七年に莫斯科に於て戴冠せるより始る。このイヴァン四世を描ける有名なる繪の筆者は本章に擧げられたイリヤ・ルパンである。無論これは宗教上の皇帝稱號であつて、ビイターダ帝は別に Emperor の稱號を用ひたり。

(8) ノヴゴロード。レニングラードの南方。露西亞の最も古き首都。キエフ以前の首都。ルリツクが奠都せりと史述さる。キエフに移された後「共和公國」として續く。

(9) ブスコフ。ノヴゴロードの南方。矢張り共和公國。ハンサ同盟諸市との交易最も盛なりし。以上何れも公國名は同時にその主都の名。

(10) バレルモ。シシリのバレルモの首都。十二世紀初頭に於ける王ローラゼルは種々美妙にして風變りな建築を造れり。

(11) アンドリュ。十二使徒の一人。露西亞の教會開祖と言はる。本章中の露西亞畫家中イワノブの代表作の一枚はこのアンドリュを描けるもの。

(12) アスター。フェニキヤの月神。ミルトンの「失樂園」及びバイロンの「マンフレッド」にこの名現はる。

(13) アリウス教徒。四世紀に於けるアレキサンドリヤの高僧アリウスの教旨を奉ずる教徒。

紀元前二千五百年の頃バビロニア人の文化はその全盛を極めた。吾々はこのことを吾々の耳に傳へられてゐる數語を以てしてさへ知ることが能かる。然し如何なる専門家もバビロニア人に就いての完成した物語を作らうとする勇氣は無かつたのである。

青銅時代及び黃銅時代の暗黒なる深底へ吾々は押寄せるることは能きない。殊に若し吾々が露西亞の地にそれ等を求めようとした場合は無論のことである。然しギリシャとかフェニキアとか言ふ國々は其國を周る住民達へ素破らしい印象を與へると言ふ天命になつてゐたのである。無論歴史中の或る短期間、例へば同じく露西亞に於ても事實であつた内部の族闘時代のやうな狀態であつた場合、ギリシャやフェニキアに於てさへも裝飾用具に關する藝術の重要な事は當然難ぎ倒さるべきものであつたらう。金屬と言ふやうなさうした新しい財寶の無難な使用は、さうした場合、當然眞の藝術的嗜好を脇へ押遣つて了ふべきものであつたらう。然し鐵や青銅や真鍮やの暗黒時代は實にながく續いてゐた。而て吾々は其處に探究を施しても何等の明るみを期待することは能きない。

裝飾用具の方面に於ての古代人達の創造的精神と言ふものは誤ることなく働きを現したのであつた。象徵的圖案に對する愛は恰も護身網のやうに人性を包んでゐたのであつた。然るに東

部露西亞に於けるモルドヴァ族或はチエレミシイ族の無教養なる近代の女は永い歲月を過ぎて彼女に流れ來てゐる藝術の價値及び彼女がその裝飾用具に具有してゐる藝術の價値に對して何等の概念作用をも有つてゐないのである。

譯者註

本章には註を施すべき固有名詞がかなり多い。内容に關係深きものゝみにとゞめる。露西亞の畫家に就ては適宜露西亞繪畫史に據つて欲しい。何れも著明の畫家である。

- (1) バガヴァアツド・ギイタ。これに就いては既に周知のことであらう。たゞこの場合、バガヴァアツドギイタが財寶と知識兩様共具備してゐた印度人の眞の文明時代への回想とその再現慾と言ふ點、及び本書一卷はバガヴァアツド・ギイタに影響するゝ點多きものだらうと言ふことを附言して置く。
- (2) デウルイヅ僧。英國を本據としたケルト種族の宗教運動。科學、哲學、道德など各方面に神託を受けりとなす。裁判までも行ふ。羅馬法王廳に反抗して西部歐羅巴に大なる潜勢力を有せり。羅馬の爲に滅ぼさる。解は彼等が崇拜する一つ。再び十八世紀にロンドンを中心地として新運動として復興し、今なほ亞米利加、英太利、獨逸にはこの宗派に所屬する人々あり。
- (3) クーブリン。彼の名は既に日本に於て周知の筈である。彼の藝術は現在に於て日一日と世界的に伸びてゐる。譯者はこの原著者がクーブリンの思想に共鳴する事實を知り特に彼の作「決闘」から左の文句を引いて置きたい。即ち「あゝ時は来る。その時には最早奴隸と主人とはなく、傷ける者も不具者

否、かうした物々は藝術に因縁を有するものであつて、吾々は古代人達の有つてゐた考想の清朗を美望するものである。彼等は自らにとつていと切實に意味を有つてゐた無形の符號を姿に現し、而て煎じ詰つた、明確なる、且つ複雑なる意味を有つ藝術的な形體を創造したのである。

吾々が搜し求めなければならないものは青銅時代の神秘なる蜘蛛の巣の幕内に在る。日毎にその中から新しい結論々々が運び出される。吾々は微かに、人々を一丸とした美しき祭列を觀る…。燐爛と輝く黃金の衣を纏えるビザンチン人達の彼方遠くにフイノ・トルコ人達(譯者註。フインラコの色彩、即ちその藝術の意)の混色の群れが通る。早晚更に深遠の地點からはいかめしく華麗なるアリウス教徒が現れ来る。更にまた深遠なる地點を求むれば、其處にはたゞ見知られざる遊浪者達の祝祭篝火のかき消された跡があるだけであつて、それは數限りなく在る……。

かうした總て吾々の爲に殘されたる贈物が即ち現今新古典主義なるものを建設して行つてゐるのである。ヤンガア・ゼネレイションはその後を追ひ、それに因つて強く成り且つ健全なる精神を有つ事だらう。若し藝術の鈍覺となつてゐる近代國民主義なるものが妖魅なる新國民主義と姿を變へるならとあらば、この後著の基礎石材とは、眞と美との純正なる意想に基づける

偉なる古代世界であらう。この眞と美とは、偉なる未來に於て、不日その平等の結果を現はすだらう。

基督教開元期に於けるいと古き露西亞の史記からは自然に對する空散的崇拜の魅力あるものを引出し來ることは能きない。世に言ふ日常生活に於ける「動物的」、飲めや歌への生活に於ける所謂「惡魔的」、古代史家の言に従へば所謂「不體裁なる」歌。かうしたものは、即ち史家なるものが僧籍拜命の人間、且つはさうした人間の場合部分的な見解に陥ることは免れ難い人間であつたから、本來大仕掛に胃の腑の中へ併呑されて丁度筈のものではない。教會はその手に依つて藝術を將來しなかつた。即ち藝術はその基礎を教會に任せ切つてゐたまでのことである。而て例へ新しい形體が創造されたと言つても、美しいもの同志がお互に踏潰し合つてゐた。

現在の吾々への確證斷言なるものはスカンデナヴァン時代以上に出でない。それ以前に於ける歲月中に殘されたる事柄に就いては概當指實であると言ふ迄のことである。吾々はたゞ美的目的物なるものが人々の生活に必要缺く可らざるものであると言ふことを知るに過ぎない。だが然し、吾々の探照燈は、家庭生活の明細に亘つて物語る世纪々々の的確と言ふ點に關する實狀と言ふものは總て見遁してゐる。

込んでゐた輕舟の集りと言ふに過ぎなかつた。吾々露西亞の人々は胸襟を開いて採用した。この北方人達を本來のノヴゴロードの地の手荒き征服者達として取扱ふ何等の理由はなく、兎も角彼等は自らを藝術に因縁深きものたらしめた生活法を取つて、即ち本然的に藝術的想像を具えてゐた露西亞平原での住民達と融合することに依つての優勢なる因子であつた特色を以て生きてゐたのである。

吾々はヴァランジアン人達が露西亞へ人間神格の觀念を持込んだ事を知つてゐる。然し果してそれ以前スラヴ人達は宗教の最も詩的な形體なる自然の力の神格化を爲さなかつたか。これが露西亞人の創造的靈感の搖籃であつた。

吾々は時代の奥底へ奥底へと押進むに連れて、現實的な實在の最後の國境にぶつかる。見た處、さうした國境の彼方にはたゞ砂塵の霞が残されてゐるに過ぎないやうに見える。而して好事家と言ふものは、吾々が採用しようとして訊ね求めてゐるものは單なるだらしの無い考古學の一理論ではないと言ふことを信ずるに躊躇して了ふ。然し事實に於て、其處には、過去に於て呼吸^{いき}を吹いてゐた魔力ある華麗の幾つかの原子が生き残されたのである。今や各人にとつて、藝術は、總ての人に明瞭である場所に存在して來たばかりではなく、また更に多く、更に

多くが時の面紗^{マスク}に覆はれて吾々の眼から隠れてゐると言ふことを會得すべき時である。而して現在薄ぼんやりとしてゐるものは不日透徹の歡喜もて輝きの灯が現れることであらう。この眺望者は創造者と成る。その中に過去と未來との兩者の魔力が存在する。過去を摑むことの能きない人は未來を想像することは能きない。

北方地方の巖壁に彫られた夢の如うに見える薄肉彫り、交易驛路に添つた棒立ちの小山々々、又長き懷劍の類や衣裳などは、實に意匠が豊富で、吾々をして北方生活を慕ふやうにさせるものである。これ等のものは吾々の想像が古色蒼然たる青銅の深味へ深味へと沈み行くにも増して遙かに原始的な美的形體に愛敬の念を喚起させるものである。

吾々の官感に訴えることの能きる筈の藝術と言ふものは、吾々から遠く遠くと遡つて行つた神祕にして塵霞^{ムゲ}の纏いた時代に於てすらも多量に在るものである。果して獸物生活同様のフィンランド人の奇怪なる表現物は藝術と別離さるべき筈のものなのか。極東國の妖魔的な形體物は藝術的透徹とかけ離れて了ふのか。シシア人達（（譯者註：黑海））の手に依つて先づ往古世界から第一歩に抜取り來れる作造物とはひどく嫌惡を感じするものなのか。西比利亞遊牧民の裝飾用具類とは粗劣なものとして葬り去られるのであるが。

ある」と。僭、若し苟もこのヴァランジアン人の驅逐がルリック一族の名が現れる前行はれたとあらば、では一體何時露西亞の地に彼等一族の最初の出現があつたのであるか。恐らくはロシヤ・スカンデナヴィア紀元と言ふものはその發足を年代の暗闇の底にあつたのであらうと言ふことは充分に可能のことである。

この問題に就いて吾々には、「歴史に關する」教科書中に、不注意も甚しき一事がある。即ち、古露西亞の歸因に關する有名なる文句、それは教科書に於て、露西亞の地から「遠き彼方の海を越えて」来るやうヴァランジアン人に大規模な招待を發したと言ふ意味に取扱はれてゐる。即ち、

「吾々の地は大きく且つ豊饒なり。されど此處には何等の秩序無し。來り而して吾々を統治し給へ」と言ふ有名な句。而てこの招待の結果どうなつたかに就いての常に答へられてゐるものには、「其處でヴァランジヤン人ルリックは八六一年にその弟達シニユス—Sineus—とツルヴォルTruvor—とを引連れて來れり」とある。

さてスカンデナヴィアの史記に據ると、「sin huus」とは、「彼の家族」を意味し、「trurer」とは、「彼の眞の護衛」の意である。だから私はこの有名なる文句に對して別な解釋を材料に供

してゐる。即ち、定めしその言説は古露西亞人側に於て發祥したものではなくて、北方ヴァオルホフ河(東方を通リロドガ湖に注ぐ)の岸邊に居住してゐた移民スカンデナヴィア人達の間から起つたものである。また屹度ルリックをロドガ湖の背後から、來たり而して軍隊勢力を組織してくれるやう頼まなければならなかつたのも、彼等移民達である。(このロドガ湖は全く海のやうで、必ずやルリックは常にこの地方へスカンデナヴィアから狩獵にやつて來たものであらう)。而てその人間、即ちその家族と護衛達とを引連れ、また冒險に對する相當の手段と事實と推定誤りなき冒險に對する愛好とを以て、その人間は、彼が同國人達の願ひを容れてやつて來たのである。斯くして程なく、この何々公と言ふ類に屬する人々、北方露西亞に於て地を領してゐた武士達、さうした人々は、既に一人の「公」の役目が武士の役目を遙かに超越し、政事家の地位をも併有してゐたキエフ公國に依つて侵撃を受けたのであつた。

第拾世紀に於て北方の文化はその影響が全歐羅巴に侵潤することとなつた。誰もスカンデナヴィアン時代の造形物が最吾々の心を引くに足る藝術的な問題を提興してゐると言ふ事は否定能きない。スカンデナヴィア人の紀念物として造る藝術は格段に落着いてゐて且つ貴高い。長い間それはたゞ雜色の帆を張り、龍を彫刻し、常に露西亞へ驚異すべきものゝ諸要素を運び

た時代の生活様式を美望し且つ賞讃することが能きる。

茲に質疑が起るかも知れない。それは、如何にしてキエフなるものが露西亞史の極く出發時期に於て、文化の一中心地と成り得たのであるかと言ふ點である。

然し果して吾々はキエフの基礎工事に就いて何か知識を獲てゐるか。

この市は世事に冠絶し、且つ優秀なる経験の持主なるヴァランジアン（譯者註。九世紀頃波羅的イナガイ）オレグ公の野心的となつたのである。それ以前に於ては、アスコルドとデイルとの兩公がキエフを完全に獲物にせんと腐心したのである。且つまた多くのノルマン種族が同じ態度を持してゐたのである。「而て多くのヴァランジアン人が相集りてスラヴ權内の地を獲んと入り來れり」と史記には書かれてゐる。

茲に注意を拂はなければならないことは、アスコルドやデイルが文化されてはゐなかつたが故に史記の何處にもこの兩者に就いて何等記録を残してはゐないと言ふ點である。斯くキエフの基礎工事に就いての事實は正しく古譚時代のどん底に押遣られて立つてゐる。無論吾々も矢張り傳説を莫迦にはすまい。其傳説には⁽¹⁾使徒アンドリュがキエフを訪れたと傳へられてゐる。ではなぜ使徒なるものが未墾の森林地方を訪れなければならぬのであるか。——然し若し吾々

が、最近に於てその行はれたのはキエフの附近であると説定されてゐるアスター Aste

rte 一の秘密崇拜なるものを思ひ考へるならば、キエフに於けるこの使徒の出現は充分に首肯き得るものとなる。この崇拜時代とは遠く紀元前拾一世紀から拾二世紀である。人間の心的感興の大なる心は既にかうした崇拜を庇護する爲に存在してゐるべき筈のものである。

茲に吾々が樂しく思ふことは、大キエフの總ては未發掘のまゝ今尚地下に平和な夢を貪つてゐると言ふことである。未だその華々しい發見の時に至らないのである。その發見は露西亞の過去の地中どん底に向つての唯一の門を殆ど押開き切ることだらう。かうした發見物に依り遠くスカンデナヴィアン時代及び青銅時代まで門外よりの光りが照込むことだらう。

キエフに於ての藝術の歡喜は全然隣國なるスカンデナヴィヤに依つてその胚種は時かれなかつたにしろ、この隣國の文化とお互に手を繋ぎ合つて發達して來たことは疑ふ餘地もない。何が故にロシヤ・スカンデナヴィア國の發生が傳説なるルリック公—Burik—（露西亞の開祖）に全然委ねられて了はなければならないのであるか。古き史記は大なる意義を有つ一事實を述べてはゐるが、然しそれは未だ曾て秘密を開く鍵としては拾ひ上げられてゐないのである。即ち「露西亞人はヴァランジアン人を遠く海の彼方に押遣つて了つて彼等には禮を盡さなかつたもので

今私がかうした記録に注意を拂ふに就いて豫め言つて置きたいことは、言語學的な奇好心の見解からではなく、直截の現實的報導の一片としてと言ふことである。この部分的な事柄も考古學的眞の證左である。斯く吾々はこの雅致ある文書に於て一大文化の斷片に觸れることが能きたのである。—第三者から強ひられることもなく、また單純な人々に對して何等の奇妙な感を與えない人間、即ちこの何等の詭辯を以て他人を欺くことを知らない種族は明瞭にこの記述の爲への目的など、言ふものはどの道有つてはゐなかつたのである。最う一度言ひ換へれば、彼等がこの記述を物語るに就いては何等「選民」を對照に置いての「低き階級」の人々を輕蔑したわけではなく、それと同じに彼等自身の感官に訴えて本統に美しいと感じ且つ優美だと感じた純粹なる誇りを自由に言ひ表したものである。かうした時代に於ては諸公の狩獵と言ふものは結構なる設備が整ひ且つ祝宴が華々しく催されたのである。—その酒宴の最中に諸公は、陪食の國外賓客達、或は新しい都會建設上の貴族に、次から次へと如才なき質問を投げたものである。—總ては一丸となつて調和の中に溶け込んだのである。かような生活は單純な人々の詩的な心境を亂したものではなく、却つて藝術に對しての賢明なる先覺者達が居住し且つ露西亞城邑の母地を統治してゐたと言ふ明瞭なる事實である。

今茲に私は史的記述の第一期に屬するものからの引用句を擧げてみる。（この史記は露西亞語と古スラヴ語との混淆で、それ自身に於ても九世紀の詩の一斷章となり得るものであるが、それが爲に翻譯なし難いものとしてその儘になつてゐるその厄介な言葉である）

「ヤロスラヴはキエフ大都を創建せり。而して金門を建て添えたり。また聖ソフィア教會をも、

また金門の上に告示教會をも、また聖ジョーデと聖アイリーン修道院をも。

教會の法規を愛で且つ諸書に通曉せしが故に、ヤロスラヴはその二ツを日ごと夜ごとに読み耽り且つ筆にても書きしるし、今われ等が刈り取る書文知識の種を斯く眞人の心々に時きつゝも。なぜならば書は慧智を世界のすみすみに至るまでも運び行く河なれば、また河の如く深ければなり。またヤロスラヴは金銀の聖器をもて諸々の教會を麗はしくも修飾し、而てそれにより彼が心は悦びに溢れたり」

ヤロスラヴが聖ソフィア寺院の華麗に就いて尊崇措く能はざりし點は、この吾々現代の荒唐無稽なる人間共がその輝かしい色彩の有様を觀て讚嘆することに引較べて見れば、到底比較にならないものである。ヤロスラヴの尊崇とは、その本質の上に、幾代も幾代も生きながらへよう藝術の記念塔を身に浴び感じた人間の高まつたものであつた。人はかうした藝術が要求され

眞中の扉は玻璃造り

終りの扉は格子の造り

人はこの記述に依つてエイゼアンの建築及びトロイアンの圓柱に戴く影像に相似の跡を辿ることが能かる。

而て次のものは騎手に就いての記述である。

彼等の衣裳は紺の布にて作られ

その柔皮なめしかばの帶は板金細工が嵌め込まれ

その帽は黒色で尖んがり

黒き毛皮に包まれて黄金の冠をかむる

彼等のすねは貴き縫なめしの靴を穿き

その爪尖きは錐の如うにとがり

その踵もまたとがりて

卯子も樂々轉ろげ廻らうその爪尖きの中

雀も樂々飛び舞はうその踵の中

これは明かに、例へ詩的であるとは言へ、ビザンチン時代の壁畫に見ることの能かる服裝に類する事を示せる記述である。而て最後一つのものは勇傑そのものを示せる代表繪姿である。

彼が帽キヤフの上に冠れる兜は焰の如く輝き

その金張りの靴は七色の絹糸にて飾られ

その糸々には黃金の鍔

海の彼方より將來せるその黒染エバジンの貂

その表をうづむ青緑びらうどの浮模様

そのボタンの孔には鳥の模様が織込まれ
而てその黃金のボタンには猛き獸の鑄込あり

一二三年前のこととキエフに於て古き時代の牆壁、壁畫、飾瓦、祭具の類の殘缺が發掘された。それ等は公の邸内の斷片に相違なからうと言ふことであつた。私はその結構な壁畫の四五點を觀て、亞細亞土耳其藝術の特質を漂はせてゐるのを知つたのである。石壁の築造物はそれ自身が技法上特別なる雅致ある作り方を示せるものであつて、常に建築に對して偉なる愛を有つてゐた時代を物語つてゐるものである。私の考では、パレルモ—Palermo—に於けるローゼル宮殿と言ふものが、キエフの諸宮殿に方案の根據を與へたものと思ふ。

このキエフの建築は事實北方と南方との合一に依つて出來たものである。即ちスカンデナヴィヤ一流の金屬の光輝が、吾々の兄弟達に依つて戰亂的となつた麗しき地、その古き都を造りしビザンチュム(今のコンスタンチノープル)の眞珠を以て鏤められたものである。そのエナメルの得も言はれぬ調子、小照畫の美妙、諸寺院の廣大壯嚴、金屬巧作の卓拔、手織々物の集積、羅馬典型の最上の工作法の混和、これ等總てが一つに熔け込んでキエフそのものの高貴なる流美を見せたのである。ヤロスラブ公に屬してゐた人々及びウラヂミール時代(譯者註参照)の人々は必ずや美的感官に特に發達を遂げてゐたに相違なきものである。然らざればその今に殘存するものが斯くも驚異すべきものであらう筈が無い。

茲に注目を拂つて貫ひたいことは、英雄叙事詩から抜書きの左に示す記録であつて、それは、人民の心々が、少時の間英雄主義の達成に好き放題に振舞ひながら日常生活の部分々々に亘つて親しく意を留めてゐたことが書かれてゐる。今示すものは、私人の家即ち「テレム」の記述である。

テレムを周りて鐵の柵

その柵の頭は彫られたり

どれもみな眞珠の飾りを戴きて

その門戸の床は鯨の齒張り

門戸の屋根は七十に近き聖像達

その柵内の眞中にはテレムテレムが造り建つ

そはみな黃金に輝く圓屋根の

そが真先の扉は鐵細工

と言ふものは一つとして無い。而て十九世紀の頃までさへもその多くの古き特色を保つてゐたのである。

極東地方からの影響はこれと異つてゐる。莫臥兒帝國の侵畧は實に憎惡すべき結果を残したものであつて、その藝術的要素なものは常に忽にされてゐた。亞細亞の神妙なる搖籃から雅致ある人間が育ち上り、また、支那、西藏、北印度の華麗なる面紗に包まれたことなども忘れられてゐた。露西亞は韃靼人の軍刀に悩みを受けたばかりではなく、また彼等の來冠に依つてノルマンディ地方から極東への大路をさ迷ひ歩いた利口な希臘人や聰明なアラビア人達が知つてゐた不思議な物語のかゞぐゝも聽いたのである。

當時に於ける外國使節の莫臥兒記錄及び史記と言ふものは、大遊牧民達との滅茶な、また文節の無數の混雜を吾々に殘してゐる。成吉思汗の本營地には確かに最高の藝術家や巨匠が住んでゐた筈である。

なほまた教科書中に採用された見解にはかうしたものもある。即ち、

「露西亞の諸公にその封土を捨てるよう、而してそれ等諸公お互への迫害者に當る爲に團結するよう指圖したのは韃靼人の輕蔑と冷酷との至す處である。また、それ等諸公に無慈悲なる勝

利萬能を教へたのも韃靼人である。だが然し、それと同時に、これ等遊牧民は亞細亞から往古の文化を運び來り、而してそれを彼等が以前荒し廻つたことのある地全面に亘つて振り撒いたのである」と。

然し更に感慨に堪へないことは、露西亞人自身が、彼等の爭鬭に於て、その古き武具に依り韃靼人入冠の以前に於てさへ、既にお互の城邑をぶつ毀はし合つたと言ふことである。古き史記からの語を藉りれば、「乾酪のやうに白く耀ける」露西亞の寺院や城樓の白き壁は血統を結ぶ藩族達の手に依つて幾度となく慘き破壊を受けたのであると。

羅馬郊外遠き彼方の平野をさ迷ひ歩き、今は荒廢に歸してゐるその地が、曾て露西亞皇帝の首都が自らの圍みを解いて五六百萬の住民の爲に華麗なる避難所を與へた地であると言ふことを誰も想像することは能きまい。それと等しく賢君ヤロスラフ公が東方國西方國からの國外賓客を饗應せる地「露西亞城邑の母地」なるキエフー Kiev の華麗を想像することすら能きない。キエフの伽藍の、眞の藝術家の筆に依つて描かれた總ては皆大きく其眼を見開き且つ清爽なる姿を具へた世界明智の人々の繪、その殘存する壁畫の部分は、一瞥にして藝術が事實に當時の（凡そ一〇〇〇—一二〇〇年代）露西亞人に如何なる意味を有つたかを物語つてゐる。

か仔細あつて此神の住居へ導かれたのであると言ふこと、及び諸君は向後再度ならずそれの有つ美の印象とそれに依る裨益とを變らず胸中に獲てゐるだらうと言ふことのこの三ツを知る。かうした仕事は一拾七世紀の古書からの引用句を藉りて來れば一「忠誠な心と端正な目的とに依り、また修飾の爲の高貴なる愛に依りて」描かれたものである。「なぜかなれば、此處に來てこの國民共は、恰も上帝の面前に在るが如くに佇みて作品々々を眺むるが故に」

その後の著名なる「奇蹟制作」聖像なる、聖母イヴエルスカヤー Iverskaya — が描かれるに當つては、その土臺となる木材は奉獻の水の中に浸され、格別に苦行の儀式が行はれ、顏料には既に石と化せる四五の聖者の名残りを混ぜ、而して畫家はその制作中、充分に食を攝る日は僅かに土曜と日曜との兩日だけであつた。これ等の時代に於ては聖像を描くの妙境は實に大したものであつて、若し眞の藝術家に闇が當つた場合、彼が體現すべきであつた永遠の靈的美に依つて發奮を感じたが故に、それが本統の幸福と言ふものであつた。

露西亞の壁畫には、純粹に裝飾的見解から認容された偉大なる伊太利人の見出せる幾つかの優秀なる法則の跡を辿る事が能きる。一方極東地方からは韃靼人の手に依つて我儘な色味が流れ込んで來たのである。露西亞史に於ける露西亞皇帝の時代(拾六世紀)に近づくに従つてこの

裝飾的要素は日常生活に於てその最高潮に達した。寺院であらうが、宮殿であらうが、はたまた小さき私人住居であらうが、總て皆均整の完全なる姿に輝き、それに依つて建築そのものがその修飾品と完き一つに融合したのである。諸君はかうしたもの眺めて如何様に論難しようとも何の結果を得ることは能きない。

波羅的海から黒海へと通する所謂「大水路」に當つたノヴゴロード— Novgorod — とブスクーフー Pskov — に於て榮えた諸藝術の高貴なる特性と言ふものは、ハンサ同盟文化の最上の諸要素の影響を受けたものである。ノヴゴロード共和國の貨幣に彫された獅子頭は實以て全く聖馬太の顔のやうである。それは遠き南方の海の女王ヴァイナスの北方巨人の夢ではなかつたか。現在白く塗られてゐるノヴゴロードの城壁は— このノヴゴロードを譽さず古き名稱のまゝ引用すれば「大城邑自らがその主であつた大都市」であるが— 定めしその城壁にはハンサ同盟の特質を有つ繪畫が描かれたらうが如うに見えてゐる。ノヴゴロードはその地の人間持前の「自由民」に於て、無論出任せの流浪民となることには顔をそむけたらうが、その持前に依つて不斷に侵畠を決行した點で有名であり、且つ賢明にそれを行つたのである。— だが然しそれはたゞ我儘の發露であつて、屈辱の感から來たものではない。即ちこの著名な古城邑には令聞の家柄

尊顔などの聖徳に歸せる力が發光せるが如く思はれる。……だが然し——然もなほ上記の尊顔そのものは、靜謐なる相貌を有ち、色づけの深刻なる點は測り知られざるものである。即ち奇蹟制作の尊顔である。

最近に至る迄誰もこの聖像なるものを純粹に藝術的見解から敢て認めようとはしなかつた。而て其後遂にたゞこの聖像の力ある裝飾的精神が見出されたまでのことで、それも由來この聖像の特質なりと想はれてゐた純朴と生地の儘と言ふ點を根據としてのことである。かうした聖像が描かれた時代に於ては、この見知られざる創作者達は、純眞なる裝飾的本能を有つてゐたものであつて、一幅の纏つた名作は無論のこと、教會の壁面々々を埋める、とてつも無い大作に於てさへも同様である。吾々はまだぐそその事實上の技巧や知識の點に於てこの本能に達するには暗中模索の状態である。然し所謂「専門家」のこの壁畫及びカンヴァス聖像に關する、無くもがなの記述は屢々かうした作品に對しての痛苦と不興の感情を書き立てゝゐる。

だがヤロスラヴル—Yaroslavl—やロストア—Rostov—に於ける教會の壁畫を見てその狂喜勇猛の色彩を充分に感じないと言ふのか。兎に角ヤロスラヴルに於ける先驅者ヨハネ教會堂の内陣をよく觀るがいゝ。……輝ける黃赭色を帶びる、と透明なる天色の如何に美しい調色で

あるかを！。碧青色を根に有つ灰色にぼやけたエメラルド色の何と樂々しく且つ平安な零氣であるかを！。而て如何に完くその零氣が聖體の赤色薦色の裝具と融合し切つてゐるかを！。その首に濃き黃色の御光を巻きつけた麗はしき天使長達は溫和らしい大空を飛翔して、その白き天衣はたゞ一つの影のやうに大空を背にして淡白に見えてゐる。而して金、その金色は決して諸君の眼に不快を與へない。全く完全に當を得た場所に塗られ、且つ全く完全に釣合つてゐる。實にかうした繪畫は優美の極であつて、又結構なる絹織物はこの先驅者教會堂（譯者註。ハネはバブテスマ）の壁衣裳として全くよく似合つてゐる。

ロストフに於ける教會堂の螺旋では、その小狭き戸口々々のことぐに於て諸君は色彩調和の意外な美しさに驚愕する。ふくよかな輪廓線で描かれた人像は邊りの不思議に透明な淡き灰色の壁から暎きり抜け出て諸君を眺めつけてゐる。また或る場所では諸君は燃上らう赤と栗色との調色の熱氣を感じるやうに思ひ、他の場所では平和が綠青色の集りの微風から來るやうに思ふ。而て俄然諸君は暫し立停まる、一聖書からの銳き一句を前にした時のやうに。——黃赭色の朦朧たる立姿を眺めて。

諸君は總てこれは偶然のものではなくて意識して創造されて來たと言ふこと、また諸君は何

を嘆くことは能きない。幸にも、私が言へる如うに、文化ある公衆の感興は逝ける時代の黄昏へとその舵を向け、その中に於て珠玉寶玉は閃々と輝いてゐる。價格高きものも價格低きものも。だが然し思想が物質的形體を與へられたに就いてのその思想の純潔に於ては等しく偉なるものである。吾々は萬一吾々がさうした時代の核處に引移されるとあらば、一體吾々は何を見知るだらうかを判別しようと考へてゐる。即ち定めし吾々は本然の藝術本能の慧智を見て驚愕するだらうか、それとも吾々の周りに恙なく天賦に恵まれた子供達を見るであらうかと言ふこと。だがさうではない。吾々の見知るものは子供達ではなくして賢者である。

今私は多様なる古代の藝術創造の部分に亘つて言ふまい。さうした忖度や説明は屹度その時代の巨匠や近代の古代精神體現者達の氣を損することであらう。それは藝術に於ける要素である調和の印象に過ぎない。而てまた今なほ美と、純淨と、高貴と、特異性との魅力を湛へてゐるものは無論藝術として取扱はれなければならないものであり、且つ如何なる誹謗も恐るゝに足らないものである。だがこの吾々の時代はさうではなくつて、藝術の創造を審判するに當つて多くの人々は、缺點や何の役にも立たないことに詮議立てをするやうに出來てゐる。これは既に過去の遺物となつた國に住まう若き時代の印章である。

今吾々は過ぎし世紀の三十年代及び更に最う一段と以前に遡つて考へてみよう。その多くは吾々胸底の情感の生動を與へる。即ちアレキサンダー一世時代の高貴なる盛美、カスリン大帝及びエリザベス拾八世時代の眞に裝飾美の光輝、而てピータア大帝時代の驚くべき藝術の聚積。多幸にも、かうしたものゝ大量は灰滅を免れて顯然さうした盛觀を今なほ物語つてゐる。

實に甚しくピータア前期諸時代が未知に終り不理解に終つてゐること。吾々のかうした時代に對する概念は「自家丹青」の知識——常に小知識の結果なるもの——の混交の爲に長らくの間境外に置かれ來てゐたのである。ピータア前期時代の家庭なり教會なりの最も安全なる研究は、吾々の心で諸處の美術館からの同時代の、什物や珠玉製品、衣裳、織物、聖像、その他のものを見とどめ置いて、その時代に、家庭なり教會なりを移植してみるとことである。

古代の露西亞藝術創造品中で、大半その最高の位置は、その限定を廣汎に亘つて當嵌めて、どうしても聖像に歸すべきものである。かうした「奇蹟制作」繪畫に於けるその面貌は、魅魔の如く胸を打つるものやある。それ等には影法師繪の効果に對する立派な理解があつて、背景の取扱に於て均整上の深甚なる感官を動かせてゐる。基督の顔、聖母の顔、祝福された聖徒達の顔——それ等は生々として審判の尊顔、善の尊顔、歡喜の尊顔、哀惜の尊顔、慈悲の尊顔、全能の

要なことである。

一體吾々は連續發展の足跡を印するに當つて吾々の藝術の中から何を捨て去るのであらうか。

か。一體吾々は何を探取するのであらうか。どの道へ轉向するのであらうか。—古典時代の新解釋の方向へか、それとも希臘羅馬以前の往古の發祥地に向ふのであらうか。吾々は原始時代の深底へと沈思するのであらうか。それとも新古典主義なる新星を、印度の草木の香り、フインランドの魔力、所謂新スラブ主義なる染々と魂を打つ思想などを加へて見出すのであらうか。

吾々はひどく問題に就いて胸を躍らせてゐる。—その問題とは、一體何處から藝術、歡喜が來るのであらうかと言ふ問題——と言ふのも今來つゝあるからである。—が然し近頃は一向姿を見せないでゐたが—。その反響を有ち且つ近づき来る濶歩の足音は既に吾々の感覺に觸れてゐる。

最近の功業のたゞ中に於て人は優秀を見せ且つ輝きを有つてゐる。と言ふのは、裝飾的な仕事に對して、また藝術の裝化性に對しての理解が急進に芽を噴上げてゐることである。藝術の本質的な目的と意味とは生の修飾として正しく理解を得て再び顯然と吾々の眼前に現れ來てゐる。即ちこの生の修飾は、藝術家をして、藝術を觀る人をして、巨匠をして、藏幅家をして、

創造の妙境に伴ひ入れ且つはその歡喜に雀躍せしむるものである。

今吾々は、過ぎし世紀に於て、沒義道に藝術に附着してゐた重荷物なる、さうした近代の大勢は風と散り行くだらうと言ふ希望への判断を有つてゐる。既に「飾る」と言ふ語が衆團の中に於てその新化の意味を有つてゐるやうに思はれてゐる。

恰度今社會の文化ある部分に於て、藝術の產泉と言ふものに就いて、切實に研究されてゐると言ふ事實は實以て深甚な價値を有つものである。即ち恁した晶玉の如き泉に因つて修飾の人間生活の偉なる價値が再び會得されると言ふことである。或はその來るべきものは全くの新しい典型であつて、吾々の現在の想像範圍を乘越えての一つの新紀元に及ぶものかも知れない。だがこの事だけは確實である。即ち、その新紀元とは、欣喜雀躍の熱凝狀態に於て最高の人間妙境に肉迫すると言ふことである。

だが然し花は水上にその蕾を結ばない。從つてこの新紀元を形造る爲には、社會は藝術家に隨伴しなければならないこと、人々は藝術家の協力者とならなければならぬことは全く必要なことである。一般公衆の念慮、展覽會、畫廊、個人蒐集館などの要求に因つての創造品を鼓吹して、藝術の仕事を援助する念慮が曖昧であつて、その曖昧なくしては如何なる根もその芽

て生活の流儀は眞の藝術の自然表現を吸潤して來たのである。古代の英雄叙事詩、民間傳説、民族的絃樂曲、それにまた吹奏樂器、レース、木彫物、聖像、建築中の部分裝具、總てこれ等のものは眞箇を物語り、自然なる藝術的慾願を語つてゐる。而して現在に於てすらも、總ての展覽會、音樂會、劇場及び公衆講演會は不變に人の群れである。ペトログラードと莫斯科とでは人口二百萬人中から五千人が展覽會毎に觀覽に出掛ける。(然るに序ながら倫敦に於ける美術展覽會の平均觀覽人は同じ五千人が一千萬人の人口からの割合である)。

次の一句はついつこの間のこととクーブリンが書いたものである。

「露西亞の村々では智能ある人々を歡迎する。さうした人々は農民の意想と更にぴたりと結び附いたのである。男にしろ女にしろ、誰か學生の或る新參者が村へ来れば、その新參者は信賴を以て村の小さき兒童達を教へるやう依頼を受ける。然るに一方その兒童達の兄や姉は音樂は無論のこと同じく外國語の勉強に心を盡してゐる。村から村へとさ迷ひ歩く寫眞師は方々で澤山な注文を受ける。畫家が若し肖像畫を、よく相手に似させて、カンヴァス繪カリノリュム繪かに畫くことができるなら、その畫家はこの田舎で生涯安全に且つ樂々と暮せると言ふ事は大丈夫である。私は今「安全」と言つた。と言ふのは村人がかうした見知らぬ藝術家達に篤實

なる擁護を與へるからである。」と。

私もまた單純なる露西亞人の生活に於ける藝術の愛に就いて、また教化に就いて、數限りなき例證を擧げることが能きる筈である。

然し僅か一つの論題に於て露西亞藝術の支配を受けた廣漠たる平野の各部々々を残らず取入れると言ふことは不可能なことである。だが吾々のこの時代から古き時代の奥底にまで吾々を連れ行かう本道の幾つかを描き示し、且つその里程標は指摘することは能きよう。

尙また諸君は既に近代露西亞の大家—セロフ—Serov—ツルベツコイ—Trubetzkoy—ヴルベル—Wrubel—モフーSomov—バクスト—Bakst—グリガリエフ—Grigoriev—などの他にルパン—Riepin—シリコフ—Surikov—ネステロフ—Nesterov—ルヴィイタン—Levitien—と言ふ風な秀技なる國粹作家達に鑑賞を有たれた筈である。また諸君は古匠に屬する古典作家ブルホフ—Brulov—宗教作家の異才イワノフ—Ivanov—露西亞生活の解釋者ヴェネチヤノフ—Venezianov—これに大肖像畫家の二人なるレヴィツキイ—Levitzyi—とボロヴィコウスキイ—Borovikovsky—などの名に巡り當られた筈である。然し乍ら、それと同時に、謂はゞ鳥瞰圖としての見解から、露西亞の特質的の國民的諸相と露西亞藝術の諸運動とを摘擧するのも必

調和渾一界の進化は

われわが理觀を

不變のエネルギーの上に

投射せる時に始まる

—バガヴァツド・ギイター—

小なる知識——それは塵垢を誘ひ来る。大なる知識——それは光りを誘ひ来る。僞作の藝術は——凡庸を誘ひ来る。眞箇の藝術は——精靈の歡喜を創造してその力は吾々將來の建造物の基礎となる。

今や吾々は人間をして一つの新しい路に依りて導き得る萬のものを健全に建設しなければならない。恰も有史以前に於て石器時代が新石器時代に置換へられた如うに、同じくこの吾々の時代に於ては、「機械的文明」が將に精靈の文化に依つて置換へらるべきである。⁽¹⁾ デウルイヅ僧——Druid——はひそかに慧智の諸法則を哺育した。それと同様に、精靈の生產王國では、留意は知識と美との養育に進み、幾多の家々は既にその聖化の火を以て煌々と照明し、幾多の人々は結び合ひ、彼等一人々々はまた新しい構成に於ける創造的原子である。同じ思考が各種の國々で一齊に湧き出て、恰も強勢なる一本の植物がその根から幾多の新しい芽を噴き出すが如き姿である。

友達諸君よ。諸君は露西亞の藝術に就いての話を聽きたいと言ふ御希望ですか。諸君は露西亞の藝術に感興を有つてゐられるやうだし、且つ同情のある期待を有つてゐられるやうである。諸君は正しい。由來露西亞の國民は緊密に藝術と觸れ合つて來たのである。往昔の時代以來總

藝術の歡喜

一九二一年九月十九日カリフオルニヤ大學に於ける講演より一

それを納めるべき場所を造つてゐました。どうかどちらの立場が上乗であるかを會得して下さい」と。而て私は如何に彼が自分は只一個の否定家に過ぎないかをまさぐと悟つて眼をぱちくりしてゐたのを見たのである。而して官僚生活に於けるかうした拒絕根性のかずくが如何に吾々度々の行くべき道に邪魔をすることか。たゞ譯なく否定をする。然し彼等の眼が開かれたらう曉には彼等は自らの頑迷を知つて驚愕することだらう。而して吾々はこの吾々の日々生活に於て如何に容易に新しい使命と新しい王國とがその最も生命ある方法依つて建設されるべき筈のものであるかを彼等に示すことが能きよう。

夢ではなく事實であると言ふことを念すべきである。而て結果と言ふこと、而して一體何處から生動の想念を擋むべき掌握のエネルギーが來るかを。私の友達諸君よ。たゞ大氣の永遠の力からのみ、太陽の永遠の力からのみ、たゞ光りからのみ、この生命賦與の微笑は降來する。

譯者註。

(1) ガリレオ。一五六四—一六四二。ガリレオの事に就いては言ふまでもないが、この事件は一六年に羅馬法廷に呼びつけられ、宗教裁判に依つて彼の理論は徹回された。太陽の黒點は彼の發見。

(2) ソロモン・ド・クス。十七世紀の中葉に死せる佛蘭西の機關學者。

(3) フルトン。一八一五年紐育にて死す。亞米利加の機關學者。ベンジャミン・ウエストに弟子入りして畫修業をやつたが駄目で、機關發明家となり、既に潛航艇の研究に着手してゐた。所謂蒸氣船の大功勞者。當時の亞米利加の第一の戰闘艦にフルトンの名が冠せられたのを見ても彼の偉業は判る。

(4) ピアツチエ。一七四六—一八二六。伊太利の天文學者。

(5) ブルウム卿。トーマス・ヤングとフレネルと同時代の爲政家。其他の人名詞は著名。或は註の必要なし。省略。

(6) バベルは元來「混亂」の義である。それはこの町が Habesh と呼ばれるアビシニヤの地にあつたからである。これはアラビヤ語の「混亂」に當る。而てこの町には基督教徒、猶太教徒、マホメット教徒、その他アラビヤ人、エチオピア人、そのほかの小種族が混亂居住してゐたからである。

(7) 鳩。この場合はダアブで、聖靈の意。或は平和の使者の意。鳩小屋の鳩はピジョンで、物質的で鈍物の意。

と言ふのはそれが完全に高いものでないからです。それは恰度數學でのやうに吾々には何等生命を有たないやうに見える奇妙な數字を以て行はなければならないと同様なのです。然しその適用に於ては其等の數字は生活と言ふものをその全原子に於て吸引する磁力となるのです。而てたゞこの方法に於てのみ人は吾々を自明の理に導く眞の階段を見出すのです。人はいと高き山嶺からいと輝かしき眺望を完全に得ることが能けるのです。而て人はいと明快なる眺望を得て如何に眼に訴えてゐた破壊なるものが事實としては一大構成的事業の一部分であるかを識別することができるのです」と。

私は兒童に多くの友達を有つてゐる。而て私は常に私の展覽會にこの小さき來觀客のあることを特に光榮に思つてゐる。なぜかなら一體誰が最大容易な方法で藝術の生命力と言ふものを擋むことが能かるのか！。—素純なる人々と兒童即ち自然の人々。而して吾々は、この新紀元の新しき國際的軍隊を組織するには、決して素純な人々と兒童とを忘却してはならない。この新紀元はその新しき武士を有たねばならない。而てこの軍隊の最上の左券—榮譽と永遠との眞の旅行免狀—とは眞の文化の印章である。この左券を有てばあらゆる交通機關はその柵を開くべきものであらう。而てこの生命ある印章が如何に素純で且つ麗はしきことよ。

吾々既に美の最大の敵手達とは愚俗・偽善・利己であつて、就中蒙昧であることは覺知してゐる。この蒙昧は例へ害毒を浴せるにしても大して危険なものではない。なぜかならこの疾病は多分數はれる道があるだらうからである。而て私のこの療法に對する廣告は第一の根元に週ると言ふことであつて、眞の事實に根據を置いた誠實なる觀望がかうした病苦の人間の眼を開くと言ふことである。私の知れる一婦人で、藝術の意味に就いての解釋を講演し且つ篤實にその解釋に就いて骨を折つたその婦人は或る時私に、一體彼女の職業は何と言ふ名前を貰つたらいいだらうかと言ふ質問だつた。私は答へた。恐らく最上の命名は「恋掃除」だらうと答へた。而てこれは決して戯談ではなかつたのである。なぜかなら私は、若し何れもの人間がたゞ生活の塵垢と曇れる窓とに依つてその視覚を朦朧とされることがないのならこの美の王國へ晴れた眺望を得ることが能かると言ふことを主張するからである。

また私は他の一例としてこれと同じ論題に依つて私と話したいと希望した或る官職の人との會話を思ひ出す。三時間の會話中相手は私が話したことを残らず肯じなかつた。而て私は彼が言つたことは残らず胸の中に保留して了つた。最後に私は言つた。「さて貴方はこの三時間中私の言つたことを残らず否定して了ひました。然るに私は貴方の言はれたこと残らずに對して

心情を割り刺す事ができる。何と言ふ破壊の神格化であるか。吾々は斯くの如き完全なる憎悪を成就させる爲に吾々紀元の第二の第千年に迄も及ばなくてはならなかつたのである。同時に偽善は満潮を示してゐる。なぜなら吾々は國際法なるものに依つて大嘆をついたからである。憫むべきは國際法の教授なるものゝ地位が今や不安定であると言ふ事である。平和を論議するにしてもその卓の下に置かれた最大威力の爆弾は殆溼り込んでゐる。最早救助の方法も無い。既に彼等が正統なる道に立戻らなかつたからには何等救はるべき可能性は無かつたのである。

若し誰か私にこの事柄に就いての美の生命ある局面を否定して論判しようと欲する人があるならば、私は悦んでその人と論戦を闘はう。私は自らの本據に最も確實なる歴史的事實を握り、且つ私の言々はたゞ結果の上に根據を立てゝゐる。若し人々が私を單なる一個の理想主義者であるとして非難する場合には、私は樂々と答へることができる。即ち、「私は現實主義者である。なぜかなら私は美の綜合に於て知識と事實とに信據を有つにも拘らず貴方は斷屑記録に信頼を投げてゐるからである」と。

なほまた私は、藝術に就いて物語るに當つて、必然上、藝術の偉なる表示に關し、シャリアピンと言ふ風な人々の表現、ワグナーと言ふ風な人々の表現に關して是非言はなければならぬ

い。さうしたものに對しては、誠實を有つての小さき一眺にも實に神秘的なる信服力が在るが故に、それに近づけば、諸君は純淨なる呼吸を身に享けるのである。近頃主學院に於てまだうら若い一人の少年がその第一回の獨奏會に出演した。而て人々は彼の藝術を聽いて全く異なる心々が統合されたことを明白に知つたのである。敵意を有てる人々ですら暫しの間統合されてゐたのである。若しこの原則が確定なものならば、疑ひもなくかうした瞬間は永遠へと擴展されるべきものである。而て總てかくも面倒な社會的乃至國家的諸問題は直ちに解決さるべきものである。なぜかならさうした問題は事實としては無きものにもなるからである。この美的權勢の支配に於て諸君は美的翼に護られての最も單純なる方法に依つて表示された吾々の宗教の相貌を明瞭に見ることができる。

私は最も理想主義的なる想念と言ふものは最も實踐的なものであると言ふことを常々信じてゐる。而てまた私の過去の藝術的人生行旅に於て關興したことのある孰れの組織に於てもそれが實證されたのである。若し誰れかゞ、何かそれは餘りに理想主義に過ぎて役に立たない、從つて生活そのものと全くかけ離れたものであると論難する人があれば、人はこれに對してかう注言する事ができる。即ち、「失禮ですが貴方は間違つてゐます。生活からかけ離れてゐる

が愛、と美、と行動の三つを聲明する時に於て、吾々國際的用語の範式を發言してゐるのであると言ふことをまさぐ」と知る。而して今は美術館や劇場に屬してゐるこの範式は必ず日常生活に喰込まれねばならない。美の印章は必ず總ての聖化の門を開く。美の印章を翳して吾々は歡喜をもつて歩む。美を武具として吾々は征服する。美に因つて吾々は祈願を込める。美に依つて吾々は結合される。而して吾々は今次の數語に斷言を與へる。即ち・白雪の山巒に於てどはなくして、都市の騒擾のたゞ中に於て一而て眞の實在の道を明確に知ることに依つて吾々は微笑を浮べて未來を迎へると言ふこと』

この二つの評語は鳩小屋に閉ぢ籠つてゐる人々には理想的に過ぎて役に立たないと思ひ込んで了ふかも知れない。またこの現代、この錯雜した生のたゞ中に、その人々の實踐的適用に就いて疑念を懷くことも能きよう。然しこの疑念はたゞ、制限されたる知識の人格、都市生活の重壓に依つて狹苦しくされた人格から來るに過ぎない。然し吾々の道はそれ等と關係はない。なぜかなら吾々は既に彼等の制限された知識の建物が如何に容易に破壊されるかを見たからである。だが然し相手はいと單純なる靈長を指すのである。それは暗黒なる都市からの者ではなく、田舎町や村落から、また能力寶藏の囊が伸びつゝある世界からのいと自然に近しい人々で

ある。かうした人々から諸君は全く異種の感應を受くべきものであらう。單純なる露西亞の百姓ですら、藝術の目的物には、金錢上の富に於てよりも、更に鞏固なる、更に確實なる價値標準があると言ふことを知つてゐたのである。これと同じ寸法でこれ等百姓共は音樂や歌の意義を感じてゐたのである。而て眞に若し毒蛇が音樂に依つて蠱惑されようものなら無論それが人間の心靈に與へる緊要意義は蓋し大なるものでないか。

私は何等の誇張なく切言する。それは、今後は、一つの政府は、充分なる思慮を施すに非ざれば、その政府單獨が藝術の總ての分枝及び高き知識に於て表現される美の尊嚴を支持することとは能きないと言ふことである。

而して若し流罪人達がその交換事實として鐵砲ではなく美を運ぶとあらば、人々はその流刑なるものを打毀はす道を見出す者は一人や二人ではないと言ふことを信じてもいゝだらう。常に美が征服すると言ふことに就いての一點は、懷疑的な人間すら迷惑を受け、何か彼等以上のものと一緒で仕事を爲さなければならぬと悟り始める時に於てどある。

低級な方策に屬する總ての可能性は既に試みられてゐる。吾々はさうした驚嘆すべき毒薬、さうした總てを灰塵に歸せしめる爆弾を有つてゐる。吾々の小刀は物凄く磨がかれてあらゆる

以て、この人々の未來を確定しようとしてゐる。諸國民はこの現代の切ない苦闘を嘗めながらも文化的財寶を保有するには何が故に實踐的であるべきかの譯合を理解し始めてゐる。彼等は慧智の神聖なる記號に適應して新しい線柱が實際に建てられなければならないことを知つてゐる。なぜかなら過去は未來への窓に過ぎなかつたからである。この窓を通じて新しく平和なる美の發見を友に捧呈するの歡喜が來るのである。

私は今年になつて度々人々から、今紐育に於て統合藝術主學院とコロナ・ムンディとが組織されるに就いて、既に如何なる理由が存してゐたのかの質問を受けた。疑ひもなくこの組織を知れる者共にはこの二つのものゝ發祥に一つとして出鱈目などは見出せない。この二つは吾々の時代の要求に答を與へたものである。私はこの二つの設置の爲に評語を與へよと言ふ需めを受けたので、私の論說から二つの引用句を擇むこととした。なぜかなら私は、この峻烈なる苦闘と萬國共通の合點違ひとの現代に於て、人々は純粹に實踐的であるべきであると強辯するからである。

私は主學院の方へはこの一句を呈したのである。即ち、「藝術は總ての人性を統合する。藝術は一つである。」分つ可らざるものである。藝術は多くの分枝を有つ。だが總ては一つであ

る。藝術は來るべき綜合の表示である。藝術は總ての人の爲のものである。各人は眞の藝術を享受する。「聖化の泉」の門は各人の爲に打開れなければならない。而て藝術の光は新しい愛を有てる無數の心々にその光を投げる。當初この感情は譯が解るまいが、歸する處それは人間の意識を淨化する。而して如何に多くの心々が何か眞實なもの、何か美しいものを探索してゐることぞ。だからしてそれを彼等に與えよ。藝術を民衆に持來すべし。果してそれは民衆に所屬してゐたか。吾々は美術館、劇場、大學、公民圖書館、停車場などを有たなければならぬばかりではなく、牢獄さへも裝飾され且つ美化されなければならない。然らば吾々は最早牢獄なるものを見なくとも済むだらう」

コロナ・ムンディの方へは、次の如くである。即ち、「人性は今宇宙的偉大の來るべき事變にその面を向けてゐる。人性は既に總ての發生は何れも偶發的のものではない事を悟つてゐる。未來文化の構成の爲への時機は手近く迫つてゐる。吾々的眼前に於て價値の再評價はその證明を進めてゐる。人類は價値なき銀行紙幣の廢墟のたゞ中に世界意義の眞の價値を見出してゐた。偉なる藝術の價値のかず／＼は凱歌を揚げて現世騷擾の總ての暴風雨の中を横ぎり進んでゐる。所謂「現世」の人々でさへ、既に能動的美の活ける緊要意義を理解してゐる。而して吾々

若し果斷にして自信ある探險者が、單に外面的に文明人なる特質に過ぎない偏見なるものと全然袂を別ち、事物の眞の姿に如何にして踏寄るべきかを知るならば、その成就の度は蓋し見事なものだらう。生活は今尙眺めた處たゞ暗黒なる中世紀似合ひの偏見を以て満ち溢れてゐる。然し乍ら、曾て斯くも純正なる知識と美との降來の爲の好時機は無かつたのである。

諸君は多様なる人々の個性の表現と言ふものは常に異なる形を取るものであると言ふことを明言して然りである。然しつつの状態は永遠に維持される。即ち、生活の諸相は文明化され得むなければならぬばかりではなく、無論文化の諸要素を有つてゐなければならないと言ふことである。而して諸君が未來なるものに就いて審議する場合、その未來なるものとは眞の文化の圈内に座を占めるものであると言ふ本質の根據を心底に有つてゐなければならない。

然し實に易々と理解される文化の概念なるものをその儘如何にして生活の中へ持ち込まれるであらうか。^實に言葉や提案に依つては無い。今正に必要缺くべからざるものは、その深遠なる現實的意味に於ける、酷烈なる、實踐的なる、また昏迷の勞役である。忘れられたる自然の諸威力からの来るべき收獲はこの實在の土壤に於てのみその花を開く。

創造と知識とに因つてのこの文化の實在は生活の中にその居を占める。たゞ偉なる美と慧智

とのみが生活の實際的な道に力を與える。而て今熱凝の仕事の爲への時は到來してゐる。而て何れもの働き人はみづからが單に錯綜せる器具の無意義なる一部分では無くて、更に到達の本道が眼前に開けてゐると言ふことを悟らなければならない。

然し乍ら人性は數ヶ國語を記せるバベルの塔は建てゝはゐない。人類の共通の言葉は何れの人々へも解り、その人々には、美とは命脈無き語ではないのである。而てそれから湧出る思考は鳩の如うに淨らかであつて、世界を翔り廻る。

實に吾々は特別なる注目を以て、また大なる歡喜を以て今日の若き人々を見守つてゐる。彼等の心臓は絶妙にして全く新しい道に鼓動を鳴らしてゐる。彼等は今新世界の建設に準備を整えてゐる。而て彼等が讃美を享ける時に於て吾々の胸は希望を以て溢れる。而てその讃美は許多である。なぜかなら今若き人々は働き、依つて以てその精靈に力を加へてゐるからである。この時に際して今亞米利加は多くの國々を援助する爲に腐心してゐる。この援助は吾々に喜びを與えるものである。なぜかならそれは未來の友達諸君からの援助であるからである。信念を有ち且つ明快なる先見を藏してゐる人々の援助である。

この國の人々は今青春の威力を將來の輝かしき狀態へと喚起しながら、美への展開の心情を

的證明に依つて惑星界を否定しようと考へてゐたことなどを憂き心で書いた。

二百年を経過すると、ヘーベルは彼自身を哲學的證明に根據を置いて木星火星間の惑星の存在は不可能であると言ふことを實證しようと手をつけてみた。然しその年にビアツチエー⁽⁴⁾ Piastziは先づ小惑星の一つを發見した。

オウギュスト・コントは、星の化學的性質を分析することは不可能であると言つた。五年を経過すると、スペクトル分析術の發明家達は化學的構成に據つての星の分類なる學說を樹てた。アロウゴーArago—チヒール—Thiers—プロウドン—Proudhon—は鐵道の將來を豫見することは能きなかつた。⁽⁵⁾トウマス・ヤング—Thomas Young—とフレーネル—Fresnel—は彼等が光波を發見した爲にブルウム卿—Lord Broom—によつて社會的にひどくやつつけられた。

千八百七十八年には佛國翰林院の人々を前にしてエデソンの蓄音機がドモンセル—Demoncey—に依つて證明されたに當つて、時の佛國科學研究所の會員であつたブイヨウ—Bouillot—はそれは單に誤魔化シ物に過ぎないと斷言して了つた。而て半年の後佛國翰林院は寄つて蝟つて「亞米利加詭學」には信據を置かないと言ふことに決めて了つた。

而て亞米利加そのものゝ存在が認められなかつたと言ふことも比較的最近のことである。

無論その通りであつた。無論その通りである。然し將來はさうでは無い筈である。

「たゞ行爲に依つてのみ判断せよ」、「結果に依つてのみ判断せよ」

今や論議ではなく行動の時に當つて、吾々はこの單純なる叫びをお互に念頭に銘して置かう。この苦鬪と争奪の物苦しき時代に於て人性は現代生活の總ての從屬的狀態を論議する事に飽き始めてゐる。然し、生なるものゝ眞の理解なくしては、この外面的にしてだらしの無い形勢に就いての救助も無効に終る。諸君は交通機關の諸方策、商業、生産、貨幣制度などの諸方策、また其他無數の關係ある諸問題を捕えて談論する事ができる。然し一體吾々はかうした「交通機關の諸方策」に依つて何處へ到着するのか。歸する處正に人殺しの良法としてでも吾々に役立たせようと言ふのか。否、平和と言ふものゝ無い間は、この「交通機關の諸方策」なるものは破壊の宣告を受け、また人間の生産物は總て世界の表面から持ち掠はれて了ふだらう。だが然し、人々が「機械的文明」と精靈の未來文化との間に、如何にして分別を立てるかを呑込むまでは、平和と言ふものは全然來ないものであらう。

眞の文化の根本的理解に中とは言ひ難く共、それに接近せるものを以てしてさへ、近き未來に人類を待設けてゐる光彩陸離たる總の發覺の爲に正統なる形勢を創造するものであらう。

過ぎし十年間に度々の大變遷が行はれた。(この講演は一九二三) 偏見と愚昧との壁牆は多く破壊された。たゞ聾者と盲者とだけが新しい威力のかずくが吾々の生活に來てゐるその戸叩きの音を悟らないのである。而してかうした新しい使者達の降來は恰も常に總て偉なるもの、降來同様に單純である。

知覺の贈物が三個、人性へ送られて來た。一聖靈の知覺が生物の中へ持來たされての宗教の愛の結合。藝術の奇蹟の知覺が美の王國を創造する。宇宙威力の知覺が吾々に一つの普遍的能力の想念を與へる。而して開明の新紀元なる名に於て、吾々はこれ等至福の贈物を、祈りに依り、且つ行動の爲への不斷の身構へを恃して、手受けなければならぬ。

(1) 宗教裁判所員はガリレオがこの物質的地球の廻轉に就いての記述を信じなかつた。ソロモン・ド・クス—Solomon de Caus—は蒸氣力と言ふものに信據を有つたが故に精神病院へ拋り込まれた。

(2) (3) フルトン—Fulton—は血を分けたその兄弟にさへ嘲笑された。ガリレオはパデウア大學の教授達が諸惑星や月に關し、また望遠鏡に關してさへ固く承認を與えないこと、而て彼等教授達は眞理の探究に、この世界や自然に依るのではなくて、資料を比較することに依り、また論理

恵みあれ

隼の如く爾の眼を遠き彼方の一黠に差向けよ
美に因りて爾は近づかん
われ一語を爾に告げん。美！

新紀元

は、諸君は必ず彼に訊ねるがい。『貴方は美の爲に何か盡す處がありましたか、今貴方がお話しになつてゐられることに就いての権利は先以てそれに依つて定まるべきです』と。而て尙また諸君はかう言ふべきであらう。即ち「美を見ての今日より、貴方が永遠の伽藍建立の爲にみづからの石材を運び来るまでは、而て其處に這入る権利を獲るまでは、貴方は居候として取残されると言ふことを常々記憶して貰ひたい」と。

世の中には曾て一物をも犠牲に供した事の無い人間がある。吾々は生氣の無い顔つきの人間が、勞苦を重ねて人々に有益なる源泉の附近に於て無駄に時を過ごし、その返禮として機械的人間生活の一杯を呑まうと待設けてゐる者のあるのを知る。吾々の聽く彼等の物語りと言ふものは昨日に對する後悔ばかりを繰返してゐる。而て全世界は彼等に對してはその戸は閉ざされてゐるのである。

而して彼等はその愚鈍が若し何か美の永遠の企圖が彼等に啓示されさへすれば忽ち消え失せるに相違ないと言ふことを理解せすにゐる。而て彼等は時代も疾病も偏見も決して彼等が精靈の永遠の歡喜に近づく爲に邪魔をするものではないと思ひ込んでゐる。なぜかならば、苦惱の伴はざる歡喜と言ふことが聲明されたのを以て明瞭である。

人々が當途なく諸君の當途なき道を容易ならしめてゐるのは、思ふも傷ましい光景ではないか！。諸君の仕立屋や洗濯婦のことを思ふも情けないことはないか！。而て諸君の御者達は可哀想である。なぜかなら諸君は彼等にどの方向へと教へることすら知らないからである。一而てその眞近くには美しい世界、歡喜の世界、創造物及び功業が横はつてゐるのである。愛撫の爲には、また美への微笑の爲には、第一門の鍵は廻はる。而て犠牲を捧げる願望の爲には第二門の門木は落ちる。

何物かを譲與するか、然らずば尠くとも何物かを提供するかに手を下せよ。但し利己もなく疑念もなく。その應酬は幾百倍かの増大に依つて既に諸君を待設けてゐる。而てそれは只諸君が生の律動を掌握さへすれば、未來生活に於てあるとは言はず、今直ちにこの眼前に在る。律動とは調和である。入闘の權利を得る爲には旅人は如何にして呈與すべきかを知る！。

爾は耳を有てるもの

爾は開ける眼を有てるもの

爾はわれを見知るもの

親愛なる人々。また私は諸君の手に、見るに價値ある美に對する記事が満載されてゐるべデカ案内記が展げられてゐるのを知る。鐵道、ホテル、クック會社、總ての設立機關、それ等のものは旅の群れ人の爲に設立されたものであつて、藝術と知識との殉難に因つて養ひ育てられたものである。親愛なる人々。諸君は諸君の所有に屬してはゐない創造の實驗室を如何に使用するかに充分考へを有つてゐられるだらう。諸君はその眼をこの人生の惑亂に依つて目隠しされてさへその抜け路は、美の芳香に因つて探し求めてゐるのである。

或る者は實に絶大の努力に依つて美のパンテオンを建てた。而て或る者は探究の功業を分類する爲に悩み盡したのである。

然し今此處に諸君には自動車が來着し、手馴れた料理人が「美の最選の食物」を諸君の前に運んで来る。然し諸君の胃はその食物を消化することができるか。而て諸君は聖院の食堂に這入る権利を有つてゐるか。諸君は果して諸君が藝術と知識とに足を踏寄せるに就いて何か名義を立てるに足ることを産み出したことがあるか。また大略諸君は與へるとはどう言ふことをするのであるかを知つてゐるか。また諸君は與へる者のみが享けるのであると言ふことを聽いたことがあるか。

然し若し諸君が聖院に踏込む何等の権利が無いとするならば、また若し諸君が諸君自身の勞苦に依つて獲た権利なるものが無いとするならば、而て若し諸君がたゞ受人たることのみ慾願するならば、諸君は世に言はれてゐる居候たることを曝け出すのではないか。なぜかなら諸君は只聖院中を何物をも其處へ加へる事をしないで虫のやうにむづむづと匍ひ歩いてゐるに過ぎないからである。諸君は地表に溝線を造り歩いてゐるのである。諸君は耻知らずで他人の功業を目差して石階に押し寄せ、愚かにも總ての創造物や事業は諸君への爲であると信じてゐる。

然し今諸君は今までに藝術と知識との進歩の爲には何等盡すことが無かつたのみならず、如何にしてそれに近づくかさへ知らなかつたことを言ひ且つ是認することに誠意を盡せ！ 而て實に無用なものは諸君の辯解である。

時に諸君は音樂を聞く、時に諸君は繪畫を漁り見歩く、時に諸君は敢て彫刻にその指先を觸れてさへみる、而て欠伸をしながら丸々一時間を犠牲にして優秀なる講演家の講釋を聞く。

然し諸君の貴重な肉體が自動車に乗せられて家庭へ運び歸られてみれば、一體諸君の受けた印象の結果とは何んであつたか。退屈、欠伸、食事中の世間話、誹謗。だからして富み且つ各種の可能性を充分持ち合はせてゐる人間が藝術と知識とに就いて諸君を相手に物語らう場合に

翼よ翼よ！汝は勞苦を重ねて伸びる。千九百十四年の初期人性は世界的動亂の中に投ぜられた。或る者は邪惡なる破壊をこれ事としたのに拘らず他の者は天理的に動き始めた。實に奇妙なる現象が巻起つた。即ち幾萬々々と人に噎れる人間が増すに連れて一方旅行者の群れはあらゆる交通の手段を辿つて群り込んだ。人口の明白なる減少はその結果として都會やホテルやに雲集の情況となつた。誰も彼も立ち上つた。誰も彼も動き始めた。だが恰も夢魘に襲はれた睡氣をぼろの人間のやうに、諸政府はその手を振翳して、彼等の進み行から行旅の上に、旅行免狀の裏書や特別なる許可にくだらない障害を與へて、諸國民の止むに止まれない天性を阻害することに腐心したのである。だが然し人間の群流は防塞と言ふ防塞を押流して了つた。

既に九年は経過した。（譯者註。この講演は一九二三年、ミズリ州ヴィシイ市に於て）其間人性はあちらこちらとさまひ歩き、善と惡とに就いての惣ての言葉は喋舌り盡され、而てこの物質的地球そのものはすつかり小さくなつて、行き處なき有様である。

だが然し大變動と危険極る實驗とのたゞ中に翼々は見知らぬ國を求め、勞苦を重ねて伸び始める。人の心々は高き嶺に達し、夢と霞む視覺の霧を破つて偉業への眞の能力は育ち始む。今翼々は勞苦を重ねて伸びつゝある。

たゞ吾々舉つて繰返し言はう一事は、最高の幸福と言ふものは、悲憤慷慨を去り、偏見と絶縁して、眞の美の橋梁を過ぎることに依つて護られるものであると言ふことである。その橋梁に於て亞米利加と露西亞とは結合さるべきものであらう。

實に私は転て亞米利加へ戻り、再びこの國に於ける私の親愛なる友達諸君と會ふことは誠に悦ばしきことであらう。

譯者註

- (1) ヘルミテージ。レニングラードの大美術館。佛蘭西のルウブルに當る。
- (2) アラン。幾分の歐羅巴人の血を混ぜたイラン人即ち波斯人の遊牧民で、紀元一世紀頃露西亞に侵入して以來廣汎に居住してゐた。

入關の權利

私は亞米利加へ来て、この國は露西亞と同じく大きい國だと感じたのである。なぜかなら、數多の國民が此處に同化されてゐるからである。私の二年有半の滞米中に一度として外來人に對する墳細の反抗も享けたことは無い。而してこの寛裕な感情に於て最上の未來は在る。この輝かしい形勢から最善の創造的威力は流れ出て来る。而てたゞ創造的な仕事に因つてのみ立派な一國としての均衡が創設されるのである。

結合及び實踐的合同の諸理想のたゞ中に於て、私はこの合衆國に於て、藝術の總ての分枝を結合する想念が如何に實行的に遍漫してゐるかを見知つたのである。而て統合藝術主學院が奉じてゐるやうな想念は必ずや亞米利加の結合精神に近々と迫つてゐるべき筈のものである。時に實施上の仕事に當つた人々や助言者達は私に、その取扱方に於て、この國の人々は常に極く狹量で且つ皮相的であると囁いてくれた。然し私はそれ等の人々に同意することは能きない。なぜかなら、私は過去三十年間の全人生旅行に於て、この國民は愚鈍ではない人々の集りであり、また衆團の要素的感情に深遠である人々であると言ふことを感じてゐるからである。然しそう君は衆團に對して、諸君が誠實であると言ふことを會得させなければならない。其處で至極單純なる人間達と雖その胸の戸を開放するのである。而して未來なるものの建設は若しその基礎

として總て前代からの經驗の綜合を認容する新來者の手に依つてはないとするならば、一體誰が建設するのであらうか。

或る立派に著名の一亞米利加人は私に今彼は兒童にのみ講演をしてゐると物語つた。お世辭の無い處この想念は、吾々が矢張り、新時代の人間が最も廣量なる方法に於て教へられなければならず、また戸と言ふ戸は打開かれてゐると言ふことを感じなければならない時に當つて、恐らく恰度今が最も優秀なる時機であると言ふことを指示することができるものである。而て吾々はまた從來如何に多くの戸が閉されてゐたかを理解しなければならない。この習俗を去り鳩小屋式偏見を去つた探求は驚嘆すべき未來時代人の集りなるこの國に與へられよう。

人は一體幾歳の頃から兒童に眞實なる事物を與へるべきかの疑問を有たう。だが眞にそれは生育第一日からである。而て兒童文學の特に醜惡なる誤られた習俗の總ては眞實にして深遠なるものに依つて平服されなければならない。兒童が穢される前、彼等はその直觀に訴えて、常に眞實なるものをその手に握らうと欲する。過ぎし時代の事物は常に兒童の爲の最上の娛樂である。而て若し吾々が彼等に眞實を與へることに全く勇敢であるならば本統に吾々は目的を貫徹することができる。

が變化に富んでゐると言ふ點に、この二國の人々が相似であると言ふのではない。また單にこの二國の自然の富源豊裕であると言ふ點に二者が酷似してゐると言ふのではない。たゞ人々の一般的性格が矢張りお互に觸れ合つてゐると言ふ點からである。

これ等二者相似の最も特筆すべき狀態は、この二國相俱に偏見の點に深く沈湎してはゐないこと且つ相俱に所謂明るき眼を有つてゐると言ふことである。次に言ふ特に意義の有る狀態は決して忘れられてはならないものである。即ち、露西亞に於ては常に過去に於ても現在に於てもまた將來に於ても外來人ことくが歓迎を以て遇せられると言ふことである。莫斯科クレムリン宮は伊太利人に依つて築造された。(1) 莫斯科美術館の幾つかは周知の如く全く國外作家達の永久的蒐集である。それに國立美術館ヘルミティッジHermitage—(ペトログラードに在り)の所有に歸した私自身の繪畫の蒐集は悉皆國外藝術家に依つて成立つてゐた。國有劇場では常に獨特なる佛蘭西か伊太利かの一座現れてゐた。

露西亞に於ては實に古き時代から斯くの如き有様である。聖ラウデミイル公はビザンチ(2) の藝術家をこの國に招聘した。アンドルウ公はアランーAlan—の藝術家を招聘した。莫斯科朝の諸帝は伊太利人を招聘した。ピーター大帝は和蘭人を招聘した。カサリン大帝—女帝—は數多

の佛蘭西の藝術家を招聘し、其後アレキサンダア一世帝とニコラス帝の在位中には多くの獨逸佛蘭西及び伊太利の藝術家が露西亞に住んでゐた。而して外來人は曾て何等の反感を懷かれたことはなかつたのである。而してそれ等外來人の諸種なる流義は残らず一大創造的合成の中へ同化されたのである。

小さな國々では吾々は屢々狹量なる悲憤慷慨の目に遭ふものである。而てかうした取るに足らない國々から生れるものは實に小さき結果ではないか。悲憤慷慨は最惡の偏見であつて、それに依つて結果したものは、戰爭と憎惡とあらゆる苦悶とであつた。而て若し吾々がこの狹量を超しての世界感情を有つことが能きさへすれば、吾々は既に来るべき美しき偉業への正しき道に在るのである。人は容易になぜ亞米利加がこの狹量なる悲憤慷慨と實にかけ離れてゐるかを理解することが能き。市俄古滯在の或る時私は偶然に實に數多の國民が一室に集つてゐる事實に巡り合はせた。而て直ちに私はその部屋には十五ヶ國の人間が一緒に集つてゐて相互に興味のある問題に就いて論談し合つてゐるのを見知つたのである。疑ひもなくこの會合は藝術へ捧げられたる會合であつて、—吾々は既にこの美の橋梁に於て最も根本的に異れる精靈のかずくさへもが結合されるものであると言ふことは度々承知のことである。

亞米利加と露西亞との間には基礎的なる同類關係と相似の點とが在る。この事はこの二國間の密接なる關係上に働きをなすものであらう。私が亞細亞への出發以前に於てこの二つの國民の將來の結合に就いて私の所信を述べると言ふことは悦ぶべきことである、

私は事實上この國を全般に行亘つて變轉として私の展覽會を開催し廻つたことに依つて、各種の方面から、この亞米利加を研究する獨特なる能力を發揮したのである。私は中西部、カリフオルニヤ・ニユ・メキシコ、アリゾナ、及びメエーレンの諸州を經巡り歩いたのである。——だからして全亞米利加の土生的美は私の眼前に見えてゐる。

私は亡命客として亞米利加へ來たのではない。誰も私を露西亞から驅逐した譯ではないからである。たゞ私は一人の友達として來たのである。二十五年以前私は亞米利加に對し既に感興を覺えて、藝術に因つてのこの二國間の密接なる關係を齎すことに對して助力したのである。其の頃は私にとつてはそれはたゞ直觀に過ぎなかつた。然し今では知識となり確信となつてゐる。而て私はなぜにこの二國が平和を持續し來り且つなぜにこの二國間の最も密接なる關係が可能であるかを理解してゐる。

これは啻にこの二國が自然が大であると言ふ點、廣大無邊であると言ふ點、また總ての狀態

悲
憤
慷
慨

而して總てを抱擁することが如何に愛であるかと言ふこと、如何に深々と美の官感に觸れてみなければならぬかと言ふこと、而て如何に生命をふけてその勇々しい表現即ち行動の意味を理解しなければならぬかと言ふこと。而してこの支配を一度吾々の日常生活に導き入れることが能きた曉に於ては決して吾々はこの支配を念頭から取遁がしてはならないものである。新時代は遠きに在るのではない。而て一日と雖も無駄であるべきではない。恐らく諸君は私になぜ吾々は絶えず愛と美との祈願を繰返さなければならないかを訊ねるだらうが、その理由はあから様に言へば、吾々の兄弟姉妹達でさへ實に多く彼等の日常生活に美を避けようと心掛け、而て過つて彼等はこの誤謬に對して満足な理由を見出さうと考へてゐるからである。然し若し美が天地の権であるならば、若し天地の大教主の發氣ざ陸離と輝くならば、例へこの光彩のいと小さき種粒たねづりでさへも吾々の生活に反映されなければならない。だから吾々はその結果を見るまで生命をかけてこの美の祈願——行動と愛の王冠——を是非共繰返さねばならない。

譯者註。

(1) ヤロスラヴ。紅陽玉の名を得てゐたグラデイミール大公の公子。後キエフ大公國の主權者となる。立法學者、一〇五四年に薨す。この時代は露西亞の宗教史及藝術史に於て重大な時代である。即ちグラデイミール大公が希臘教を根據として露西亞の國教を造れり。而て伽藍は十一世紀後半から頻りとビザンチンの形式が移入されたが、このヤロスラヴ時代の建築は木造で最も純粹な露西亞建築だと言はれてゐる。然も當代のフレスコは最も價値と興味とを有つものである。ヤロスラヴの肖像は今なほ聖フランセス同様フレスコに残されてゐる。

(2) スネグウロチカ。リムスキイ・コルサコフ作曲中の代表作。この「雪姫」にしても「サルタン帝」にしても、彼の歌劇は全く露西亞の傳説に呼吸を吹掛けたものである。一九〇八年に死せる大樂匠。この「雪姫」はオストロヴスキイの詩に據つたもので、春に對するスラヴの傳説からである。この姫は森と美しい春との間に産れた玉姫で、羊飼に依つて浮世にそびき出され、人間生活を慕ひ、戀に落ち、その戀が成就されんとする時、陽の光りに會つて空しく消ゆると言ふ筋である。コルサコフの音樂はまたこの筋を表す爲にその靈妙纖美の極が盡されてゐる。

であつた。而て疑ひもなく諸君は屢々畫家が音樂を求めてその音樂が色彩の意義を喚起するものであると言ふ話を聽かれたことがあるに相違ない。私はこの方面に就いては統合藝術主學院に於て、諸藝術の合同と言ふことは矢張り生活からかけ離れたものではないと言ふ意想が、一つの屋根の下に於て結び合はされると言ふことはどれ程必要であるかの結果に依り、且つ總ての音樂家、總ての畫家、彫刻家、建築家、劇作家が如何に合同することが能き、またお互に支持し合ふことが能きるかの結果に依り、意義のある經驗を得たのである。なぜかなら、藝術の異なる分枝々々と言ふものは心靈を苦しめるものではなくて、未だ利用されてゐない腦力の新しい中心が働くやう喚起するからである。而して、實に吾々は如何に多くの腦力の中心が無爲のまゝ見捨てられてゐるかを知る。

古き傳説に現れた天堂の門は單なる空想ではなくして、眞に恰度今吾々はこの藝術の生命ある媒介物が家庭生活にその足を踏入れてゐるに方つて、最も肝要なる時に遭遇してゐるのである。なぜかなら人性は今、政事上の陰謀に苦しめられ、その古き信仰の拒絕を見まもり考へつゝ、この建設的にして生命ある新しき情緒が如何に容易に日常生活に見出されるか眺めてゐるのである。

吾々は既に主學院の目的に於て、牢獄さへも美化されねばならないと告げた。而てこれは寓言ではない。人生の大牢獄は實に譯なく美化される、而て幸福と歡喜との眞の鍵はすぐ見出される。即ち歌の左券と繪筆仕事の證明書とである。而して終に若し吾々が文明と文化の美しき進化を見たとあらば、また吾々はそれと同一の方法に於て、如何に遙か美しく一層高き進化が吾々を待てゐるかを理解することができる。而してそれは近い。而してそれは生動してゐる。而してそれは各人に實踐的である。

而して若し誰かど、この現代の亂闘狀態に於てどうして諸君は藝術の諸問題なんかにかゝはつてゐられるのだと訊ねるなら、諸君は樂々と答へるがいゝ。「僕は僕の道を知つてゐる」と。友達諸君。若し吾々が古代に於て、美と言ふものが如何に生氣を有つてゐたかを明瞭に知るならば、實に廣大無限の美の放散の用途を吾々の日常生活に誘ひ入れることができる。若し中世に於て、美と言ふものが「天堂への門」として思考されてゐたのなら、また若し、十一世紀の慎しやかな古き史家さへもが、美に面しての當代の歡喜を證明したのなら、この生活の基礎の總ての實踐的進捗を計り、而て日毎に祈願を込めて、愛と美と行動の三ツを繰返し言ふことは實に全く必要である。

と慧智」の中から次の語を擇んだのである。即ち、「人性は今宇宙的偉大の來るべき事變にその面を向けてゐる。人性は既に總ての事變發生は偶發的のものでないことを悟つてゐる。未來文化の構成の爲への時機は手近く迫つてゐる。吾々の眼前に於て價値の再評價はその證明を進め得る。人類は何等價値なき銀行紙幣の廢墟のたゞ中に世界の眞意の眞の價値を見出して了つた。偉なる藝術の價値のかずゞゝは凱歌を揚げて現世騷擾の總ての暴風雨の中を横ぎり進んでゐる。所謂「現世」の人々でさへ既に能動的美の活ける緊要意義を理解してゐる。而して吾々が愛と美と行動の三ツを聲明する時に於て、吾々は國際的用語の範式を發言してゐるのであると言ふことをまさゞゝと知る。而して今は美術館や劇場に屬してゐるこの範式は必ず日常生活に喰込まれねばならない。美の印章は必ず總ての聖化の門を開く。美の印章を翳して吾々は雀躍して歩む。美を武具として吾々は征服する。美に因つて吾々は祈願を込める。美に於て吾々は結合される。而して今吾々は次の數語を斷言する。即ち、白雪の山巔に於てゞはなくして、都市騷擾のたゞ中に於て一而て眞の實在の道を明確に知ることに依つて吾々は微笑を浮べて未来を迎へると言ふこと』。

而して今諸君は以上の引用句は私が一理想主義者の夢として使ふのではなくして、實踐的生

活の爲への引用句であると言ふことを知る。若し盲者でない限り人々は、今藝術の問題は既に特別なる教育上の事項となつてゐるのではなくして、各人は美の問題は生活の最も活ける原動力となつてゐることを承認してゐると言ふことを見知らなければならぬ。往時人は富裕なる財政家が宏壯なる邸宅を建てたにも拘らず藝術家は飢餓の爲に死んで行つたと言ふ物語のかずゞゝを聽いたのである。今日では、事件は逆轉の姿となつてゐる。即ち、私は銀行家が價値なき銀行紙幣の爲に山上で死んで行く物語のかずゞゝを聽いたのである。而て吾々は既に全一國が古き掛錦の價格に依つて如何にうまくその國を維持する事が能きたかの話も聽いたのである。だから諸君は吾々の眼前にこの大なる進化が如何に實踐的に働きを見せ得るかを知るのである。なほまたこれと同様での深き意義の他の問題が吾々の生活に來りつゝある。五六日前の事、或る優秀なる建築家が私に言つた話では、彼は案出の最初から畫家や彫刻家と絶えず協同に仕事をすることが能きないと言ふ點には左程辛慨には思つてはゐないが、たゞ第一歩からこの要素的な呼應と言ふものに因つて何か本統の眞に調和ある結果を齎し得ることが能きると言ふ點からのみ辛慨に思ふと言ふことであつた。私は舞踏家から屢々こんなことを聽いたことがある。それは舞踏家も何か彫刻や造形的のものに就いて知る必要に迫られてゐると言ふこと

この中に諸君は宗教と美との本質にして生ける結合を得。而て宗教の最高表徵は美の最高の守護者と成ると言ふことを知る。

また吾々は僧ネスターに依つて書かれたいと古き露西亞の史的記録から引用句を藉りてくれば、如何にヤロスラヴ公子—Jaroslav—が知識と美とを感賞されたかと解る。即ち「ヤロスラヴはキエフ大都を創建し、金門を建て添えたり。美の法則教會の法則を愛し、而て彼は書物に達練してのたが故に晝となく夜となく書を書きまた書を著す。斯く彼は眞の人間の胸に今吾等が刈込んでゐる書文知識の種を蒔けり。されど書と形像とは二ツながら慧智を世界に運び流す河である。而て河の如く深きものである。またヤロスラヴは、形像により、華麗なる金銀の容器によつていみぢく教會堂を美化し、而てそれに依り彼はその胸を悦びをもて満たせり」

尙また吾々は其後の十五世紀か十六世紀の史的記録からの美しき引用句を取れば、それには統治者達への最高の精神的功業とは、藝術を守護することであり、また藝術を統治者達みずから的生活に用ふることであるとさへ吾々に教へてゐる。

かうした引用句を知つて人々は歌劇「スホグワロチカ」(雪姫)—Snezhnaya—に於て露西亞の皇帝は皇帝ではあるがまだ藝術家で然もその宮殿を美化してゐると言ふを知つて何も

驚くことではない。これは王位の爲への巧辯的な消息であるばかりではなく、またこれは人民の眞の信頼なのである。なぜかなら若し諸君が私に露西亞の村落へ這入る許可を得るに就いてどんな左券や證明書を見せなければならぬかをお訊ねになるなら、私は諸君に最上の警告を與へよう。即ち、歌を唄ひながら村落へ這入ると言ふこと、而て諸君の歌が持囃さればされるほど愈々歓迎を受けると言ふこと。若し彼等が諸君に證明書を要求する場合には、素描か繪かを見せること。それは最上理解の證明書であつて、諸君は永久その地に留まることが保證される。諸君は楯と護衛とを有つてゐる。

私はこれを以て到底露西亞の農民に就いて完全に明言したとは思はない。眞實彼等は牧神人の感情なのである。實に諸君が亞米利加人の農場に足を寄せた場合、矢張り上と同じ左券なり證明書なりが最上である。これは單に理論ではない。と言ふのは、私は至る處農民を見、且つ私は彼等に就いてその感情を得たからである。なぜかなら、都會の騒ぎに依つて腐らされてはゐない且つ自然の源泉からの美しいものに依つて育まれてゐる心情と言ふものは何れも皆同じ人間の心情であり、且つ同じ牧神人の言葉を語り合ふからである。

曾てコロナ・ムンディがその協會員達への何か標語をと私に乞求めた時に、私は私の講演「美

ナツと以前から、恐らく露西亞に於て第十五世紀頃から、吾々に一つの傳説が傳はり來てゐる。その傳説に於て基督は美の最高の守護者として一般に知れ亘つてゐる。この傳説に依ると基督が天國へ昇天されるゝに際して、四五の抒情詩人が基督に踏寄つてかう訊ねた。「主クリストよ。一體貴方は吾々を誰にお托しになるのです?。どうして吾々は貴方無くして生きて行けるのです?」と。すると基督はかう答へた。「わたしの子供達よ。わたしはお前達に黄金の山銀製の川美しい花園を幾ツも與えよう。而てわたしはお前達を育み且つ幸福にして上げよう」と。然し其時聖ヨハネは基督に近づいてかう言つた。「オ、主よ。彼等に黄金の山銀製の川の幾ツをお與えになつてはなりません。彼等はさうした物々をどう護つていゝか知りません。而て必ず誰か富める力ある人間が彼等を襲つて黄金の山々を掠つて行つて下さいませう。たゞ貴方は彼等に貴方の御名と美しい歌幾ツとをお與へ下さい。而てその歌々を感賞する者共、その歌手共に目を掛け且つ庇護する者共、總てが天堂への開放の門へ導かれますようその差配をお恵み下さい」と。すると基督はそれに答へて、「左様、わたしは彼等に與よえう。黄金の山々では無くてわたしの歌幾ツを。而てわたしはその歌々を感賞する者共總てが天堂への開放の門を見出すやうにしてやらう」と。

「伽藍」とよく似たテーマである。此處に附言して置くことは、この原著者が現在露西亞を脱出し、然も眞の露西亞精神の復活も待望んでゐる心が暗示されてゐると考へて至當だらう。

美——征服者

然しこの藝術に對する精進の狀態は矢張り亞米利加にも極く最近に到來する。私はこの土地に於て天賦もあり靈感もある藝術上の教授達を見て來たのである。恰度今私は統合藝術主學院に於てのロバート・エドモンド・ジョンズの一教室のことを思ひ起し、而て私は此處で働く卓越なる藝術家の眞の創造的な仕事がその生徒達に靈感を與えることが如何に近々と迫つてゐるかを知つてゐる。私は亞米利加旅行中に於て眞に藝術の爲に精進する一つの大きい團體に巡り會つた。Harshe, Eggers, Laurwick, Mrs. Sage-Quiton, Maurice Bloch, Burrows, Dudley Crafts Watson, Edgar Hewett, Kursworth と言ふ風な幾人かの美術館監理者及び他に無數の人々とも出會つた。彼等は藝術の爲に苦闘を續けてゐる。而て私はこれ等藝術の療院、即ち美術館から、廳て必ず藝術の光が如何に日常生活の中に射込むだらうかを知ることが能きる。藝術の眞の國際的用語と言ふことに就いて言葉を費すと言ふことは既に自明の理と言へる。が然し、吾々は祈りを以てそれを繰返さねばならない。なぜかなら、吾々はたゞ嚴峻なる固執に依つてのみ充分なる確信を以て仕事を爲すことが能きるからである。先づ醫者は勧告しなければならない。「兎に角一度この療法をやつてみて下さい。然らば私は貴方に眞の結果を御覽に入れます」と。

譯者註

- (1) ブラヴアツトスキイは露西亞の婦人で十九世紀の末葉倫敦で客死してゐる。現在印度マドラスに本部を置く靈智協會一或は接神協會とも言ふ一が千八百八十九年に創設されたに就いての一重要な人物である。この協會の爲に諸々方々を講演旅行をして終つてゐる。著書は三冊ばかりある。尊敬すべき人物である。
- (2) ヴィヴエカナダは近代印度神秘思想家中一大傑物の稱がある。二十世紀の初頭に死んでゐる。亞米利加や歐羅巴を講演旅行して東方哲學の妙諦を述べて非常な歡迎を受けたのである。
- (3) ヴェダンタは西紀七百八十八年に生れた印度の大思想家シャンカラがウバニシャツドの教説を完全に取纏めたもので、印度の慧智と言ふ樹には最上の花がウバニシャツドで、最上の果がヴェダンタだと言はれてゐる。ショベンハウエルが心醉したのもこのシャンカラであることは言ふまでもない。亞米利加では千九百〇五年にゼームス・ウツグ氏に依つて Deussen: System der Vedanta が英譯されてゐる。
- (4) バハイは波斯の宗教運動。
- (5) アトランチスは廣大無邊の一神祕島で、恰度吾々が西方樂土と漠然考へるやうなもの、ブラーーもこの島のことについていろいろ述べてゐるが、漠然西歐羅巴の遠き彼方に在りと信じられてゐた。
- (6) 「沈める市」は露西亞の寓話によく現れ出るもので、有名な農民物語である。大きい市が大湖の中へ姿を隠し、廳て人間生活に眞の幸福が來たらう場合浮び上ると言ふ傳説。デビュシイ作曲の「沈める

ことが能きたのである。

一三〇

無論私はこの旅行中に於ていろいろと異つた立場にある多くの若き藝術家達に巡り會つたのである。このことに就いては言を避けなければならないだらうが然し、たゞゴルゴツア（扶助者^の参考）に因つてのみ成就は鍛へ上げられるものである。然し私は亞米利加には實に苦難の経験を経、その生ける視覺を見捨てないで、藝術の爲に精進する靈長が本統に多く住居してゐるのを知ることができた。だから私は、藝術家と言ふ見地から、亞米利加の創造的仕事と言ふものが急速に進歩しつゝあること、且つそれは亞米利加をして眞の藝術の中心地たらしめることを豫示してゐることを感じてゐる。

然し乍らこの土地に於ける藝術蒐集家と言ふものに就いての状態は決して満足なものではない。若し假りにも私だつたら、斯くも多くの卓越なる藝術家に出会ふ幸運があつたのなら、この蒐集家達の徑路に依る有難い運命には立至らなかつた筈である。私はこの全國土を經巡り歩いて蒐集家に會つたと言ふことは實に寥々たるものである。私は藝術のいろんな買手には出會つた。然し眞の篤實なる蒐集家に出会つたと言ふ事は實に稀である。幾つもの都會では買手と蒐集家との區別が判然意識されてゐないと言ふことさへ發見したのである。また同じく私は一

ツの家庭内に藝術品を餘り多く持過ぎると言ふことはいゝ趣味ではないと言ふ或る物語の傳へられてゐるのを知つたのである。一體何處からこんな不幸な話が出て來たのか。私は知らないし、また決して知りたくも思はない。なぜかなら生活それ自身が艱てこの莫迦々々しい偏見を抹殺するだらうからである。

私にしては蒐集家の缺乏と言ふことは愈々以て變な氣がした。なぜかなら露西亞に於てはそんなに多く買手と言ふものは無いが多くの蒐集家が在るからである。私は最近の論說の中に於て露西亞の蒐集家に就いて物語つた。私は秀でた典型四人の人物を擧げたのである。ひとりは富産の商人、他は高官の人、第三は若き大學生、第四は現役の大佐である。この最後の人は、人としても且つはその地位に於てさへも、非常な貧乏であつた。然し彼は作品の爲への第一番の小さきスケッチを蒐める可能性を見出したのである。無論彼は疑ひもなく高價な繪を買ふことは能きなかつたからである。斯く種々雜多な生活の條件、階級や可能の不同に於てたゞ一つ中心を同じくせるものがあつた。それは即ち美的の探究、家庭の中に眞の友達を有つと言ふ願ひ—藝術制作、且つ眞物であつた。なぜかなら、實に最小の眞物と雖寫物よりは遙かに意義を有つからである。

じ國民が構成されてゐる。吾々のこの目前の現在に於て一つの新しい社會的產物が形成され行き、且つ既に父祖代々の人種的威嚴の賦性であつた一ツの新しい心靈が形成されてゐる。世界の近頃の總ての進出に於てこれは最も驚異すべき實驗である。その質體は宗教と他の萬有的な偉業との結合の現實的なる想念を未來の精神的教養に訴えて産み出してゐる。吾々は精神的教養と言ふものは畢竟機械文明なるのを征服すると言ふことを知つてゐる。吾々は人間の精靈と言ふものは進化を導き且つ日一日と動力を増すものであると言ふことを知つてゐる。

露西亞には一而ア米利加と將來露西亞との結合は差迫つてゐるが一転て時機到來すれば再び浮び上らう「沈める市」⁽⁶⁾なる美しい傳説がある。恐らくはその沈める市の樓塔の尖端が浮び上り且つ眼に訴えるやうになるかは素より誰も斷言能かないだらう。地深く埋もれ且つ健全なる精靈的の根を有てる熱凝の生活は、例へその根が常に露はでなくとも必ず強く且つ變化ある技藝を産み出さねば置かない。私が最初この土地へ入國して實に強き印象を受けた人々と言ふのは Rockwell Kent, George Bellows, Ryder, John Sarship, Davies, Maurice Stern, Ufer, R. Chanler, Sloane, Mansfield, Lachais, Speckler, Melchers, Prendergast, Frieske, Kro II, Sterner の如き人々である。若き人々のうちには Faggi, Davy, Johnson, Weisenborn,

Hoeckner, Shiva の諸君であつた。劇界では Jones, Urban, Geddes の諸君が注目すべき人々だと思つた。これ等總ての人々は私にア米利加人の團體が充分種類に富んでゐると言ふ第一印象を與えたのである。そのうち數個の藝術的團體はその感情に於て國民的である。一然し若しこの感情がその背後に國際的な見解を有つならば、その團體は正統なるものである。一なぜかならア米利加は眞に靈感に訴えた國民的感情に於て表現なし得る實に多くの財寶を抱いてゐるからである。

若し諸君が摩天家屋に詩才を働かせ、また諸々方々の國立公園のロマンチズムやアメリカインディヤン部落の深玄なる哀境や美しさに心を寄せるならば、なほまたこの土地に残された西班牙人遺物の陰鬱なる表徵に心を留めるならば、諸君は表現に充分なる實に多くの美しきものを有ち、從つて諸君はなぜ近代ア米利加人の感情が何が故に他の國々の常套的方式を繰返すことを肯ぜずして、彼等自身の廣大無邊の國土の本質的な美を表現しようとしてゐるかの譯合を理解することができる。この態度に於て私はこの本質的な源泉を乞求めてア米利加を旅行し歩き、中西部の大平原の美を訪れ、ニユーメキシコやアリゾナの國立公園、ナイagaraや太平洋沿岸諸洲の都市を旅巡つたのである。私は何んとこの國は眞の未來を有つ國であるかを認める

然し私の感興を有つ點は出來この國民生活の綠色と堇色との光線に在る。而て私はその二つの色を多分に見出し、且つ私の心氣に感動を與へたのである。若し諸君が株式仲買や街頭の有様と何等共通の點なきその亞米利加人の生活に熟々と考慮を施すならば、諸君は不意打ちを喰つて驚くことだらう。一例を擧げれば、世界何れの國に於てもこのやうに多くの信條と教會とが相構比して存在してゐる處は無い。これは靈性の明瞭なる證左である。諸君が何か鬼神信奉の集りに行かれるならその會堂は人を以て満ちてゐるのを見られる。人々は其處へ物質的な理由で行くのではない。彼等は魂の聲を聽かう爲に其處へ行くのである。人々⁽¹⁾ブラヴアットスキイーBlavatsky⁽²⁾やヴィヴェカナンダ—Vivekananda—やタゴールやその他の偉人物の教説に心を引かれたのである。この國にはエマースンやワルト・ホイットマンが生を享け、此處に成長し、此處でその反響が現れたのである。これ等の現象は自然ブロードウェイ(紐育の)一等街⁽³⁾街上の突進や生活の諸種なる機械的發明に對する叫喚などの大勢の爲に蔽はれて了つてゐる。然し、機械的局面はエレベーター⁽⁴⁾やスチームを焚くショツベルの方蔭に繁榮する精神的局面とは縁なき衆生である。

この國では、クロウド・プラグドン氏が諸君の爲に第四面の問題や色彩器官の問題やに就いて説く。デベイ博士は星占に就いての深き科學的知識を以て諸君に傾聽を與える。ヒイル博士は液化金の千分の一滴の中に全萬有の一體を諸君に見せる。諸君はヴェダンタ—Vedanta—やハイ—Bahai⁽⁵⁾—の教説に耳を傾けるだらう。此處では諸君は人々が遠慮なく宗教と國民との合一や月界人とアトランチス—Atlantis—との合一やに就いて論議し合つてゐるのを聽く。また諸君は人々が考星學や宇宙道念に感興を有つてゐるのを見る。これ總て亞米利加である。錢に狂迫すると考へられてゐるその亞米利加である。この國は偉きく且つ若い—偉きく且つ若いと言ふことがその大願なのである。

以上吾々が見知つた總てにも増して吾々が忘れる事の能きないものは、大發明家であつて同時に大詩人である人々である。發明家エデソンは同時に詩人エデソンである。大製造家カニアギイはまた大詩人カニアギイであつた。かうした人々が仕遂げたことゝ言ふものは、仕遂げるに就いての幻想念願と言ふものが必要であるからである。

かく亞米利加人生活の精神的發露を逞舉してみれば、私はその萬有的資質を蔑視することは能きない。亞米利加では世界の諸要素を撫きませての急速實驗の方法に依つて現在一つの新し

さて私は東洋への旅行にこの亞米利加を出立する際に當つて、亞米利加なり亞米利加の藝術なりに就いて物語る機會を有つたことを本統に悦ばなければならないと思ふ。私はこの特權は私に在りと思つてゐる。なぜかなら私は、かれこれ二十三年前既に亞米利加の藝術に信據を有ち、露西亞に於ける最初の亞米利加藝術展覽會の開催に助力したからである。而て今私は樂觀して充分にその正しき證據を獲てゐる。

先以て私は一般亞米利加に就いての意見を述べなければならぬ。

私は屢々亞米利加は紛れもなく物質的であると言ふ話を聽かされた。然し各人は一體亞米利加が何を最上に探求してゐるかと言ふことを知る。各人は世界をその物質的見界を基礎にして測り考へてゐる。生活と言ふものは錯雜してゐる。吾々は屢々吾々を繰る生活の眞の奇蹟に對して盲者であり聾者である。實體とは何であるか。幻想とは何であるか。人々はその心的盲目に於てこの二つの概念を混同してゐる。磨かれたるダイヤモンドの如うに生活は種々雜多な方向へその光を照す。實に屢々のことではあるが、吾々は赤き物質的な光線の閃きを見て、それに眼をすり寄せた場合藍色と堇色とが現れる。だからダイヤモンドなるものゝ主體をなす色が綠色か赤色であると言ふことを斷言するのは誤りである。若し私が亞米利加を物質的なるウオ

亞米利加の望樓

があるかを見分けなければならない。

實踐的と言ふことは常に吾々が心掛けてゐなければならないことである。果して不斷の摘發が暗黒を逐ひ斥けるでらうあか。たゞ火(ほ)を持込みばいゝ。——然らば暗黒は絶対に無くなる。だからして、たゞ、消極的な、批判的な、優柔不斷の經過を辿つてゐるのみにては、何の役にも立たない。

然し先づ第一の可能性は突進の線を活動の長き一本の線の結果に依つて短かくすることに在る。たゞ結果のみ！。

諸君は決して醜惡なる勢力に因つて愚俗を征服能きるものではない。美の勢力に諸君の勝利は懸る。信にたゞ美のみが愚俗に打勝ち、野性なる突進は忌まはしき金色國土の門前に行進を止む。而て勝利は遠きに非ず！。時に吾々が「没落」と呼びなす總てのものは曾てはまた「興起」ではなかつたらうか？。

譯者註。

(1) クレースス。リディヤの王。リディヤ王國の建設者アルヤテスの子。紀元前五六〇年に王位を嗣

ぐ。彼の領土が廣汎であつたことは歴史に明かである。本書にクレーススの名が例とされてゐるのはヘロドウタスの記述に依るものならん。即ちヘロドウタスは、このクレーススがソロモン(ソロモン王)に非ず。クレースス時代のアデンの立法者)と會見した時の事を記述してゐる。クレーススはソロモンに會見した時に、彼は無數の寶物を觀せた。その時ソロモンは周りの人々から「こんな幸福な人は世にまたあるまい」と聽かされた。するとソロモンはかう言つた。「彼が生きてゐる間は誰も幸福なぞは考へられぬものではない」と。然しクレーススは紀元前五四六年に敗職して生擒となり、火刑に處せられることがとなつた。その時、彼は「ソロモンよ—ソロモンよ—」と聲を上げて泣いたと言ふ。

を擴げる。愚俗の表戸に突進する者は亂民である。この庶民が亂民への奇怪なる變形と同一なるものは、列車の突進や會合の突進に於て、買物や販賣の突進に於て、また不運の突進に於て顯れてゐる。また吾々はこれと同一の突進を時に音樂に於て、色に於て、圖案の線に於て、影刻の律動に於て察知する。

今諸君は一體好機逸すべからざる時とは何であるかをお訊ねになるだらう。人は皆現在この發作が湧立つ時を以て好機逸すべからざる時だと考へてゐる。突進の一局面は到底隠すことの能きないものである。それ／＼の人の眼の表狀は變る。突進の悲しき行動が演じられてゐる時には、諸君は決して幸福なる相貌を見掛けることは能きない。突進は感激的に聲明して曰く、「進め進め」と。而て人は皆、この指揮に従つて大急ぎで進み去る。然し活動の柄は「來れ來れ」と聲明し、物皆總てはこの招きに應じて近寄り、能力を山積する。人々はとても繁忙である。彼等は魂の合一を待つ時間を有つてはゐない。分秒にして何かと持上つて來る。最も立派な儀容の集り人も、總ての辯別を失つて、極度の野性本能に驅られて亂民に改宗してゐる。吾々はこの時機に就いての解釋はいろいろと有つてゐる。然し最も判然たることは愚俗と言ふものが優勢の度を増して行くと言ふ一事である。

この愚俗の奇怪なる勢力を有する國土は實に廣漠たるものである。これと同一の愚俗は現在庶民々々を混迷させてゐる。これは現在額縁を金ピカに塗つてゐる。頌歌を「ジャズ」に曲げ變へてゐる。運動競技を冷酷なものに變形してゐる。また皮相生活の標準を表示してゐる。唇でさへ同じく彩色されてゐる。

これは恰も、人間の皮が脱き捨てられて動物が驚愕の眼前に跳ね舞つてゐる有様である。然し、それでも拘らず、人間は自然の中に抱かれてゐる。たゞ人間を突進から奪へば眞の人間の局面は再び擡頭して來る。恰も化學的溶解のやうに！。これと同じ科學的方法に於て人性は突進と活動とを辯別しなければならない。

「總て虐政の姿とは温情より始まる」とは實に反證の餘地なき言である。「總て愚俗の姿とは妥協より始まる」或る日は實に僅かな妥協。またの日は僅かな妥協。而て次に忽ち愚俗の長老（宗教にて）

これは陳腐なことでもなく自明の眞理でもない。吾々は今これを繰返し唇を動かしてみなければならぬ。なぜかなら、充分なる眞の活動、充分なる辯別は、近き將來に於て當然必要であるからである。而て人々は各運動に於て、何處に愚俗なる突進があるか、何處に永遠の活動

だが然し沈靜にも二様ある。即ち融解を表示する惰性の無力なる沈靜と生の調和を支配する自若たる至尊の沈靜である。統治者の靜謐とはこの至尊の沈靜である。この靜謐が完成であればあるだけその精力も強大であり、また實動に於ける威力も偉大である。

この靜謐の界に眞の知識は来る。人々の思想と言ふものは眞實と誤謬との網目である。眞の知覺は誤れる知覺に依つて毀損されてゐる。眞の想像は誤れる想像に依つて歪められてゐる。眞の記憶は誤れる記憶に依つて疊らされてゐる。心靈の皮相なる活動は當然停止しなければならないし、沈黙は不休が續行しなくてはならない。其處でその靜謐に於て、その無言の沈靜に於て、啓明は心靈の上に降來する。而して正しき知識は正しき行動的確なる根元と成る。

この眞の活動、突進する雲集の眼には見えざるこの眞の活動はたゞ結果に於てその姿を表示するのみである。而て結果に因り人はその肉體的の眼を以て、活動の線が如何に長きかを突進の線と比較して知るのである。

而して突進の晝は活動の夜である。なぜかなら突進状態に於ては何物をも創造されないからである。恐らく錢も。然し、全史上に於てたゞクリスチ—Jesus—のみは、その富の資格の爲に記載されてゐる。然し彼さへもその生涯を哀々のうちに終つて了つた。

突進生活中に眞の活動を表示する能のあると言ふこと、また沈黙、沈靜、及び啓明ある默従を持堪えて行くと言ふこと、それは「不滅」なるものに適ふものである。力の「停休」と言ふことも、創造し、保持し、破壊をする。この行動は一大自然威力の直接にして洪大なる追逐を伴つて動力的である。

廻轉する輪(くわい)でさへその最大速力の時には動いてゐないやうに見える。最高行動の調和は、肉眼に依つて判別能きるものに非ずして、たゞ結果に依り、明瞭であると言ふに過ぎない。

眞の沈靜は時に喋々と話す言葉や外面の活動と言ふものに依つて包まれて了ふ場合がある。即ち表面生々した波の動きを有つ大洋。然しそれには何等突進と共通する點はないのである。突進は或る特別なる属性を有つてゐる。なぜかなら突進は常に愚俗と言ふお伴を連れてゐるからである。諸君は確かに突進生活の中に近代人性のこの忌まはしき疾疫の全局面を發見してゐる。一體人性最上の原質は何を目的に探索するのであるか。一體流血の革命と成就の探究とは何を目的に傳播してゐるのであるか。人間の精靈は愚俗を向ふに廻してのこれ等總ての様々の吐違へた戦に劔戦を握つてゐる。

無教養の庶民が亂民と化した時に一體其處に何が起るか。其處には愚俗の暗黒なる王國が手

その昔アクバル大帝は一本の線を描き、扈從の賢者ビルバルを召して、その線の両端を截りも削りもしないで短かくする法があるかと詰じられたと言ふことである。ビルバルはその線に並行してその線より一段と長き一本の線を描いた。其處でアクバル大帝の線は短かくなつた。慧智は長き線を引くことに在る。

吾々はこの現代生活に於て突進（繁忙突進の意）を以人爲神視するのを見た場合、時に吾々はこのどさくさ即ちこの勢力と能力との無用の亂逸は縮めようは無いと感ずる。而てたゞ眞の活動の一本の長き線を思ひ浮べるに當つて今日の泡起—即ち急迫の標準—を減少させることができ。

實に吾々は下の事を銘してゐなければならない。即ち沈黙は役目を演ずるが辯舌は行動への衝動を與へる。沈黙は肉迫するが辯舌は口説く。世界の數限りなく測り得べからざる諸々の経過は、深遠にして莊嚴なる沈黙に於て、裡に完く完全な姿を藏して騒擾迷誤の音響で造られた假面を冠つてゐる。最大の力行と言ふものは總て吸氣に依つて生じ、呼吸の度が速調であればあるだけエネルギーの消耗も大きい。行動の中に於て自然に且つ自生的に呼吸を止め得る者は世界エネルギーの主である。そのエネルギーとは萬有に遍満して役目を演じ且つ創造するものである。

に近々と在る。而てこのヤンガア・ゼネレイションは成長しつゝある。生の律動。たゞ吾々に生の神聖なる律動を辨别する能を與えよ。—なぜかならこの律動の法則は飛去來器^{ブーケン}（譯者註。豪ふる木製の投げ道具にして之を投げれば大）の法則と同じ確成的な方法に於て働きを演ずる。—投げ曲線を描きて飛行し投者の方に歸り来る。—から吾々はこれを投げ送るに當つて如何に入念なる注意が必要であること。

譯者註。

(1) イゴオル・ストラヴィンスキイの名は、既に吾々にも充分知られてゐる筈である。兎に角バアレイミュジックでは巨人が言へよう。彼の音樂は最初はそのハアモニーが幾分は奇怪に感じられるかも知れないが輝かしい。然も彼は露西亞音樂のナショナリズムと言へよう。彼もまた藝術家によくある例ではあるが、國外で先づその天才を認められた。「春の供養」と同一に、バアレー・ミュジックとしての「火の鳥」や「ペトルシンユカ」は既に吾々の耳に在る筈である。

(2) セルギー・プロコフィエフは、寧ろ吾々に卓絶なるピアニストとしてその名を知られてゐる。其作曲は屢々ストラヴィンスキイと比較されてゐる。所謂十九世紀末の自我と稱するものを作品の上に表さない作曲家である。

(3) プラーナは梵語である。英語で言へば pure air 波那、呼吸、生氣などいろ／＼譯されてはゐるが兎に角印度に於ける「我」とか「梵」とかの代表名詞である。最上神格を意味する事は言ふまでもない。

活動

らないこと、且つ將來探究を續けると言ふことである。この探究があらゆる古きものゝ破壊の觀念に連絡を有つたと言ふことはこの探究の禁止に罪がある。なぜかなら、あらゆる古きものは一樣に若き心に禁止されたものとして因縁を繋いでゐるからである。然し若し吾々が否定や鎮壓に據らずして探究の眞の實行的方法を示す事に依つて美の門を開かうものなら、吾々は、若き魂に、一つの新しい感情を賦與することだらう。總てのものは許可されなければならぬ。而てたゞ一通の名譽免狀、即ち眞教養なる免狀が存在してゐなければならない。

私には總て禁制に依る不可解事に反抗する極端黨や謀反黨の時代は過ぎ行くやうに見える。若し吾々が今に新時代の作曲家、最も天賦ある作曲家を獲るならば、吾々は最早聲に極端へ或は破壊への判然たる骨折りに注意を拂はないばかりではなく、却つて其處に何か眞に動力的なものに對し或は吾々の内部生活に依る律動の結合に對して一つの新しき願ひある事を認める。⁽²⁾ プロコフィエフ—Prokofieff—のことを考へても、私は彼の音樂には誇張と言ふものが無くして何か宇宙的な價値があると思ふ。同様に私は亞米利加人のうちではカアペンター、デイム・タイラ、フレデリツク・ジャコビ、エマアスン・ホイゾン、グリフェスなどに同じ擴がりのあることを明白に鑑賞してゐる。

最近作曲家のアーネスト・ロック氏は統合藝術主學院に於ての講演後私に、吾々の個人生活及び職業生活に於て、どうしても打勝たなければならぬ暗流のある事に就いて話した。疑ひもなくこれはロック氏がその講演に於て、律動の誤解、構成の缺乏、現代の藝術家が全く歡喜して努力してゐる總てに就いて物語つたこと何かも同様間違ひの無いことである。然しひルゴツア（扶助者）⁽³⁾は何かの都合で存立してゐる。而て各音樂家や各藝術家、最大作曲家からいと慎しやかななる教師に至るまで、生の眞の律動とその創造との結合への同じき勞苦に打勝たねばならない。若し假りにも吾々が今羅馬やピザンチュムの凋落期の文明の如うな時代に生きてゐるとするならば、實に吾々はこの調和された律動を見出すことは能きないだらうし且つ一本の足で不均衡に踏ん立つてゐることだらう。然し若し吾々が一新時代の初期に生き、且つ若しこの吾々の時代が絶大なる諸計畫遂行の時であると言ふことを感じてゐるならば、實にこの律動上の協和は見出されるであらう。何れも皆軟弱なるものは絶滅する。然し何れも皆眞の威力を有つものはそれ自身を威風堂々と表現する事ができるであらう。

吾々の眼前に展がるものは一本の道である。而ていと尊貴なるPrana—が吾々の前に現れた時に、その道は開ける窓の道である。開ける扉の道である。而しこの救濟は實

く知るが故に常に探究を續けてゐる教師である。極く最近まで多くの社會的設置物はこの探究を怠らない教師に反対を唱へてゐた。なぜかなら吾々の根據となる生活が未だ晶化されてゐなかつたからである。然し今や吾々の根據となる生活の晶體は形造られた、而て生活の次の一步を創造することは能き無くなつた。諸君は世の各人がこの根據となる生活の冷寒なる晶體に鬱々としてゐると言ふこと、また人性は眞の探究にをさをさ怠り無いと言ふことの二つを了解する。

私が統合藝術主學院に於て見知つた實に興味のある一教室は、劇場裝飾科のロバアトエ・ドモンド・ジヨオンズの教授であつて、彼が學生達と一緒に働く方針なり、單に黙々たる個性の集合ではなく、眞に協力の働き人の集合であるその光景は、古き伊太利か和蘭での畫室に於て子弟達が大藝術家の全努力を享有して働いてゐたのによく似た有様を見たのである。而て私は、聽て音樂家もこの活動と同じ方法を執るだらうし、かうした活動的な學生達の一團が本統に生命ある何かを創造することの能きる時機の來ることを、この胸に思ひ浮べてゐる。

現在に於ては大抵の場合、劇場と言ひ獨奏會と言ひ、たゞ音樂の病院に過ぎない。全く奇妙な事は、各家々には樂器を備へてゐるにも拘らず音樂其ものは家庭の中へ踏込んではゐない。

子供達は昔と變りない練習法を繰返してゐる。然し實に時たま吾々はその作曲の初步に於て子供自身を即興に表現しようと試みる若き魂の聲を聽く場合に出喰はす。而て若しこの子供達がかく爲すならば、世の親達や縁者達、而て教師さへもこの子供達の努力に抗議をなす人々は實に大勢ではないか。さうした人々はかうした即興は技法を汚すものと信じ、且つは恐らく腦力をも害するものだらうとさへ信じてゐる。然し吾々は如何なる他の方法に依り技法と自己表現との間に架せられた橋を渡り切ることが能きるのであるか。斯くも屢々人間の魂は歌を唄はうと冀ひ、斯くも屢々それ自身特有に有つ或るもの、またはその獨特の氣分に相應しき何か新しき結合を歌はうと希望してゐる。而て若き畫家がその道具を使ふ極く初步からその構圖を組立て書くことに畫家自身を表現することが能き、また是非表現しなければならないのに、何が故に音樂をやる人や音樂家は自己表現の媒介物を握り潰して了はなければならないのであるか。

私は音樂家ではない。然し、縱しや音樂は私に作曲家に依つて與えられた主題を啓示したのではなくして、音樂それ自身は私の内部世界に全く異つたものとして啓示されたとしても、由來私の生活に音樂が如何に深き意義を有するかを知つてゐる。

口笛を吹き喧嘩を極めて、その爲に事實私は彼等には音樂が耳に這入つてゐよう筈が無いと思つてゐた。而て第二幕目になり、一番舞踏女優がたゞひとり舞臺へ現れた時には、喧嘩はその極に達して了つた。事實私は彼女の勇氣に驚いた。なぜかなら、彼女は音樂を附けて踊つたのではなくて、總觀客の恐るべき喧囂の伴奏に依つて踊つたからである。而て二三喝采の手を打つ音もこの妨害のたゞ中へ押潰されて了つたのである。「春の供養」はその音樂季節に數度上演されたが何時も同じ喧嘩を繰返してゐた。けれ共座席は何時も一杯であつた。本統のこと私は五六人の麗々しく着飾つた婦人がその棧敷に腰を下してお互に「何時喧囂の聲が始まるんでせうかね？」と訊ね合つてゐるのを親しく耳に挿んだのである。

若し誰かこの激烈な反抗は如何なる理由に基づくかを訊ねる人があるならば、私は公明に私の無智を告白するより仕方ない。私にはそれは今なほ一つの大なる不可思議としてこの胸に残つてゐる。更に二年以後、この時と全く同じ「春の供養」が上演された時には、それは、喝采を博したばかりではなく、滿場一致の賞讃を享けたのである。而てそれ以來この所作舞踏に對して巴里及びその他の都市で舉つて賞讃を受けたことは無論周知のことである。人は百年にして輿論が覆つた時、其處に新時代は目撲に在りと言ふことは理解することができる。だが然し

僅か二年にして同一時代が斯くも全く同一の、即ち何等の變化なき仕事に對して、その態度を一變して了つたことを見るに及んで吾々は、短かき幕間の間に進化する出來事の標準が如何に見事轉倒して了つたかと言ふことを知る。

然し、この豫測も能きなかつた心の變化と言ふことは何にも不思議なことではない。それはたゞ前價値の特有なる律動に過ぎなかつたのである。

私は今非常に興味のある一冊の書のその名を思ひ出せないが、その書物には、古代から辿り下つて出來事に關するこの科學的な流れが關係法則の表に作られてゐて、吾々は如何に疾風迅雷の速力を以て、この輓近の歴史に於て、次から次へとお互に出來事を追捲くつて來たかを知ることが能きる。實に吾々は吾々の研究を歴史に執り、且つ將來の爲に吾々の教育的經驗事實を掌握して、この旋風の最頂點に在ると言ふことを誇りとすべきである。

この論據に於て吾々は果して近き將來の爲に如何なる典型的教師を頭に浮べることが能きるか。一而て私はこれに就いてはあらゆる藝術のこととに就いて話してみやう。なぜかなら、それ等の藝術は總て同一の位置に置かれてゐるからである。

世の中には教師といふものに二様の典型がある。一つは知り且つ肯定する教師、他は實によ

さて吾々は今何か純粹に教育的なことに就いて考へてみよう。生の諸事實は吾々に眞の教育的なる體制を造形る最上の根柢を與える。例へば、今私が物語る事柄などは實に意義のある例である。即ち、千九百十三年の巴里に於ける音樂季節に際して、ストラヴィンスキイ作曲「春の供養」—*Sacre du Printemps*—が初めて上演さるゝに當つて、ストラヴィンスキイ氏—Stra vinsky—と私とが全く汎々しい經驗を享けたことである。私はこの所作舞蹈の裝置圖題を有史以前のスラヴ人の生活から擇んで當嵌めることにした。この演出物の見世物としての方面は、巴里人社會に深刻に鑑賞された「イゴオル大公」（譯者註。ボロディンの代表作で、十二世紀の叙事詩に據る歌劇）同様、何等めざましくもなく且つ圖太いものではない。衣裳に於ても景色に於ても何等むづかしい解釋が要る譯ではなく、且つまた音樂も一今ではよく知られてはゐるが、全然侵略的なものではない。ニジンスキイの舞踏には多少目新しい異國趣味的な出シ物が混ぢつてはゐたが、それとても矢張り何等奇怪に過ぎたと言ふものは無かつた。

然しこの第一回の上演前ですら、既に吾々兩人は、勸進元のディアギリレフ氏とアスツルウク氏との兩人が何か報が來そ�だと言ふ顔つきで幾分當惑してゐるのを睨んでゐた。而て其處で劇場が蓋を開けたその當夜に於て最大誹謗の聲が捲き起つた。觀衆は全くの示威的態度で

其處で諸君は諸君の部屋が浮幻の集りではなく、必須にして美しき物の群に依つて充たされ始めるまでは、その部屋は空虚の光景を呈することだらう。而て諸君はつゝはものゝ如く吾々各員が是非共世界に貢献しなければならないその福祉の爲にその身をこれ等の充たされたる物象を以て武装するだらう。

笑ひたい人間がゐるのなら笑ふがいゝ。上に費した言葉の隠れたる意味を未だ掘ることの能きない人間は。今笑はして置くがいゝ。總て彼は自己の理解の缺乏をみずから笑ふ時が来るだらう。

美と調和とは今戸を叩いてゐる。

生の律動

つ諸君は脅に理解するばかりではなく、多分最う一つの療法、而て最ツと最ツと單純な療法、即ち現代生活の諸種なる疾患を救治すると言ふ療法が直ぐ眞近かに迫つてゐると言ふことを感するだらう。

其處で自然の最う一つの「秘密」が、それは恰度吾々の周圍にある諸要素の實踐的意味が實に易々と吾々の官感に馴染んで了ふやうに、諸君の前へ啓示される。

總てのものは當然吾々に歡喜を興ふべきものである。總てのものは實に單純であるべきである。就中女性は近き將來の歡喜をこの世界に齎すべきものとして生れついてゐる！。

諸君は知るに就いての道を學び、實踐的の道を踏み始めて、人間に對し、事物に對して同情的な態度、同じく反情的な態度の原因を理解することができる。其處で諸君は、自覺を有ち且つ注意して「調和なる語を喋舌るがいゝ。而てこれのみを以て諸君の来るべき光明の爲に平坦なる道を造るに充分である。

一旦吾々の精靈が一事を知るやうになつて了へば、諸君は自若として腰を下してゐればいゝ。さすれば吾々の腦に更に新奇な意識が同化するには、單に時間の問題に過ぎなくなる。

人間はその精靈を包む永遠の色衣を着てゐる。人間は彼自身その諸種なる思想に依つて、こ

の貴重なる衣を自ら擇り好んだ諸色に依つて着色する。人間は或る種の調和ある關係を人間自身との環境とに求める。無論人間は彩明にして力ある色の配合と言ふものが驚愕瀕死の鼠の毛色よりも遙かに力強いと言ふことを實感する。消滅を告げる褪せ行く黄昏の色よ！。而て其處で諸君は諸君の生活に於ける色彩の影響が如何に力あるかを悟り且つ感する。諸君自身の最上の發氣に依り、他の人の發光する最上の色彩を引寄せる。而てこの二ツの外界的物象の最上の色彩は間接に諸君の靈衣を更に／＼輝かしく光を増大するやうに役立つ。歸する處、總てのものは相互援助の提携と結合とであるべき筈のものである。

人類は既に形表の暗き部分の魔術、明るき部分の魔術、即ち線の魔術。この兩魔術の意義を知る道は辿つてゐる。古代裝飾器具の大半は恵まれたる線の描痕を見せてゐる。かうした理由に依つて、これ等線の成層の根元とは屢々悉なき恵を享けたる者である。今や人性は色彩の力を統御する。これは着物なり衣裳なりの問題が、外觀の美と離別して、また深奥なる本質の意味を有つからの理由である。而て吾々は既に、「私はそれが好きだ」「それは私に似合ひだ」「私はそれを悦んでゐる」と言ふ風な表現が更に深刻必須の意義を有つものである言ふことを是認してゐる。吾々の生活總ては上に述べた諸種の偉なる徵候に依つて充ちてゐる。

それにしても、これと同時に、吾々の精靈は、門には何等門は無く、門は何等禁止されても
ゐないと言ふ語を藏してゐる。吾々の内部の聲は間断なく囁く。即ち「何もかも眞近く在り、
總ては實に眞で且つ實行し得べきものに相違なし」と囁く。而て吾々の生活の新生もまた當然
單純なものであるべきに相違ない。それは今茲に吾々の間に於て手始められなければならぬ
ものである。なぜかなら人間の精靈は—吾々を全く貴高く靈感に溢れた地點に導くこの橋梁は
一決して吾々を見捨てるものではないからである。

然し何處に確實なる徵證があるか。歸する處吾々は事に依れば見捨てゝ了つたのであるか。
吾々は今誤つた道に連れ出されてゐるのではないか。

私はこの講演に於て諸君に如何に數限り無き驚異すべき可能性が、人間の天才達に與えられた
かに就いて特に言葉を費す必要はない。たゞ一つの例證を此處に持出すことにしよう。

謂ふまでもなく諸君は發氣と言ふことに就いて重々御承知の筈である。その發氣はこの人間
の眼に依つてゞさへ屢々相互に識別能きるものであらう。また諸君はかうした發氣と言ふもの
が吾々の靈的の成就に連れて變化すると言ふ事をも御存じの筈である。而して吾々の有つ、毎々
の一思考々々は吾々の發氣を暗くもし輝かしくもする能を有つてゐる。斯く各人は謂はゞその

手に靈的成就の檢溫器を有つてゐる譯である。聖者の影像には吾々は御光を觀る。かうしたも
のは全く總ての人性に共通なる發氣の描像である。而てそれ等は特に高き靈的有機體の場合に
於て明顯である。

無論由來色彩發氣の問題は「神秘主義」の界に屬するものとして考へられて來てゐる。神學
者でさへも聖者の御光に就いて寧ろ曖昧なことを言つてゐる。然し此處に再び人性は、總ての
ものは眞實であるべく且つ實行し得べきものであると言ふことを理解してゐる。それにまた人
はこの發氣に對して科學的手段に於ての方法を發見したのである。今日に於ては諸君は何處か
の科學研究所へ行くことがあつて、諸君のエッキス光線の映畫と一緒に諸君の固有發氣の寫真
を手に入れることが能きる。言ふまでもないことであるが、人に依つてはその肉眼に訴えて諸
君の發氣を見ることが能かると言ふことは當然である。

左様、諸君は問ひを發して、然し衣裳の問題をどう完く解決して了ふかと訊ねる。實にその
通りである!。それはこの論題に對して顯著にして直接の關係がある。

諸君が早晚この人間の色彩發氣の意義及び意味を摑む時に於て、諸君は色とは吾々の生活に
何を意味するかを理解し、而て次に諸君は色の調和とは何を意味するかを知ることだらう。且

を眼前に置いて、面紗マスクを看破しよう、色彩の力を證據立てようと藻搔いてゐる。吾々に屬するこの時代は音楽と色とに依る因縁を念頭に叩込み始めてゐる。吾々は今禮拜者達の心々を凝化させる爲に教會堂に色照明の方案を取り入れようとしてその運びをつけてゐる。吾々は色に依つて病人を治癒しようと心掛けたる。ひそくと、遙々と、生活の中に何か正しく勇敢に聲明しなければならないものが這入り來てゐる。うら寂しき人性に新しき歡喜將來の誓を有つ何かより未來の靈的視界の中に。

人々は神の花である。だが現在ではこれ等花咲く花園はその土壤を黒く悼ましき屍衣カボロギを以て蔽はなければならないと言ふことは奇妙な有様ではないか!。いと祝祭らしく衣裝を飾る群集でさへ土壤の面を恰も薄黒き灰色の熔岩の流れの如きものを以て包んでゐる。而て熔岩の如くその過ぎ行く途に於て歡喜の面影と言ふ面影を微塵に毀はす。

生活と言ふものは將來遂には近代文明の誇るべき價値ともならう調和なるものを建設することに成功するかも知れない。だが然し伊太利の文藝復興の時代に於てすら衆人は、インキに依つて花を窒息させるやうなことなく、如何にして野原に花を混ぜるかを知つてゐた。其處で吾々は如何にしてこの惡を恢復するか。吾々は兎も角この雲集の陰鬱なる野原に冴々しい色吹水

を點撒してみようか。然しその時には、牛でさへ思ひもよらない閃めく色水の飛沫を受けて驚愕してさづ。而て若し吾々がなほもこの衆人と花野原との對比を持続けてゐるならば、自然のいと輝かしき草花のデザインでさへも決して吾々の眼に不興を與えるものではないと言ふことに思ひ當る。なぜかなら宇宙の創造は常に調和を形成してゐるからである。この自然の仕事の示現は、よもやその燐爛の光力に依つて吾々の可弱き視力を盲めまいばかりか、障害などを與えることは絶對に無い。

だが然し此處に不審がある。即ち、如何にして吾々は現在の可弱き眼界の低き水準から立上つて宇宙の眞實が吾々に啓示されると言ふいと貴高たかがき上座に進み行くかと言ふ不審である。恐らく吾々は過去から今まで始終、或はまた行末永く、眞實と光とへの道を見失つてゐる。それはたゞ實に群抜の生活狀態に於てのみ吾々の眼が打開けられると言ふ事であるかも知れない。然らざれば、吾々は、恐らくは、吾々の生活を、淨化を享ける爲に、根から變更すると言ふことが必要であらうか。

斯くの如きが吾々の總ての人々が戰きを感じて夜のしじまに自問する不審なのである。果して光と眞實との二つの門は永遠に閉されたまゝ遣り行くのであらうか。

な仕事の摑み處のない行進が彼等の周圍を全く取巻いて進んで行くと言ふこと、また彼等が會得しない或る威力が歸結の形體と新生活的局面とを形造るに汲々としてゐると言ふことをたゞ疑ひ始めてゐるに過ぎない。而て如何にかうした勢力の錯雜が存續不滅であるか！。見た處實に取るに足らないかうした事柄が何と屢々吾々存立の十全の姿を完く變化させて了ふ事か！。

なぜ人は社會の一形式に安住することを以て満足を感じてゐるのであるか。また人は違った事情のもとに置かれた場合譯なく心の平靜を失ひ、失望の境に沈み、而て何物をも慈なく創造することは能きないと言ふことを徹頭徹尾感じて了ふのであるか。

實に多數の魔的な謎と輝かしき惑想！。而して實に多數の曇朧にして無智なる返答と結論！。然し今や經驗は謎の上に加へられ、經驗は知識に依つて光輝を有つ。人は現實世界の限界が吾々の視界の遠き彼方へと展がつてゐると言ふことを自覺し始めて來た。人は所謂世上に言ふ「神秘主義」なるものゝ觀念は、大抵の場合眞赤な無智の結果に過ぎないと考へるやうになつて來た。而て總て生活上に存在する深奥なる實在を否定する人間は、それは恰度きのうまで單なる寓話であるとしか思はれてゐなかつた無線電信、ラヂウム、電話、その他總て完璧になされた眞の科學的發見を否定する蒙學の徒と言ふべきである。

或る人々は、自負と愚昧とに惑はされて、彼等の小さき脳おなかが今日を擄まうとする事が能きないと言ふこと、彼等の耳が聽き違ひをすると言ふこと、さうしたことを全く否定しようと思つてゐる。然し、亞米利加發見の可能が否定された時もあつたのである。今この蒙學の多種多様な例證を残らず此處に引合ひの例證として言ふ必要はない。

然し乍ら生活は前へ前へと進む。少し宛ではあるが人々は「實在」の意味を理解し始めてゐる。それ等の人々は生活と言ふものが、屢々未發見に終り、更にまた忘却に失してゐた卓越な能力に充ち溢れてゐると言ふことの理解に歩を進めてゐる。而て近代の粗俗なる心の持主即ち所謂「文明」人には子供臭く或は鄙俗な風體と思はれてゐる表徵に於て既に度々現れてゐる。だが然し、吾々は、古き裝飾器具の毎々の線は世紀々々の意義に満ちてゐると言ふことは念頭に在る。而て矢張り吾々は色彩の調和ある圖式々々は、或は私が「威壓」又は治癒と言ふ語で限定能きるかも知れない或る感情の一境を吾々に齎すものであると言ふことは感じてゐる。

色彩の莊嚴なる力！。永遠なる蒼空の陸離たる全色を眼前に眺め得る人々は、長く彼等の所有として藏されてゐるべき筈であつた歡喜なるその視界を搔消さんが爲に、思慮あつての眼隠シを巻いてゐるのである。然るに人間の智能は今なほ、灰色の、黃色の、燻つたガラスの各種

諸國民の光彩ある華飾の罪列は吾々の心的視界の前を過ぎ行つた。かうして過ぎ行けるさま
よひ人のそれゝは由來、世紀々々の進行の途上に於て、文明の寶庫にその小銅貨を加へて行
つたのである。行進を續け行つた諸國民と言ふものは實に數へ盡せないものであつて、勞役し
苦悶して彼等は吾々に供物を齎したのである。然し人性の寶庫は満たされてはゐない。而して
織物、石、金屬の紛亂の迷路を過ぎる際限なき犠牲の中に於て、人間の純眞なる容貌は今なほ
僅かに投影としての朧ろなる輪廓に過ぎない。

如何に多くの緊急なる仕事が吾々皆々を待てゐること？。

然しながら、一つの觀念が既に吾々の心中に根を下してゐる。即ち、吾々が吾々に就いて知
る生なるものゝ總ての部分々々は單なる偶發事の結果からではないと言ふことを知つてゐる。
それ等は總て世紀々々の経過に於て累堆された意味に充ち溢れてゐる。若し毎々の言葉、吾々
の名稱の毎々の文字がそれ自身の意義を有ち、また吾々の存在の一步々々ごとがその原因と結
果とを有つたならば、如何に身も心も投げかけてこの偉なる創造的進化の毎々の示現を刮目す
べきであるか！。

或る人々は既に明瞭に體現してゐるが、一方他の人々は、恰も夢を見てゐるやうに、創造的

靈

の

衣

靈

の

衣

於て起つた多くの小さき企畫を知つてゐる。——然しこの劇場の眞の傳統は模倣することを許さなかつた。なぜかなら、この劇場に含まつた各種の傳統は強固に個性的なものであり、繰返すことの能きないものであるからである。

私は今や莫斯科藝術座が亞米利加を訪れると言ふことを本統に悦ばしく思ふ。諸君は亞米利加に於て露西亞藝術の多方面を見て來てゐられる。然しこの基礎的方面は矢張り是非知つて置かねばならない。なぜかなら、私が實に固く信じてゐる露西亞と亞米利加とのその来るべき結合に於て、亞米利加の爲に、露西亞と言ふものをその諸種異なる方面々々から知り、また色彩に溢れた劇的表面の裏面に創造的な仕事に對する深甚なる忠誠のあることを見抜く必要があるからである。

譯者註

(1) 「ビーア・ギント」、イブセンが故國に不快の念を懷いて、國外に漂泊の旅を續け、羅馬に於て「ブランド」とこの「ビーア・ギント」とを書く。彼の生涯の大轉期の作品である「ブランド」が北歐人の理想と意志との人間を現してゐるに反し、この作は同時に北歐人持有的空想漂泊の氣質を描けるもの。主人公ビーア・ギントは、寓話傳説的の世界をさま迷ひ歩く。情語性よりも、空想寓話世界の美であると考

（よう）無論これは諷刺悲劇と取扱ひ得るだらう。この劇の爲に作曲されたグリーヒの「ビーア・ギント」も同じく立派なもグリーヒの代表作の一つである。最初洋琴二重奏曲であつたのが後に管絃樂曲に更つてゐる。「ソルヴェヂの歌」「アニトラの舞踏」は現在では既に吾々日本人にも馴染されてゐる。

(2) 「フェオドル帝」。アレキセイ・トルstoi伯の作である。レオ・トルstoiの従兄弟。この「フェオドル帝」と藝術座との因縁は、藝術座旗揚第一回の演出物であると昔ふ點にある。殊に藝術座の名聲を高からしめ、且つ經濟上の基礎を造つたのも、この「フェオドル帝」とチエホフ作「鷗」とである。

(3) スタニスラウスキイは藝術座の主脇俳優。またネミロヴィツチ・ダンチエンコと共に藝術座の創設者。これは藝名で、本名はコンスタンチン・セルゲイウイツチ・アレキセイフ。藝術座創設以前は、アマチエル俳優、演出者、文藝協會の會員で、藝術座では舞臺裝置や俳優の演出上に殆ど絶對の權限を有つてゐた。

(4) ネミロヴィツチ・ダンチエンコ。旗揚當時既に著名の劇作家。演劇に對する熱心から小さな演劇學校を經營してゐた。藝術座では劇の選定、劇作の解釋、劇作の演出上の取扱ひと言ふ方面に權限を有つてゐた。抑々この二人は偶然に料亭で初對面して、十八時間ぶつ通してその晩當時の劇壇に就いて論戰し合つたのが、藝術座發生の起原である。從つて藝術座々附の俳優は、前者が會員であつた文藝協會の會員達と後者の經營してゐた演劇學校の生徒とから引上げて來たものである。一主脇女優クニツペル、即ち後のチエホフ夫人もこのダンチエンコの門下生である。

表現を捜し當て或は新しい表現へと更へることは容易なことではない。時には、主腦の人々の顔は實に峻烈で、ネミロヴィツチ・ダンチエンコの言葉々々は險惡で意味深く、その爲に私は、局外の人間として、破滅は近しと思ひ、如何にして彼等が次の日の稽古を進めて行くかと言ふことは望みが繋がれなく思つた。然し次の日が來た時には、各員は全く新しい力と想念と新しい可能性とを得てゐた。或る時は男優なり女優なりが私の前へやつて來てこんなことを言つたこともあり勝ちだつた。「全くだ、僕は最も何もすることは能きない。なぜなら、僕が昨日やつた何もかも、あれは役割の本統の演出では無かつたやうに思ふ。凡俗の凡俗だ。僕はぶくぐく言つてみたよ——然しね、それは輕佻なことで、何の役にも立たなかつた。僕は表現の最つと何か他の方法を見出さなければならぬよ」と。而て疑ひもなく諸君は何か他の表現を見出さなければならぬと感じた時、諸君はそれを見出すものである。一つの眞實なる仕事に參與すると言ふことは實以て歡喜である。その仕事は容易な力盡しからではなく、眞の心的的努力を注ぎ込んだ場合である。吾々座員がこの劇場に於て、例へば、暴風と破船と言つた風なさうした或る一局面を舞臺に上せなければならない場合に立至つた時、充分煎じ詰つた努力と、且つはその瞬間、即ちその結果は現實的に船量を誘ふに決つてゐると言ふ瞬間に對して充分なる注

意とを集めて考へ抜いたのであつた。だからして、例へば、吾々は、壁の處から黒法師が現はれる場面に數限りなき方法を試み、而てそれは遂に、極めて自然にピーア・ギントの外套から抜け現れたのである。それはその幻影が破船なるものゝ現實的な騒亂によつて高められてゐたからである。左様、この協力と言ふものは眞の歡喜であつた。本統に私は多數の衣裳方や髪方が例令それが端役の衣裳或は髪結ひに至るまでも注意を怠らないやうにと願つてゐた。人はこの各部分に亘つての緻密な計畫と言ふものを本統に知つた時に於て、なぜ莫斯科藝術座の上演最初の日がいつも實に樂々しかつたかと言ふことを了解する。なぜかなら、總てのものは當然の位置に定められてゐて、その初日の日は、爲なければならないことは何もなく、たゞ總てのものは完全し、全く恙なき有様であつたからである。

而て今諸君はなにが故に莫斯科藝術座の觀客が上演中實に沈默で且つ熱烈であつたかを、またなぜこの演出の影響が劇場的なものでなく高尚に教育的な事件であつたかを、且つまた人々は藝術の眞の歡喜に依つて満ちてゐたことを理解することができる。而してそれは現在に於て露西亞及び露西亞の將來の甦生と言ふ全ての疑問に於て、この莫斯科藝術座の仕事の意味が非常に重要であらうと言ふ譯合もある。吾々はこの劇場の多くの模倣者及びこれと同じ感情に

をあてがつて貰つて、その仕事が満足にいゝ効果が果せるやう充分なる時間も貰つたのである。而てこの畫家達側の仕事で何か誤解が起きた場合は、何時も私はそれを論議する爲ペトログラードから呼出しを貰つて、何時か間違ひが生ずるに相違ないことを未然に防いだのである。斯くこの仕事は眞に相互の理解に依つて成立してゐたのである。

舞臺の道具一切が揃つたので、吾々の仕事なる背景を置いてみることにした。また吾々は切論を重ねて、全く完全に仕上つた四場分の舞臺を廢止することに決めた。なぜかなら、でなければ、この演出は長きに過ぎていけなかつたらうからである。然し假りにもこれに就いて少しでもの不快の念があつたと思つて貰つては困る。劇作を短縮する事にさへも創造的であつた。なぜかなら、それは机上の演出ではなくつて、想念に基づく事實の仕事に依つての演出であつからである。またかうした態度だけに於てのみでも人は、何がこの演出の全想念の爲に最上に効果あり、表現的であるかを、充分なる自覺を以て吟味立てすることができるではないか。而てかく吾々は完全なる相互の理解に依つて、この演出に於て、長きに過ぎ重きに過ぎると思はれたもの悉くを切り去つて了つたのである。

これと同様なことが俳優側にも役員側にも起つた。この劇場での配役上の選抜は、長々と

緻密に亘つての論議の後、決定されたのである。だが然し例へ舞臺稽古が十五回に及んでも、誰ひとり完成したと言ふ感情を有つ者は無かつた。無論吾々はグリーエの音樂を使つた。而てこの莫斯科藝術座附の指揮者と作曲家とは、序に、「ハムレット」と「青い鳥」とのための吾々の心を打つ音樂を作曲しながら、グリーエの組曲を最も結構な音樂に編曲したのである。實に長い時間がこの海中の音樂、アセの死の場面の編曲に費され、如何に多くの要求が當の場面即ち海底の音樂の編曲に必要とされ、また音の力を最も立派な能力に發揮させる爲にどの位いろいろと要求に迫られたらうかを吾々が知る時に於て、なぜかくも多くの婦人達が、その眼に涙を漾はせたかの譯合を始めて知るべきであらう。吾々に猶炎してゐる鬼神窟の音樂、ソルヴェヂの場面、アニトラの舞踏、さうしたものは公衆に對して全く始めての音樂として耳に響いたのである。なぜかなら、人々は全く始めての局面と眞に生ける姿とを胸に浮べてゐたからである。

無論吾々は斯くも錯雜した統合藝術の仕事と言ふものが何等の勞役なく爲し遂げられ、常に静かで微笑を浮べてゐられるものだと思つては間違ひである。私の記憶を辿つてみれば、或る時はアニトラはその踏出し數歩の演出に眼に涙を浮べて苦心してゐた。何等の苦勞なく新しい

優達はその暑中休暇の間、諸威と瑞典及びこの劇作の靈感のその本源の場所へ派遣され、この劇のあらゆる事情を研究した。秋が来て、この劇の爲の幾枚かの舞臺見取圖を論評し、私獨特の意見が判斷される時が來た。なぜかなら、彼等俳優達は幕地に諸威から歸つて來て、私の諸威は眞實なものであると言ふことを肯じて了つたからである。

確かに最初は十五場も有るこの劇を完全に演出する計畫を樹てた。事實一つの裝置も一度の役目をさせないと言ふことで、吾々は衣裳に對し三百種の考案をしなければならなかつた。それはこの最初の條件と言ふのが、各場々々に完全なる變化を行はうと言ふことであつたからである。この部分に亘つての細慮と言ふことの爲に莫斯科藝術座は屢々寫實的だと言ふ非難の的となつてゐた。然し私の考では、この寫實主義は前世紀の皮相なる寫實主義ではないと思ふ。メテルリンクの諸々の劇作もまた寫實的である。が然し誰ひとりそれ等に對して輕薄なる寫實主義であると言ふ非難をしない。それと同じに矢張り莫斯科藝術座も同様である。その諸々の演出は寫實的ではなくて「眞實」である。而て人は確かに、世界に於ける最も立派な寓話は眞實なる生活であると言ふことに同意してもよからう。而してこの莫斯科の俳優達に依つて舞臺に上せられた場合、即ちこの寓話、即ち「ビーア・ギント」⁽²⁾であつた場合、それは「フェオドル帝」

や、「ジユリアス・シイザア」や、また「ハムレット」の如うに、繪のやうに美しい演出であるばかりではなくて、皮相の親しみではなく人生の眞の悲劇であるチエホフの露西亞人生活の劇作でもある。

其處で吾々は各種の計畫やイブセンの劇の特長のある細部に亘つて實に幾晩もの論戰を重ねて愈々仕事にとりかゝつた。かうした論議中に吾々はこの劇場に關係ある人々ひとりびとの人柄の眞の個性を察知することができたのである。⁽³⁾スタニスラウスキイ—Stanislawsky—の摑み處の無い諧謔、ネミロヴィツチ・ダンチエンコ—Nemirovitch-Dantchenko—のしんねりむつちの沈黙、性急な高架系人の血を享けた技術監督のマルジャノフ。而てかうした論議の後私はこんな問ひを受けた。「然し貴方は貴方の見取圖を舞臺上に書き上げるのにどんな畫家達が入用ですか」と。私はかうした劇場側の人々がこの仕事に最上のいゝ能力を見せたく腹を決めてゐたことを知つたから、最上の畫家數人を列舉して、貴方がたがお好きな畫家一人をこのうちから選抜して下さいと言つた。「何んですつて一人?。よければ皆お使ひになつたら…」と言ふ反問であつた。「僕達は仕事を分配しませう。各々の畫家の風格に適した仕事を與えまぜう」と。其處で私は五人の優れた助手を得て、その助手ひとりびとには實に結構に充分な畫室

今私がこの統合藝術主學院の會堂に於て、諸君の前に、莫斯科藝術座のことについて話さなければならなくなつたと言ふことは、極めて當を得たこと、と思ふ。なぜかなら、「統合藝術」なる語の意味は、その最も強調された感覺に於て立派に莫斯科藝術座の働きがその意義を明示したからである。だから總て統合藝術に身を獻する設置なるものは特にこの藝術座の團結に近い譯である。

露西亞に於ては、その何處彼處に於ても、由來莫斯科藝術座の名は、藝術座が全く特有に有つ霧氣とびつたり合つてゐる。この名は決して輕佻に口走られるものではなくつて、常に必ず懇篤にして深甚なる崇敬の念に依つて話され、然もそれが斯く話されるのは、實に大市街に於てばかりではなく、苟も莫斯科藝術座の名聲が浸込んでゐる場所なら、小村落に於てさへ同様である。若し諸君がその沈黙にして順和なる觀客を控え、俗美な裝飾やぎらぎらと光る電光の無いこの劇場へ來られた場合、諸君は本能的に何か切實なもの、何か眞の藝術と言ふものを享けられたに相違なかつたのである。事實この霧氣は廣告術に依つて將來されたものでもなく、特種な骨折りが施された譯でもなく、たゞ獻身的な働きあつたが故である。

例へば人々は或る劇作の第十五回目の本式の下稽古も済んだ頃、舞臺裏から漏れて其演出は

(3) 青色の馬云々。文字通りの意味。即ち人間は知的に、馬の色、顔の色その他のものゝ色を知つてゐる。その範圍を出でない。さうした人間は事實に存する色の變化や種類を見究めないでゐるの意。

(4) ● ゴルゴツア。ゴルゴツアはアルメニヤ語。頭蓋骨の意味。これは英語での聖書ルカ傳二十三章三十三節に "The skull" として現れてゐる。然るにこれは日本語聖書に於てクラニオンと譯されてゐる。これは四世紀末に死せるゼロームの羅甸譯が希臘語のクラニオン Kraniion を Calvaria (英語 Calvary) と翻譯せしに依る。即ちこのクラニオンは基督を二人の罪人と共に十字架に釘附けせる地。從つて聖書及びその他の研究書は基督が釘附けされた地なれば文記を避けてゐる。歸する處この文字の使用は大苦難の意。

莫斯科藝術座の情況

を明確に見始めてゐる筈である。

吾々は既に創造的な仕事の現状を想ひ直してみた。吾々は既に總て難苦のゴルゴツア—Golg othas—と達成の功績に就いて考へ直してみた。無論、近代生活に於ける藝術と知識との事態は見當が外れてゐる。無論吾々はこのことを寸刻と雖知つてゐなければならず、且つ念頭を去つてはならない。然し若し總てが、創造的愛に依つて動き、美の奇蹟に依つて動き、行動の賢明に依つて動くならば、諸君は決してこの三角形を打ち毀はすことは能きないだらう。なぜかなら、この三角形の各邊は他の二邊を顯すからである。

而て今や若し吾々がこのヤンガア・ゼネレイションなるものが、これ等三つの起點の威力を銘してゐると言ふことを知るならば、無論、生活の總ての困難を乘越えてこの意識を運び行くに相違ない。而して吾々が兄弟關係に就いて談り、愛に就いて談り、調和に就いて談る時に於ては、吾々は最も無稽な、的外れな、時代後れの語を繰返へさずして、生活の目前の實行への切實なる語を交はさなくてはならない。奇蹟は人生のまゝたゞ中、行動のまゝたゞ中、熾熱なる調和の中に於て演ぜられつゝある。陰夜の諸々の幻像は假想物に變り移らないで、祝福されたる者共の辿る道との幸福なる合一に依る現象と變り行きつゝある。

暗闇の中に打開けられた窓は吾々の耳に陰夜の聲を持ち來たす、だが然し、愛への呼聲は吾々に聖者の答を持ち來たす。新世界は近づけり。

譯者註。

(1) ミメ。ミメはヅクナーの樂劇、即ち四部作樂劇中の第三部なる「ジックフリード」に於て現れ出る人物。奸策の矮人。精鬼の義。ジックフリードが孤兒となつたのでミメが育て上げ、彼をうまく使役して淵に投げられる財産悉皆手に入れ、ジックフリードを毒殺する考。然しミメは却つてジックフリードの爲に刺され、怪物の洞窟に投込まれる。「恐れを知らざる者こそ事を遂げ得る」と抜きつけたミメはジックフリードが怪物の血を舐めた時に總てが露見し全く計畫逆轉である。この樂劇に於てヅクナーはその書翰に言つてゐる通り、吾々が求むる来るべき理想人物を表はしてゐる。(書翰集参照)

而てジックフリードはキスに依つてブルンヒルデを喚醒まし、彼女の初心も叶ひ、古きものは棄たれ、新しい結合と新しい種族とか發生する。このブルンヒルデがキスに依つて眼覺める時の音樂は美しいので有名である。

(2) エリコ。舊約全書ヨシニア記六章二十節參照。「芳香の地」なる意。バレスタン中の一市街。ヨルダン川の西方。ゼルサレムの東北十四哩。ヘロデ王の統師地。

きやを識る。彼はくだらないものになるに相違ないセメントの造像を築いたり、朽ちたカンヴァスの上に繪を畫くことの愚であることを識る。次第自然と人々は何が保存されなければならないか、如何にしてそれを保存すべきやを識るやうになつて来る。即ち神性精力の火花の跡として保存すると言ふことを。

若し萬一にも知らないとあらば、人はこの向上に就いて、これを學び知る過程に就いて思考し、且つ創造しなければならない。

多くの人々は週の終りに教會へ行く。多くの人々は週の終りに於て彼等が支拂ふべき勘定は幾何であるかを思ひ起こす。然し、過ぎし七日のうち、その一週間のうちに僅かに一度さへ、果して美と知識との境地に何を與えたかを考へる人は實に寥々たるものである。而て藝術がこれ等の閉された扉ドアを敲かうとも無効に終る。この心の戸叩きは脳あたまに不快を與へ、たゞ騒々しい福音に過ぎない。窓々の鎧戸は更に固く閉められ、絹のカーテンは新鮮なる空氣の通口と云ふ突破口を障つて了ふだけのことである。

世の中に於て止むを得ず藝術を愛する人は誰もゐない。藝術に就いての會話の大勢は、藝術の愛の問題ではなくて、たゞさう取扱ふのが當然だと言ふ譯合で済んでゐる。さるに拘らず藝術

術と知識とは進歩する。

次第に増大されて行く電流は燭光を増して行く。其處で電光は特別な光輝を放つて冴々と輝く。だが吾々の眼にはそれは直ぐ消えて了ふ。だがダイナモは尙一更大きいエネルギーで働く。これは吾々の眼が最早さうした緊張力での振動を認知しないと言ふことを意味する。然しその眼に見えない光は増進の度を増す。

なほまた貨車一列車が諸君の眼前に於て除々と動き始めれば、實に美しい景色は隱されてしまう。列車は速力を増す。貨車と貨車との隙間からは、切れ切れの景色がちらと諸君の眼に見えれる。列車は全速力で駆る。すると諸君は、恰も列車を透視して景色の全圖を見るやうに思ふ。物質體の障壁は消え失せて了つたのである。

暗闇の中においては吾々は往々燃え出でようとする光を眼に訴へないでゐる。然し、それに對して、若し吾々が凝思を深めるならば、この肉體的外衣を打破つて、眞の運動を始める眞の世界を母モチび見始めることがあらう。

從つて現在でさへ吾々は往々宇宙の諸運動の振動が擴展して行くことを認めることが能きないでゐる。然し最早吾々は連列の貨車を通して山獄の頂角に運命が吾々に懸けられてゐること

るに拘らす、彼等の桎梏された脳はそんなものは事實には存在しないと知つてゐるからである。人生に對し、宗教に對し、知識に對し、美に對しての如何に多くの論争も、今までにこの桎梏された脳に依つては實際には用立つてはゐない。流儀々々の足枷に縛られると言ふこと、その流儀々々とは牢獄である。

だから諸君の敵は必定多くの事を知り、從つて彼等は將來の文化を扶ることさへする。彼等は知らず識らず彼等自身の將來の文化の爲にもその扶けをする。

彼等は必ずその「素破らしい」物質的藝能と事物とに依つて、諸君を壓し潰そうとしたことだらう。彼等は彼等完成の生活及び彼等完成の種族の根據を高めた。彼等成就のその知識の誇りに任せて、總ての「不必要的」針金を截り落した。縱しやそれが腐れ物であらうとも、兎も角製造品をぎつしづ詰込んだ倉庫の權勢のまへには、哀れな精靈のことなんか問題ではないではないか。敵は既に必勝を期し、彼等が否定の名譽の爲に讃歌を頌する。だが然し其處にはをかしげなことが起る。誰れかかれかどその品物を受取ることを肯ぜない。時は彼等の貯藏品を腐らし行く。而て外貌から判定するにしてはそれ等の品物はいと古き時代の生産物の傍に置かれては不似合ひである。而してそのがらくた堆積の背後からはたゞ、勝利あり駁すべからざる

精靈の創造物が顔を見せて来る。

此處で吾々は、この地球上の諸々の博物館（存續物のこと）に一瞥を投げてみよう。つまり數千年來この方の。一體吾々の後に来る者達はその生存の日に於てこの現在から存續物の何を見出ことだらうか。最う遠ツくに原子エネルギーの事も調和の力の事も知つて了つてゐるだらう彼等に。書物・新聞・紙・織物。總ては塵埃と化して了つてゐるだらう。セメントや鐵は遠ツくに屑となつて了つてゐるだらう。色と言ふ色は黃色く且つ灰色に化して了つてゐるだらう。多くの造像は粉微塵に崩れ落ちて了つてゐるだらう。吾々の墓場の中の残れるものはみすぼらしい荒廢に歸して了つてゐるだらう。而してそのうら悲しき一幅の繪の傍らに既に一度ならず數千年の意味を解せられてゐる古き日の數々の圓柱碑がその時もなほ殘ることであらう。

諸君の敵の作せる多くの仕事は時とともに消え失せるべきものであらう。實に淨化の戰の中に於ても諸君の友達の幾人かはまた潰滅する。然し調和とは如何なるものであるかを理解する人達が存續する。なぜかなら彼等は調和とは全部全物質の答應合致のうちに存立することを知るからである。何が爲に働いてゐるか、彼が表現するものは何であるかを知る、ハ間はまた彼の使ふかずかずの物質の答應合致を創造する。彼は如何にして書物—知識の巻本—を保存すべ

るようになる。而て其處に始めて總てが本然の姿に整ふ。

諸君の害敵は屢々忿怒する。だが、憤怒する人間は最早力無き者であり、何等危険無き者である。彼等の叫びを使ひ盡して了へば、彼等は諸君を口を噤つて衝き碎かうと眼を光らせるだらうが、沈黙の圈中にゐての仕事は實に愉快である。彼等の叫びに依り、彼等の沈黙に依り、この兩者は諸君に利益を與へる。オ、親愛なる害敵よ！。時に汝は汝を吾々に嗾しかけてゐる者は實に小さき矮人であることに氣がつくかどうか。最も粗暴なる心の持主と雖、斯くの如き手引や類同は耻すべきものだらう。

私は、寛容なる敵が諸君に四顧せよと強ひ、諸君の知識を検正せよと強ひ、甦生の不續を以て行けよと強いた場合、その場合に就いては總て何事も言ふまい。

敵に祝福あれ！。

「然し貴方はなぜ貴方の敵に拘はつてゐるのか。貴方には貴方の總ての友達で充分ではないか」と諸君は私にお訊ねになる。無論私は私の爲に物語つてゐるのでもなければ、恐らく諸君の爲にも喋舌つてゐないだらう。然し私は今ヤンガア・ゼネレイションの爲に物語つてゐるのである。それは屢々その當初の敵を如何に防避すべきかの方法を知らない。而て簡短に河を渡

ればいゝものを、岩また岩を積上げて貴重なる創造的時間を棒に振る。然し刻一刻に於て當然教導を受ける者もあるだらうし且つ悦びを受ける者もあるだらう。錢に依つての悦びではなくて、遠く新しき地點の近づくことの悦びを知ることに依つて。

若し假りにも全世界が悦ぶに足るものなら、若しそれがたゞ瞬時のものであらうとも、エリコー Jericho の暗澹たる城壁は立處に崩落することだらう。然しまだまだ全世界への歡喜は遠き叫びである。

吾々は屢々物事を周到に見識り過ぎるので、その結果若しその理解は全く誤つてゐたと言ふことを程経て氣づくものであらうとも、吾々はそれでも吾々の主張を曲げやしない。新しき第三の眼を味方に取入れることはしないで、吾々は吾々が有つニツのものを取捨てる。

森林中の道を歩んで、諸君の友達より先に進んで、試みに諸君の友達が氣附かないやう草叢の中に外れてみ給へ。そして、友達を先へ遣つてみ給へ。其處で諸君は彼の後方から呼んでみるがいゝ。彼はたゞ彼の歩を前へ進めるだけである。而て諸君の聲を前方に聽いてゐる。なぜかなら彼の脳は諸君が前方にゐるものと知つてゐるからである。

一體人々はなぜ青色の馬や緑色の顔を見ないのであるか。なぜかなら、それは眞の有様であ

「汝の敵は誰であるかを告げよ。さらば余は汝が何者なるかを告げん」

私の友達諸君。貴方は貴方の敵を愛しますか。

誇りを感じるのは諸君の友達に就いてのみに限らず敵に對してもと言ふことを納得せよ。諸君がその敵を愛さないと言ふ事は悲しむべきことである。諸君は必ず彼等を愛すべきである。彼等とは全く辛苦の生物である。彼等は諸君の爲に慟く働いてゐる。彼等は諸君が諸君自らを知るよりも更に最もと諸君を知つてゐる。彼等はその辛苦の努力に依つて諸君に實に靈妙の發見を寄與してゐる。彼等の思考に於て諸君は全能力ともなり廣大無邊ともなる。而て屢々諸君の敵は諸君を扶け且つ諸君の崇高なる理念を助ける。而て全く屢々諸君の敵の一撃々々は諸君の爲に新しく且つ眼に訴えない友達を鍛練する。

彼等の「仕事」が完了すれば、諸君の大膽となれる敵は會議や會合に座席を占め、諸君無くとも諸君の用務を清算してくれる。然しその創造力と言ふものがヅクナ一のミメの場合の如うに彼等の裁定を逆轉して了ふ。またそれ等親愛なる諸君の害敵は一體彼等が何を喋舌つてゐるのか明白には知らない。程經て彼等はそれに説明を加へる時が来るだらう。然し依然として敵は敵である。火矢を身に浴びるまでは。其時に於て全く憔悴して彼等もまた注意深くなり且つ悟

「西亞藝術」の兩書に挿繪として現れてゐる。また露西亞繪畫に對する大様は右の二書が親切な手引であることを附言して置く。

扶助者

以上或は以下であるにつけ、それは容易ならぬ事件であつた。而て彼は畫家に作品を手に入れたいことを直願し、執拗に低い値段で頒けて貰へるやう説きつけたのである。而て彼の舌は効果を見せてスケッチが彼の手に這入つたのである。而て彼は子供の清潔なる歡喜を感じて悦び、この新しき什寶に就いて熱意の手紙を方々へ書送つたものである。無上に彼は藝術を愛し!、如何に崇高なる意味に於て彼は眞の創造的仕事の意想を抱続してゐたことぞ!。

遺言に依つて彼の全蒐集は公共用の爲に提與された。それにも増して彼は、その貧弱な財産全部、彼の日々の用品全部をも叩き賣り、更に突進んで彼の蒐集に加へらるべき藝術の制作品を最つと買込む爲にその錢を使用するやう命言したのである。

これは外面向的には目立たないが將來の文化の爲に働く深甚に緊要なる人間の典型である。この彼の實證は多くの人々の注意を集めた。而て若し諸君が戰場から送り來れる彼の手紙をお讀みになるとあらば!、彼とは一人の純淨なる靈長である。クラッチコブスキーカ佐は去にし大戰中に壘れたのである。

私はまだ多く多くの人物、藝術の各種の方面に貴重な探求に満ちてゐた人物を擧げることが能かる。然しこれ等四人の典型を以てしてさへ、人性にいと必要なるこれ等教養ある高志の水

準を示してゐる。

斯く物事は事實なのである。夢ではなく、眞實生活に於てある。——親愛に且つ活動的に。而て斯くの如き純淨なる働き人の面々は歡喜の微笑を伴侶となる。精靈の達成の爲に如何に藝術の諸種なる探究が吾々に近々と迫つてゐることぞ。

時は方にこれ等の驚異すべき水路を理解し、銘記し、而て生活へ認容すべき時である。

而して藝術が活動的に、敵し難く且つ單純に、公衆生活の靈的發展の中に喰入つた曉に於て、其時またそれは近代生活の纏體の中に投ぜらるべきものであらう。

而してこれ等の水路を通り過ぎることに依つて、福祉の眞の道々は各人の心に近々と迫るものである。

譯者註

(1) 今本書に於てツレチャコフ畫廊の名が現れてゐる。併しこれは本書を持つまでもなく、少しく露西亞藝術に理解を有つてゐられる讀者なら御記憶のことゝと思ふ。即ち一例を擧げても、露西亞繪畫史で特色ある位置を有つリヤ・ルパンの作表作なる「ヴォルガ河の曳舟夫」「十字架の式例」「副僧正」などは何れもこの畫廊の蒐集である。アレキサンドル・ベノア著「露西亞畫派」、ロザ・ニユマアチ著「露

も、壁や天井の裝飾にも、また灯や床敷の特質にも現はされると言ふことであつた。これを以てして吾々は如何に知覺の靈妙がこの若者の魂の中に存し、且つ如何に深甚の愛と管理とがそれ等の畫家に依つて表現された作品を取卷いてゐたかを推定することができよう。これ等の特別なる部屋々々では時に擇まれた歌や音樂が聽えるべきであつたらう。また適處を得た文句が聲高々と朗讀さるべきであつたらう。一言にして盡せば、藝術統合の調和の夢が實現さるべきであつた。

吾々はその頃藝術の一新制作がこの蒐集の爲に選擇されたと言ふことを聽くのは實以て歎ばしきことであつた。如何なる靈妙にして眞實なる思考が、藝術家の創造的制作に於ける新しく價値ある特色の發見に、且つはそれを明るみへ持出されるに就いて吐露されたことぞ。而て諸君はこの藝術の取扱方に於て、それは決して空想ではなく、眞の教養的欲求であることを知ることができる。而てこの教養の靈妙と言ふことは、彼を繞るそれゝの人々へ傳播したのである。思想も言論も俱にこの精靈の輝かしき向上に依つて淨められたのである。

スレブトソフは自らの名前に何等考慮なく、この蒐集を國民に手渡そようと夢見てゐたのである。然し彼はそれを爲す暇なく天死して了つた。彼は風變りな死に方をしたのである。馬に乗

つて出掛け、それ切り歸つて來なかつた。彼は自然のたゞ中に、調和渾一界の調和の聲に耳傾けつゝ、圖らずも逸失し去つて了つた。羨望すべき道、新しく美しき勞役への道を。

これは來るべき調和と統合に就いての根深き感情を有てる敏感なる一靈長の典型であつた。さて最も一人の蒐集家は吾々に感動を與える典型である。

常備本軍の歩兵聯隊に所屬してゐて、遠き一地方の町に駐屯してゐた一貧乏將校は彼の全靈を捧げて藝術へ迫つてゐた。世のかずくの慾望と蟬脱してゐた。常に快活な物腰で、常に活動的で、熱意に燃えて、露西亞繪畫の特標となるべき作品の蒐集に熱心であつたのはクラッチコヴスキイ大佐—Colonel Kratchkovsky—である。無論彼は大作を集めることは不可能である。だから彼はスケツチ、習作、素描、と言ふ風な小作を集めてゐた。然しその實質の價値に於ては彼の蒐集は全く見事なものとなつた。彼は最高畫家のものを索ぐり廻つた。彼はスケツチと言ふものが屢々作品そのものよりも遙かに價値あると言ふことを知つてゐた。彼の希望は藝術家の特性がその最も典型的な姿で現れてゐるものに在つたのである。これは安値繪の買手ではない。これが本統の蒐集家なのである。而て加ふるに一體彼は屢々十留即ち五弗の錢に不自由したのである。而て彼にとつては、一枚の繪に對して支拂はなければならない錢が、十留

ドやイゼンブラントやプレスの陳列されてゐるのを知つたなら、定めし彼は痛嘆したことだらうと思ふ。

ゴレニシユチエフ・クートウゾフ伯は眞と言ふ名に於て諸畫家の正統なる名を發見しようと努め、且つ能き得る限り金錢づくでの人間史の罪を救つたのである。而て如何に愛すべき入魂が彼の選擇せる蒐集に呼吸を吹返してゐることぞ。またその一作々々は困難と窮乏とに耐えて手に入れられたものである。この蒐集への一枚々々の新參者は多數縁者に依つてそんなものに錢が投げられるなんて莫迦らしいとしての否認を以て迎えられたものばかりである。而て墓口は實に拂底であつた。彼の貰ふ宮廷での給金は僅かで食ふだけがむづかしい。而てこの蒐集家は彼の眞の友達共、即ち繪畫に、圍繞されてこの世と袂別して了つたのである。而て彼はその蒐集が必ず来るべき懇求の魂——人々——に新しき歡喜を傳播することを信じてゐたのである。

ゴレニシユチエフ・クートウゾフは新しき、美と眞とに働き、且つ悦びを感じて、人間の精靈を高貴にする爲に役立つよう、再び吾々にその師表を示せる文雅な蒐集家の典型であつた。さて若き蒐集家の典型——即ち其小學生時代からの本能的蒐集家の典型に就いて言はう。それはさうした時代相應の當然な歡喜のかずくの代りに、この子供は藝術の制作に對する愛を發

現し、何等個人的に藝術的能力を有せない兒童時代から教育に依つて特性を見せ、また嗜好に依つて啓發を享けたのである。彼は美しきもの總てに心を寄せ。その精靈は向上を追求したのである。

若きスレプトソフー^{スレーブト}と一緒で時を過ごすと言ふことは實に愉快なことであつた。未だ彼が學習院の一生徒であつた時代既に彼は繪畫を集め始めたのである。彼の購入したもののは渾沌としたものでもなければ、また氣紛れの沙汰でも無かつた。彼は自ら自分が爲してゐたことが何であるかを知つてゐた。而て彼が慰みを求むる爲に彼の母から與へられた錢と言ふ錢は残らず彼の高尚なる慾求に使用されたのである。而て例令時には錢が足り無くとも、彼の大綱の任務に對する熱心はそれに依つて怯むと言ふことは無かつた。

而してこの大綱の任務は見事な事業であつた。この若年者は非常に靈妙に選擇された或る畫家達に對する愛を發見して、それ等一人々々の創造的人間生活の一完の作品を寶藏し且つ後世へ置土産とする爲に、それ等の人々の特標となるべきものを總ての時代に亘つて所有しようと決心したのである。この若者は未來を夢見てゐたのである。即ちその夢とは、吾々の畫家は一室宛部屋を有ち、而てその部屋の全造作はその藝術の特質に符合すると言ふこと、即ち家具に

全露西亞畫派を代表するに充分なるものを集めることができた。事實彼の富がこの大規模な仕事を貫徹せしめたには相違ない。然し、この蒐集館の内容、作品に對する愛、彼が繪に對して家に對しての選擇と言ふ點に於ける彼の生ける創造的事業、これ等總ては彼の富に起因するものではなくて、彼の精靈が無限豊富であつたからである。斯く一個人の間、精靈に強き人間の爲したこと、それが無久に重要な國的事業を果たす。而て今や政府は新しきツレチヤコフ畫廊を得ようと乞求めようとも、それは無力の結果に終らう。なぜかなら前者とは美の比類なき結合を創造した精靈の促進であつたからである。

以上は一國民的限界中での理想的創造力の一例である。

さて次に最う一人の靈的人物の事である。此處にも吾々は常に墓口と言ふものと絶大の苦闘を舐めての靈的肉迫の同じき力を知る。それは、詩人としても知名の、教養ある社會に立働くた、然も宮廷に於て侍従の職を有つてゐたゴレニシュチエフ・クートウゾフ伯—Golenshtchitoff Koutouzoff—である。この人の場合に於ては、彼の家風傳統が藝術の愛と言ふことに都合よくその展開を導いたのである。歴史に對する造詣は立派で、且つ並外れて深き詩的天賦に恵まれてゐた人間である。

彼が蒐集の内容は古き和蘭派、フレミッシュ派、伊太利諸派である。その本質的特徴は習俗的著名畫家達を漁ると言ふのではなくて、眞實が驚異すべき創造に依つて果されてゐるものを蒐めることであった。この蒐集家はレンブラント、ルヴァンツ（（ンスと言ふ）普通ルーベ）。ファン・ダイクの名は完全に一般蒐集的の名であると言ふこと、且また蒐集家としての最下の典型に屬する人々がたゞ暗中漠索する時、彼等にとつては捕まへ處の無い音に過ぎないと言ふこと、この二つを中心得てゐた。だが然し藝術に對する立派な理解力に訴へれば所謂大藝術家なる名の爲に無數の藝術家が踏臺にされてゐることが解る。而して教養ある蒐集家の任務とは、眞と言ふものゝ爲に名を忘れられた人々のうちから明るみへ引出すと言ふ事である。若しレンブラントだらうと決められてゐる卓越なる作品の上に、彼の弟子カarel・フエブリシユス—Karel Fabricius—の落款を發見したとしても、何をいゝ作品はいゝ作品に違ひないではないか。また最う一つ、果してファン・ダイクは一年間に二千枚の肖像畫を書き得たか。無論能きなかつたが然し、彼は二百人に垂とする弟子を有つてゐた。

私はこの伯爵が愛情の畫家中での一人であつた無名のフレミッシュ畫家ハスレイアの作品が現在紐育のメトロボリタン美術館にヨアヒム・バチニイルの作品として（（ルの作品もよくダヴィ

根から模様更へだと言ふ報導を受ける。だが然し誰だつて一驚もしない。疑ひもなくをしなべての歐州劇場に於ては、斯くも度重なる下稽古での仕上つた演出を模様更へとすることは嘲笑の種であつたらう。事實をしなべての劇場に於て斯くも度重なる下稽古をすると言ふ消息も稀なことである。然し吾々がこれを莫斯科藝術座からの消息を得た場合、誰だつて苟もたまげると言ふやうなことはなかつたのである。なぜかなら、莫斯科藝術座の一回々々の下稽古は、單に劇作の死せる文字に輪廓を與えたばかりではなく、その一回々々の下稽古が一つの新しい創造的成就であつた譯である。だからして創造的な力と言ふものは限りなく増大したのである。而て此處に於て莫斯科藝術座が有つてゐた特有の霊氣を理解する秘鑰が見出される譯である。

時は千九百十二年のことであつた。私は親しくこの劇場の仕事を知る時が來た。と言ふのはその年、この團結の主腦達が私に面會を求めて、果して私が彼等と一緒にどんな芝居ならば共に働くかを訊ねに來たのであつた。先づ最初これならばと思はれた二ツの劇に就いての提議を亨けた。メーテルリンクの「マレニヌ姫」とイブセン作諸威喜劇(1)「ピア・ギント」—Peer Gynt—とであつた。どちらを先に選定するかは私には困つたことだつた。なぜかなら私は本統に親しくメーテルリンクの繪の如うな美しい外面と深き内面とに心を寄せてゐたからである。然しイ

ブセンの創造にかゝる牧神人の聲もまた近々と私の耳に響いたので、結局イブセンに決定した。

莫斯科藝術座と言ふものは、演出に就いて舞臺道具の方面が指定される前ながながと骨折りが盡された曉に於て、其處に有りつけた問題の研究が熱心に遂げられるのである。而てこれは圖書館に於てなされるばかりではなく、何か地方的の地理や歴史の霊氣が必要である場合は俳優なり演出者なりが染々とその主題を研究する爲に、實際の場所へと派遣される。無論「ピア・ギント」の場合もさうであつた。吾々がこの劇を決定するに當つて、劇場側からの私への質問は、果して私が曾て諸威へ行つてゐたことがあるかと言ふ質問であつた。私は行つたことは無いと答へた。すると彼等はこれに答へて、「是非行つて貰つて總ての狀態を研究して来て貰はねばなりません」と。で、私は斷つた。すると彼等は頑張つて、總ての便宜は出來てゐる旅行の準備も完全に整つてゐると明言した。然し私は彼等に説明を與えた。私の執る方術は常に先づ裝置なり場面なりを創造することであつたからである。「然る後恐らく私は諸威へ行つてもいいでせう」なぜかなら、常々私の企畫するものは、劇作家なり作曲家なりの創造的產物の内面の源泉を擷取し、地方的「實體」なんかに取粉ぎらはされるやうなことなく、內的本據の上に、私の裝置を創造することである。遂に彼等は私の意見に同意した。然し全ての主なる俳

間々四五の藝術家の友達の忠言を聽いたに過ぎない。而て現在莫斯科に於ける有名なるツレチヤコフ畫廊が存立し始めたと言ふことは決して偶然の出来事ではないのである。ツレチヤコフは繪畫愛好家としての眞の直觀に訴へて、政府と言ふものが藝術家の眞に立派な作品を見逃して了つて、大低は官僚的な外觀は露西亞の國民的神精神の流派の進化に反響を與えることは能きなかつた。事實今までさうであつたし恐らく私は更に將來も同じでは無いかと心配してゐる。藝術と言ふものは常に熾烈なる個人的肉迫に依つて美しく花を開いてゐる。その藝術が國民全般に對して理解され、見出され、寶藏され、惠與されるのである。而てこの商人ツレチヤコフは斯く藝術の國民的任務を掌握したのである。而て彼は清新なる藝術家達の力を見抜いてその道に光を與へ、純淨なる悦びの中に彼等の作品を寶藏したのである。然し彼は彼一個の歡喜を國民的歡喜に移し、今もなほ彼の異常なる蒐集の全部は莫斯科の市^{モロコシ}の所有として生動してゐる。而て彼が自ら投じたこの任務は決して微々たる仕事ではなかつた。彼は貴重なる繪畫を堆积したに止まらないで、彼のこの蒐集は露西亞畫派の全般に亘つて反響を與えたのである。新しきもの、輝かしきもの、重要なもの、總てはツレチヤコフの慧眼の下に集まつたのである。

この寡默にして薄白髪の彼は、その大きい體を毛皮の外套で包んで根氣よく展覽會と言ふ展覽會を觀歩いたのである。而て彼が繪畫とは緊要なものであると考へた時、それ以外彼は何物も要らなかつたのである。彼はよく藝術と言ふ仕事に手始めの若者が住める畫室への嶮はしい段梯子を昇つたものである。彼は一枚の繪が仕上げられたらそれを第一番に見、展覽會が開催されれば第一番に入場する人であつた。然し彼はまた最上にして且つ最も特質を具へた作品を所有する第一番の人でもあつた。

この結果はどう言ふことになつたかと言ふと、如何なる最高の藝術制定機關での賞牌もツレチヤコフに依つて買取られた一枚の繪の前には顏色無しと言ふことになつた。而て畫學生の運命は帝國美術院に依つて決定されずに、この親愛にして寡默の人間に依つて定められることになつた。而てその邸宅の壁面に隙間が無くなつた時、ツレチヤコフはその傍に最後一棟を建増したのである。必要とあらばぐんぐん棟を増したのである。而て藝術は決して損傷を受けなかつたのである。

無論これはツレチヤコフの莫大な富を以てして始めて斯くも大規模の蒐集が可能であつたと言ひ得られるかも知れない。彼は最上のものを選擇することが能きた。また彼は彼の蒐集館に

如何にして吾々は藝術を吾々日々の生活に持ち來たすべきか。一體何處にこの祝福された道々があるのか。恐らくはその道々とは到達し難き困難にあるものなのかな。なほまたその道々とは或は莫大な富を要するものなのかな。また靈的の巨人達のみがこの美的の道々を突進んで行くものなのかな。

總ての保證は信服の力無きものだらう。以上の疑念はたゞ眞の生活から除外された書に依つてのみ答を得ることが能きるだらう。

私は私の友達四人の人間を例證として持ち出してみよう。彼等四人は今はこの世を逝きし人々である。彼等のうち一人のみが富を抱へてゐた。他の三人の富とは僅かに彼等が精靈の輝きを有つてゐたと言ふに過ぎない。

その富める蒐集家とは莫斯科の商人ツレチヤコフ—Tretiakoff—である。彼の家風には彼をして何等藝術に心を寄せさせるに足るものは無かつた。寧ろこの古風商人の家族は藝術なんて譯の解らないものだと言ふ疑惑を有つて眺めてゐたのである。然し意外にも若きツレチヤコフは新しき道に導き出されたのである。而て彼は個人的な感情を手引として、手索ぐりで熱心に露西亞畫派の作品を蒐集し始めたのである。彼は彼の道を獨りで歩いて行つたのである。たゞ

蒐
集
家

ては眼前に現れてゐたもの、手引の本元、それ等は影を失せ、後尻去りをして了つてゐる。

然し諸君はこの兒童は聖殿から逐出してはならない。音樂とか美術とか言ふ實に至難なものとは斯く最も單純なものではないか。

だが然し、例令機械がほこりや塵に依つて惱まうとも、感動し易き若き魂に對しての精靈的汚穢が如何に破壊的であるに相違ないではないか。吾々生物の憧憬に於て小さき頭は光を乞求める。吾々生物の苦惱に於てその小さき頭は總て周圍の嫌厭すべき事柄を感する。惱みを受け、弱はりに沈み、時には永久に塵芥を枕として了ふのである。而てこの創造的な器械は動力を失ひ、その全電線は凋落して了ふ。

學校と言ふ學校は創造的努力に對し、藝術の偉大に對して道を開けよ。凡庸と沮喪との代りに歡喜と先見とを置けよ。兒童を人生の顰^{ふそ}ツ面から擁護せよ。兒童には活動力と輝かしき學識とに充ち溢れた勇敢にして幸福なる生活を與へよ。

兒童期の第一歩からその創造的本能を發展せしめよ。

人性上の災禍なる生活上の愚事や孤感や倦惡は斯くして創造する人間なる兒童の若き魂の傍を過ぎ行くだらう。

禱社の道を啓けよ！。

場合には上に述べた敷石を敷いてやらう。だが努力は必要である。然らざればこの吾々の生ける日は藝術の仕事を特別の厄難に依つて脅かす。藝術は繁榮しなくてはならない。また音樂の靈的の叫びは自主的に株式取引所の真ツたゞ中に、國際聯盟の會合中に、鳴り響かなければならぬ。

最う一つは「陳腐と去ること」である。吾々は慚愧を感じて信に吾々が是非念頭に置く必要のあることを白言し且つ記憶しようではないか。兒童の教育に於ては吾々は今なほ創造的力の展開を忘念してゐる。先づ人々は兒童に習俗概念の堆積を注文しようと心掛けてゐる。先づ兒童は恐怖に溢れて成長していく。其處で兒童は家庭内の種々雜多な争ひごとに名染む。其處で兒童は活動寫眞を觀る。そのフィルムとは、惡と言ふものが實に頭が働いて且つ輝かしく、善と言ふものが實に微温まづぬく且つ悲境であると言ふ罪惡的フィルムである。其處で兒童は教師に托される。その教師なるものが、不幸にも、彼等の教へ子に對して微塵の愛も有たない人間であつて、執拗に光の失せた書物そのものを繰返す。更に突進んでは、兒童達は日々の新聞の愚俗なる見出シを見ることとなる。次に兒童は所謂運動競技なる圈中に仲間入りをする。それは兒童の若き頭の發達に擲ぐることだの手足を挫くことなどを教へるものである。而して以上が

如何に若者の時代が先づ占められてゐるかの狀態であつて、兒童は全く愚かしく且つ遊用の法式を與へられるのである。而て斯くされた後、即ち汚され且つ腐蝕された後、彼は創造的な仕事を手始めるのである。

これは罪のどん底と言ふべきものである。如何なる機械工と雖この兒童の取扱方よりは最ツと最ツと注意した取扱方である。無論機械は「全能」の錢なるものゝ支拂を受けてゐるのである。機械はほこりが積むに任かされ或は塵で滅茶にされではならないものだらう。だが兒童には一文の錢も支拂れないものである。

吾々は屢々子供の畫いた素描に異外な特質のあるのを見て驚き、子供の歌のメロディに、子供の論法の聰明なるに驚く。總てが未だ打開されてはゐない處には常に美しいかすかずのものが在る。然し總て吾々は兒童が歌はなくなること、畫かなくなることを發見し、且つ兒童の論法なるものも所謂兒童讀本の形式に傾くといふやうになることを發見する。愚事の感染と言ふことが既に兒童に深く喰入つてゐる。而てこの恐るべき疾患の徵候と言ふ徵候は明瞭に現れてゐる。倦怠はあり／＼と顔に現れて、習俗的な微笑となり、氣の進まない物事に對しての服従となり、遂には孤感の恐怖となつて了つてゐる。だから何か近々と身に寄り添つてゐたもの、曾

考では人間は歩行するほか何ごとも仕ないものだと思つてゐる。現今の人々の概念では人々は惱みのほか何ごとも知らないと思つてゐる。然し聖考達の理解に於ては人々は悦ぶべきが本統であると考へられてゐる。

事實この時に於て藝術を歡喜に依つて占めると言ふことは人々の耳に奇妙に響く。藝術に就いて多辯が弄されてゐる。然し藝術が人々の生活中に持ち來たされることは實に寥々たるものである。而て常に天晴れな辯明や説明やがそれに對して手向けられる。それは常に非難と言ふものゝ最も確實なる狀態である。總ては非難を受けてゐる。非難と言ふものゝ無いのは、闘牛を觀に行く人、或は拳闘社會の規定に従つての一拳闘勝負を觀に行かうと言ふ人、さうした所謂文明人に於てだけである。其處に心も墓口も打開かれて了ふのである。

問題は果してこれ等の人々がどれほどまでに藝術の爲に盡したかと言ふことである。どれほどまでに彼等は藝術をその日常生活に持ち來たしたか。彼等はたゞこの疑問を聾いて喫驚してゐるに過ぎない。然し諸君は、石器時代の穴居人なるものが、この地球上の征服者より一步進んだ考を有つてゐると言ふことを知らるゝだらう。今や人間は再びそれを話題としなければならない。

現代のやうに藝術の自由に對して特別なる稅を課そう課そうと睨んでゐる政府が存在し、從つて元氣のいゝ障害が美の苦難多き道に横はるに於て、人間が藝術に就いて話さないのはどう云ふ譯か。此處にもまた矮人の仕事がある！

而てまた同時に人々のうち僅かに百人中の十人が彼等の日々の生活に藝術を持込み且つ藝術に就いて何かを知るのである。百人の二割、それ等の人々が何等の鑑賞を有たず、たゞ藝術に就いて話すに過ぎない。残り七割は通常、藝術とは何であるかを知らず、寧ろ今や藝術とは何であるかを念頭に無く、喋舌つてゐる。

然し例令それが單に機械的であるに過ぎなくとも、「善い善い善い」と繰返し言ふ方が、例令それが苦蟲を走らせてのことであつたとしても、「悪い悪い悪い」と唇を動かすよりはいゝ。この對立の本據は山來多くの人々に依つて認容されて來てゐる。だからこの方法に依つて吾々は吾々自身に、假りにもそれが一週間に一度であつても、果して吾々は過去七日間に藝術の爲に何を爲したかを自問しようではないか。また一方政治家、議員、牧師、銀行家、商人と言ふやうな人々、而てまた屢々その永久浮ぶ潮なき勞役に誇りを感じてゐる總ての人々、さうした人々にこの實に容易な慣習を悟り知らしめよう。人が自覺歡喜の道を辿り進むことの能きない

庭の敵となるかも知れないと言ふことを記憶せよ。

對象とするものゝ解釋範圍にその調和が在る。而て再び諸君の精靈は敵か味方かを明白に判別する。

吾々は音樂や色彩が何時に變らず吾々を慰撫することを知る。吾々は歌謡の力と言ふものを考へ出してみよう。吾々は寺院や美術館で經驗する胸の高まりを思ひ出してみよう。神の住居！大神秘の家。藝術のみがこの大神秘に肉體を給與する事が能き。而て大靈の聖奠はその基礎にたゞ美を有するのみである。

無論諸君は藝術を愛する。而て諸君は私に種々のことを訊ねる。諸君は家に調和を與える爲には何が一番屈強であるか、畫架繪であるか寫眞であるか知らうと希ふ。一應家廻りを整理するがいゝか。然らざればまた毎日々々新しい繪を部屋の壁に掛ける支那や日本の實例となつてゐる心持に更に生氣が在るか。屹度諸君は藝術の聖殿と言ふ顔つきをしてゐてその實小商人の小屋掛を潜ませてゐる吾々近代の展覽會なるものゝ方針は正しいか正しくないかに就いて訊ねるだらう。

主イエスは聖殿から兩替商を追出して了つた。無論主イエスは從來吾々が兩替商なくして日

々の生活が能きないことを知つてゐた。然し主が追出したからには、聖殿の中には無いのである。
(譯者註)マルコ傳十一章十五節参照。それが即ち藝術の場合に於てもである。無論賣買と言ふことは今もなほ存續してゐなければならぬ。然しその賣買の機關はこの聖殿なるものから當然追出されるより仕方ない。饗宴を催すがいゝ、店もまた聞くがいゝ。然しこの聖殿中に於ける店と店の中に於ける聖殿の眞似顔とが、創造する人々には内面的の腐敗を與へ、觀者の間には犬儒主義を生ぜしめたのである。聖殿の芳しき香味は例令それが赤裸々な犬儒であつてもその振舞は拒む。而て矮人は逃行くべきである。オ、倭人よ。信に爾は歸する處吾々の生活を見捨てるより仕方なくなる。無數のうら若き心々が爾が袂別して行くことを希つてゐる。

藝術の賠償に就いての本元を純淨にすることに依つて、藝術を住居の中へ誘ひ入れることが能きると言ふ結果を將來すること、謂はゞ聖殿内の一本の小蠟燭たらしめる結果を將來することが能き。恰度東洋に於けるが如く、壁畫に就いての氣持、印象と言ふものゝ貴重な變化、その兩者は共に聖殿内のものである。なぜかなら眞實は無邊のものであるからである。而て藝術の確認に就いての各個々人の場合は精靈の自覺に依つて劃定される。

鐵道監理者は人々と言ふものは旅行のほか何ごとも仕ないものだと思ひ込んでゐる。靴屋の

は人道が存してゐると言ふことを忘れてはならない。而て此處にこの勤勉なる倭人は目的を達することは覺束なからう。なぜかならば、要するに、人道は、例令その歩調はのろくとも、調和に向つて足を進めるからである。

私の友達諸君。この吾々が生ける日に於てさへも、即ちこの極端にどさくさと恐怖との日に於てさへも、なほ且つ愛とか善とか完全とか言ふもの、即ち調和の全僚友達と言ふやうな、さうしたなほも路遠き意想を元氣よく公示すると言ふことが可能であると言ふことは、諸君にとつて不思議なりと思はれやしないか。調和は屢々誤解される。調和とは讃美歌の抽象的唱吟ではない。調和、核心々々の調和化、それは活動なるものゝその全能力を捧げての、またその清澄と説得との總てに依つての表示である。吾々はこの吾々が慾望するものとは何であるかを會得することに依つて、始めて吾々の總ての核心を一つの努力に注集し、運命の全律令をさへ制御するのである。而て吾々の精靈は誰れよりもよく、眞實とは何處に存在するかを知る。而てこの行動をなす名人は眞實の精靈に依つて審判を受けるのである。

而してまた、愛と完全とが創造的仕事の單純と清澄とに於て生活に認容されると言ふことを知るものこの精靈である。若し表現の單純、慾求の明瞭、これが調和渾一界の涯無き莊嚴に傳

通するとあらば、其處にその道は本統のものである。

而してこの調和渾一界は決して到達し得べからざるものではなくて、それを眼の前にして教授達は顔を顰めてゐるだけのこととて、この吾々の生活の全部に浸潤せる偉大にして單純なるものであり、天地の數へ切れない總ての面に山を築き星に輝きを與えてゐる。

單純と言ふことは調和の避け難き賦性である。將來の創造的仕事は單純に依つて滿ちることだらう。無論諸君は、單純と幼稚と、單純と無遠慮とを混同することはないだらう。此處に藝術制作と印刷物との關係同様な大きな相違がある。而て吾々は屬々、金塗縁ぶらのものに單なる商品的印刷物を見出すにも拘らず、眞の藝術はポスターとして風や雪に吹き散らされてゐる。然し精靈は例令沈黙を守らう共、何れが印刷物、何れが凡庸なるもの、また何れが歎喜、何れが創造的の仕事であるかを知る。

諸君は事々物々を諸君の家に運び込む時に於て默然諸君の精靈に訊ねよ。矮人を拒む呪文を繰返し誦へて、なぜ、而てまた何うして、諸君がその爐邊に新しい客人を迎へると言ふ心持に踏着いたかを考へよ。

諸君はこれ等の沈黙の客人達が眞の友達となり得るかも知れないと言ふこと、また諸君の家

私は爾を知る。オ、矮人よ！。（註。矮人とは人間愚俗の表象）

吾々の行旅の上に實に多くの不必要的品々を供與したのは爾である。未熟且つ「無經驗」であつたものなら何もかも總て疑惑するやう吾々に助言を與へたのも爾であつた。精靈の事實、本質の事實の代りに、表面的事實を置換へたのも爾であつた。繪畫の枠を金ピカに塗つたのも爾であつた。爾は宗教會議や聯盟會議に侵入した。而て墓掘りの務めを遂行して完全への探究を暗闇の中に葬つて了つた。爾は頻りと働く。而て爾の暗闇王國の中には人類の最も貴高き憎惡なるものが威勢を振ふ。

然し、爾は小さきにも拘らず吾々は既に爾を觀知つた。而て吾々は爾の方寸を知つて了つた。爾は愛の護符に懼れを懷く。而て愛は爾の建設せるものゝ下から地を割る。創造的完全の愛なるものが！。調和なるものが！。

爾はそれを屑物の下に葬らうと夢想してゐる。爾は愛の煙が搖らぎ消えるだらうと思つてゐる。然し爾は煙の神秘的財質を念頭から去つてゐる！。それは幾つも幾つもの炬火を燃やす。然らざれば少しも減りはしない。

然らば爾は如何に戦ひ得るか。而て例令爾が總ての國際聯盟に侵入ようとも、國民の背後に

家である。譯者もブリュゲルの親しい心を本當に愛してゐる。寧ろ近頃になつて彼の名は益々喧しくなつて行くやうである。従つて彼の題材は「村の生活」と言ふものに限られてゐる。本統に親しい繪である。

(3) Cor Ardanso 「焰の心」とでも譯すべきか。この團結、即ちこの協會はローリツヒ氏が露西亞を脱出後、亞米利加に來て、いろいろ仕事をした後、「一九二一年五月に市俄古に創設した協會である。この協會のモットーは彼が一九二一年にサンタ・フェに於て講演した「福祉の道」である。十ヶ國から名譽總長を選擇して自らは露西亞側の名譽總長になつた。即ち同志團の具體運動である。

矮人

コール・アルデンスは藝術家のこの同志團の印號であると同時に表象だらう。

以上の言葉の中に、大靈の勝利が湧立つのではないか。渾沌は統和の門を開いたのではないか。肉體的に離ればなれの魂はお互に最高福祉の用語に因つて理解し合ひ始めるのではないか。

オ、顔見知りのない友達諸君よ! 私は諸君を知る。生活の總ての習俗に耐え忍び、其手に持つ炬火が差延べられないと言ふことが諸君にとつて如何に非人類的に苦しいかを知る。私は錢の暗愚概念の上に生活を築いた人間共の睨み目の下に働くと言ふことが諸君にとつて如何に痛ましく困難であるかを知る。私は諸君を知る。寂しき人々なる諸君を。諸君には寂寥なりと思はれるその灯火に照された諸君を。私の若き友達諸君! 恒に若き! だが然しこの灯火の前には大勢が座つてゐる。而て一つの灯火の周りに座る人々は決して寂しくはない筈である。而て諸君は未だ強き握手の感覺を知らなかつたのであるが、今に諸君の精靈は必ず兄弟同様のキスを受ける。

今までに實に無數の堆積物が兄弟同様の努力に因つて建立された。その美と慧智とに對する努力は何れも皆、光の一源、即ち肉體的生物は戦いてゐるにも拘らず、精靈は恍惚の境に昂る

眼前に輝く光の一源の床を過ぎ亘ると言ふその事實に依つて光彩を有つたのである。

憐れな心よ! 斷腸の思ひを懷くな。そんなに鼓動を波打たすなよ! 再びまた、長い幕間の後に、爾は近々と迫る能力を享け且つそれを保持する力を覺り知るべし。

藝術の洗禮盤!

偉大とは未來の生活の爲への、美の意味深長を指すのである。新世界は來る。

「總ての偏見を片附けて了へ、自由に思考せよ」

斯く釋尊はのたまへり。

譯者註。

(1) Jerome Bosch (1460—1516)^o ボスク、ボス、ボスコ。三様の發音がある。ボスクが正しい。フレミッジュ派の畫家。普通寧ろ奇怪とも思はれる題材を取扱つてゐる。然しその構圖、色調、技法は中々立派なものである。

(2) Pieter Brueghel (1525—1569)^o ボスクのすぐ後に生れた矢張りフレミッジュ派の畫家である。ブリュゲルは三人ある。古きブリュゲルは一人で、四十餘年の後に生れたブリュゲルは親子である。然し普通ブリュゲルと言へば、この古きブリュゲルを指す。農ブリュゲルの名さへある。愛すべき農民畫

藝術をそれが所屬する場所なる民衆に持來すべし。吾々は無論美術館、劇場、大學、公立圖書館、停車場、病院を必要とする。そればかりに止まらないで、牢獄さへも裝飾され美化されなければならぬ。然ば吾々には最早牢獄と言ふものが無くなる譯である。

これは陳腐なことでもなく自明の理でもない。これこそは今や人間がその意氣の全力を捧げて強勢し且つ透明にしなければならないものである。なぜかならば、人々は擧つて光と創造力の道を忘れて了つてゐるからである。人間の舌、非を咎めると言ふ點では輝かしく力あるその舌、それは稱讃を呼び斷案を下すと言ふ點では生氣なく且つ失色して了つてゐる。

然しかうした誤れる且つ反動の道に於てすら依然藝術は豫言者として生命を續ける。

然し生活の道案内者は倦まず捷ます創造して行く。而て人はこの吾々の渾沌界の恐怖すべき限界線に立つて欣喜を感ずるがいゝ。かくして暴風の泡の下から新しく洗清光輝の懸崖が現れる。構成と普遍化との創造的活動は近づく。諸君はこれは豫告ではないことを知らるゝだらう。吾々は既に輝かしき徵證を見てゐる。洋や獄獄室に依つて分別された孤獨の個々人達は構成分子の統一と創造力の調和とを思考し始めてゐる。思考の鳩は世界の空を飛翔す。若き人々は既に勞役の楯の上に、美と言ふ文字を彫り込んでゐる。

(3)

コール・アルデンス—Cor. Ardens—なるものは、藝術を、表現の普遍的媒體及び生活の表證なりと心得てゐる。この團結は、藝術に於ける諸々の理想と言ふものは、世界の總ての部分に於て一齊に表示されると言ふ現象を覺知してゐる。而てまた自然、父祖傳燈の如何を問はずして創造的衝動なるものを承認してゐる。藝術は正銘の念に依つて創造され、純粹なる必要から創造されなければならない。コール・アルデンスは尠くとも精靈の上に心ある離ればなれの個々人を集合する具體運動である。

「吾々は莊麗の高められる行く道、熱誠と成就の高められ行く道を吾々の意氣の全力を傾けて歩まねばならない」

—この團結の主旨—

- 第一。藝術家の國際的なる同志團を形造ること。
- 第二。審査、褒賞、賣却、の無い展覽會を開催すること。
- 第三。總ての國の藝術及び藝術家を歡迎する幾つかの中心を創設すること。
- 第四。會員に依つて寄贈された作品が、その永久の家ともならう天下の美術館幾つかの設立に盡力すること。

ばれた。而てその憎惡は普通の結果のやうに敵意ある無氣力に漲つて了つた。彼等は分折の毒睡を飛ばして新しい諸理論の創造に突進した。恰も才畧なき調剤師の如うに彼等は聖火を火の粉に類別してその上へレツテルを貼つた。斯く横柄な無關心の代償として生活はあらゆる種類の主義式と前派式と後期式とに依つて充滿して了つた。而て再び解裂と分散とがその極に達した。而て再び、ロダン、クウルベー、シャヴァンヌ、ファン・ホツホ、ゴーギヤン、ドガ、セザンヌ、と言つたやうな眞の藝術の守護は除け者にされて丁ひ、一方、彼等を取巻いて、美の十字架を押立てゝの騒擾行進が始まつた。何んとボスク⁽¹⁾や古きブリュゲルの主題はびたり適應のものではないか！。今や彼等は主題そのものゝ奴隸となつて了つた。今や彼等は形體をのみ眺める。今や彼等は色のほか何物も思考しない。專横にも彼等は藝術を高級だの裝飾的だの工藝的だの商品的だのと分別して了つた。彼等は實在の概念を歪めて了つた。彼等は藝術のたゞ一本の樹を割り裂いて了つた。彼等はそのぶるぶる顫えた手で手當り次第に掴み得るものを掴んで了つて残らず形を曲げて了つた。彼等はきらめく星空の何れの原子にも響き鳴る鈴の音を忘れて了つた。彼等はその盲目的諸理論が慘めな綴^は_マ切れに過ぎないと言ふことを忘れて了つた。即ち彼等は調和と言ふものに就いて忘れてゐた。彼等は時まさに諸々の核心の調和化に近づきつゝあつたと言ふ事を知りたく思つてゐなかつた。彼等は藝術の神秘的蠱惑——その神妙なる說得——がその始源の道に存することを忘れてゐた。彼等は藝術と言ふものが脳^{かのま}で創造されるものではなく心臓と精靈とに依つて創造されるものであると言ふことを忘れてゐた。諸君の話す用語は諸君の因つて來る處から來てゐるものである。精靈の源泉から進み来る。藝術の神秘的にして普遍化の道に總ての人間を接合するその國際的用語が正しく在るのである。

御存じの通り、私は近視ではない。私は若し彼等が美的経路を辿るとあらば絶大の努力をさへ悦んで享ける。然し、冷血の諸理論は創造に何物をも呈しはしない。吾々には發明は要らない。創造あるのみ。

藝術は總ての人の爲のものである。何れの人々も眞の藝術を享受する。一大害毒とは凡庸人達に誤れる且つ習俗の藝術を與へることである。私は「聖化の泉」の門は各人に汎く打開されなければならぬこと、而て藝術の光は新しい愛に目醒めた無數人の心々に影響を與えると言ふことを主張する。當初この氣持は無自覺にやつて來る、が然し、結局それは人間の自覺を純淨にする。而て何んと多くの若い心々が何か眞實にして美しきものを乞求めてゐることか。だからそれはその人々に與えらるべきである。

ないばかりではなく、能動的に、この二つのことを彼等自身及び社會の日々生活の中に、萬難を排して漸次染込ませなければならぬと言ふことを理解してゐる。彼等は西洋の衣服と言ふものが未だ文化ある人間の印章として取扱へ得ないことを知る。また彼等はこの吾々の時代一即ち機械的文明と大靈の来るべき文化との致命的爭鬭の時代一に於ては美と知識との兩道は格段に難苦であり、暗懲な凡俗の侵害は格段に壓倒的であることを知る。彼等はこの苦悶の艱難を否定はしない。が然し、それを超越して既に解放された大靈の兩翼が育つてゐる。

諸君も知らるゝ通り、自然の最上のかすかすなる美は激衝や震動が醸されたその場所から創造されて來てゐる。諸君は、巖山に面し、底知れない深淵や古き熔岩の繪の如き道に面した時の恍惚を知る。諸君は苦悶の迹を見せた水晶を見て驚異し、彩られた岸層に依つて顯はされるその皺縮を見て驚く。宇宙の激變は無限の美を齎らす。

考へて貴ひたい、如何に多くの徵證が明示されたかを。歐州大戰亂に依り世界は血の洪水を演じた。旱魃や洪水は人類の泰安を攪亂した。湖は干涸びた。モン・ブランの高峯は粉碎され、飢餓が顔を擡げた。老朽民族の習俗が既に如何に多く分裂して了つた事か。

人間習俗の諸々の荒廢のたゞ中から既に新しい生活が起つてゐる。最も愚劣な人間でさへも

今彼等の眼に見へる多くのものは偶發の事柄ではないと言ふことを認め始めてゐる。新世界は進み来る、仰天せる人々の前に、驚愕轉倒してゐる人々の眼前に進み来る。

この新しい世界に於て、その新しい諸々の聖院に於て、新しい生活は建設される。其處では藝術と知識とが神愛の王座を支持する。聖者達は吾々を藝術と知識との道に導く。陳臭虛飾の畸形なる心的累積のたゞ中に、綜合されたものゝ種々なる徵證と完全の調和の諸徵證とが眼に見えて來る。

人は美と慧智との未來の意義を知つて、同じくこの二者の創造の道を解するだらう。現在に於て人は藝術に就いてその中に總て抱含された意義を思考しなければならない。人は大靈の、慰安者の、創造者の、いと高き指揮を身に感じ、それを確認しなければならない。

死せる模倣に充ちてゐた。創造的美的仕事々々は除けものとして寂然と立つてゐた。家の道具に於て、日々入用の品々に於て、繪畫や彫刻に於て、そのをしなべての水準は莫迦々々しい無闇心の極に達してゐた。其處で直ちにその反動が來た。然しその模倣が實に厭惡すべきであつたと言ふ度合に於て、その反動もまた事實不快なものであつた。憎惡は古きものに對して叫

吾々は蜜蜂の如く知識を蒐める。而てその荷を珍妙な蜂巣に填込む。歳の終りに於て吾々はその「財寶」を查べる。然し一體誰が不必要なものまでも澤山滑り込ませて了つたのか。一體何うして吾々はうんと吾々の道を阻礙して了つたのか。

重いと言ふことは昨日の品々の事である！。然し不慮の災害や破壊への犠牲物やの中から、恰も昨夜の火災の灰のやうに、其處には常にわが大靈への貴重なるものゝ目標が朦朧と見えてゐる。而て大靈はその幾多の目標を知る。その目標が即ちあらゆる民族、總ての成就の圈内を通じて人類を導いて來たものである。眞に寺院への歩階！。

主クリストは花の美を指差した。
「信に信に美は梵である。藝術は梵である。科學も梵である。何れの榮光、何れの莊嚴、何れの偉大も梵である」

かく叫んで印度教の聖者はその大三昧—Samadhi—から目醒めたのである。美と慧智との新しき道も今に來る。最上に擇ばれた心々は既に知る。美と慧智とは贅物に非ず、特典に非ずして、成就の總ての階段に於て全世界に惠まれた歡喜である。

最上に擇ばれた人々は既に、美と慧智との兩道に就いては、啻に絶えず物語らなければなら

ことを祈る。吾々お互は精靈のさだかならぬ糸に依つて結ばれ合はうではないか。私は諸君に顔を向ける。私は諸君に呼びかける。即ち、美と、慧智との名に於て苦悶と仕事との爲に結合しようではないかと。

譯者註。

(1) スワアミ・ヴィヴェカナンダ。二十世紀初頭に死せる印度の一大教説者である。歐米を巡錫して東方哲學の美に關する講演は大きい感動を與えたものである。

福祉の道

この二つを當然發言し得べき筈である。而てここに對する意識の上に諸君の爲の輝かしき未來の保證が横はる。諸君の知らるゝ通り、藝術を除外して宗教は達成し難い、藝術を除外しては國體の精神は飛去る、藝術を除外しては科學は暗闇である。

また諸君は知らるゝ通り、精靈の生活の偉業と言ふものは、隱者や仙人のみの特典ではない。定めし吾々の生きてゐる眞つたゞ中に於て、また大靈に最も近く且つ最も淨められたるもの、その名に依つて成就さるべきものであらう。而てこの生活の偉業の意識は諸君の爲に創造的新しく且つ日々の可能の門を開くものだらう。

そこで私は、このヤンガア・ゼネレイシヨンなる諸君に藝術と知識とに就いて物語る。私は知つてゐる。諸君、公民の騎士達、精靈の騎士達が何時までも死の町に居留まつてはゐないだらうと言ふことを。また諸君は、輝かしき、いと美しき、且つ慧智に満々たる國を建設するだらうと言ふことを。一語々々は決して破壊の結果に終つてはならない。高く高くと築上げらるべきである。吾々は如何に創造的思想と言ふものが力あるかを知つてゐる。だから今吾々は一大探究を眼前に控へて最上の源泉から進出した語を物語らなければならない。即ち「總ての偏見を斥けよ。而て自由に思考せよ！」と。而て總て美と慧智との名に依つて思考されたもの、そ

れは定めし美しきものであらう。

而して私は再び諸君に言ふ。時はまさに核心々々の調和の時が來てゐると言ふことを記憶して貰ひたい。この狀態は、時に過つて文化なりと稱せられる「機械的文明」と抵觸して第一に緊要なるものであらう。この日々の生活の瑣々たる細末事に埋れ且つ慘く投げつけられた精靈は既にその頭を擡げてゐる。その兩翼は育ち始めてゐる。オ、私の若き友達諸君よ！ 諸君の輝かしき熱誠と諸君の仁愛の眼とを保持せよ。

而て吾々は孤獨に吾々の悶えを苦しむのではない。大教導師スワアミ・ヴィヴエカナンダ（¹）Swami Vivekananda は吾々に告げた。「諸君は余が先以て詩人であると言ふことを御存じであるか」と。「藝術の美と莊麗とに感覺の能力を有たない者、その人は本統に宗教的たり得ない」と。また「藝術無鑑賞とは遲鈍な無知文盲である」と。

ラビンドラナス・タゴールがその著「藝術とは」を書終るに當つてかう記してゐる。「藝術に於ては、吾々の裡に在る人格はその答辯を天帝へと送つてゐるのである。その天帝とは事物の光無き世界を超えて限りなき美の世界に啓示を垂れ給ふものである」と。

他に吾々の行くべき道はない。オ、友達諸君よ。今お互の離散！。私の叫びが諸君に浸入る

と埋れ且つ數限りなく横はり、然も知識の源を索ぐれば底知れないものである！實に悦ばしき勞働の生活が諸君の前途に横はつてることぞ——諸君！即ちその勞働を手始める諸君！。美と慧智！。それは精靈の祈願であつて、國々を壯嚴の水準に高め來るものである。而て諸君、若き男性と女性、諸君はかうした道の開拓に全力を捧げて究迫することができる。それが即ち諸君の聖なる權利である。然し若しこの權利の自覺がないのならば、諸君は諸君自身、みずから耳目を開くこと、而て眞實と虛偽との區分が解るやう學ばなければならぬ。明瞭に心得て貰ひたい。必要缺くべからざる要求にあるものとは觀念學ではなくて効果ある努力であると言ふことを。

鐵は鑄び減る。鋼鐵でさへ生動的に新鍊を繰返へされなければ腐蝕し且つぼろぼろになる。同じく人間の惱も、その惱が倦まず撓まず完全が期されてゐなければ骨と化す。だからして藝術と知識とに眞近く踏寄るやう勉めよ。この道は最初は難苦であるとしても進むに連れて容易である。その道を乘越へ行けよ！。然らば諸君、若き人々、諸君の前途には最も驚異すべき任務が横たはつてゐる。即ち精靈の教養の地盤を高めること、機械的文明を精靈の教養に依つて置換へること。言ふまでもなく諸君は、機械的文明の破壊、精靈の教養基礎の創造、この二者

の天理的道程に就いて確信を有つ。諸々の國民運動のうちに於て第一の位置を占むるものは、既成の仕事の再評價と、汎く理解されてゐる創造と知識の榮冠との二つである。然もまたたゞ此二つの生起動力のみが、熱烈に乞求めてゐる人類の、無くてはならない状態にあるその國際的用語を構成するのである。創造とは精靈の純なる祈願である。藝術は公民の心臟である。知識は公民の腦である。たゞ人類は心情に依り慧智に依つてのみ結合と相互理解の境に到達することができる。一體理解すると言ふことは寔恕すると言ふことである。諸々の新政府は彼等の旗幟に「精靈の祈願、藝術と知識」なる文字を書くだらう。而て國民生活の眞の精靈を胸に持する人間がかた時と雖精神生活の進歩を決して忘れはしないと言ふことを理解するだらう。然らざれば、建設者は、その前途に何等光明の道はなく、たゞ荒廢が待つだけのことである。

諸君、このヤンガア・ゼネレイションなる諸君は、その政府々々から、藝術と知識との兩道開拓を要求する權利を有つてゐる。諸君は明瞭なる意識を以て、例令過去に於て事態が嶮苦の極を盡した時に於さへも、生活の偉大なる基礎、即ち美と慧智とは忘れはしなかつたこと、また諸君はこの二つを思ひ續けてゐるばかりではなく、諸君の力に訴へて、諸君の生存に、この成就、即ち破壊の悦びを創造の眞の歡喜に依つて置換へるその成就を自覺してゐると言ふこと、

があるだらう。またこれと同様の考を有つたロシヤ人が現在に於て世界に散在せることを考へる必要があるだらう。特にクレムリンと言ふのもその意だらう。また現在に於てこのロシヤを逐はれた人間が世界に散在してそのインテリゲンチヤとしての抱負と文化とを撒き散らしてゐることも考へる必要があるだらう。茲に多くのコスマボリターンを生んでゐる。また佛蘭西革命後多くの佛人が歐羅巴等に遁走して佛蘭西の文明をロシヤへ移入した事實、ダンテ以前に於ける敗殘希臘人の伊太利への居住、總て同一の形式だらう。たゞ過去に於ては、單に文明の形式移入に過ぎなかつたのを、この場合及び現在の世界の狀態では人類生活に貢献しようと言ふ形式なのである。

私は再び言ふ。吾々は生活の物質的方面と言ふものが叛逆的に人類の隙に乘じて乗込んで来てゐることを知つてゐる。然し吾々はこのインテリゲンチヤが成就の道を開拓して行かなくてはならないと云ふ事實を懷中に納めて置きはしない。而て此處に會て私がロンドンで話したことを言つてみよう。

「吾々は、藝術と知識とは最上の國際的用語であると言ふこと、また人々の力と言ふものは生ける水の源から力を援助されてゐると言ふその精神的能力に存すると言ふことを考へて、是非共この生活に於て眞の藝術と知識との課業を聲明する事を求め且つ廣く自覺せねばならない。

人口に膾炙された善き物語を想ひ出しがいゝ。それは死水の噴泉が一例へ肉體のみの爲に存してゐるにしろ——肉體中の手足を粉微塵に打ちくだいて了つた結果となつたのではあるが、その肉體はたゞ生水の噴出を浴びた時に於てのみ再び生氣を吹返す事が能きたと言ふ物語である。かうした聖なる噴泉のかずかずは世界救憲の爲に現出されねばならない。慢然と眺めてゐる人々であつてはならない。たゞ働く人々在るのみである」

吾々は恰も吾々が公然の街頭に在る時のやうに用語は平易明瞭に物語らなければならぬ。今や生活は信用の失せた無用の貨幣のやうに擦り切れた政黨の古き旗幟に依つて充滿してゐる今や人間は忘れられてゐる。人類の言葉は平易且つ明瞭である。それにしても更に平易に更に明瞭であることが全てその神祕的説得を有する創造的努力の普遍的用語である。

このヤンガア・ゼネレイションは前途に於て生活に藝術と知識とを持ち來たす任務を有つてゐる。今迄に於て屬々藝術と知識とは、生活に於て、銃前下りた圖書室として、或は裏返しの懸額繪のやうな存在であつた。然しこの若き人々の時代はこの任務が活動的に、且つ緊急的に理想の道に近接してゐなければならない。而してその人々の働き、その最も單純なる日々の仕事は、探求と勝利とに依つて光り輝いてゐるべきである。幾多の藝術の道は永年の成層に深々

如何なる場合に於ても、これは、寸時たりとも忽にされてはならないものである。これは何にも抽象的な判断ではない。正反対に吾々の眼前に迫る課業なのである。

改造の一大時節は人性を待つ。この新時代人なる諸君は：諸君の日々のくだらない要求と離別して、眞の悦びしき勞役の偉業を覺悟せよ。

曾て私は瑞典に於てかう言つたことがある。「吾々は露西亞が一大國となる爲に愚圖々々してはゐなかつたことを知つてゐる。即ち全般の主張に啓明ある改造が行はれゝば、その精神的な且つ自然に恵まれた財寶に根據を置いて、文化の圈内に當を得た場所を占める事が能かる。吾々は如何に譯解らずに西歐の人間が、その人間の最上の人々すら、露西亞に關しての一様の解釋を有つてゐるかを知つてゐる。即ち、如何なる誹謗的不正確に於て彼等が露西亞の可能性を批斷してゐるかを知る。然し、若しこの東洋と西洋との總ての文化的到達に尊敬が拂はるゝ場合に於て、吾々はまたその場合、本統に、この普遍の財寶に就いて事實を述べ、大露西亞の人間の教養ある特相に就いて意見を吐くことが能きると心得てゐる。なぜかならば、藝術と知識との言葉こそは、眞實にして國際的な言葉、健實に建設された公衆生活の用語であるからである。吾々は、この吾々の内部改造に於て、啓蒙開發の恵ある根據に従つて、不撓不屈、人々相互好感、結合及び尊敬を示さなければならぬ」

「このインテリゲンチヤはこれを巻繞る愚俗と野蠻とに對して精神的に自らを護らなければならぬ。この愛らしく發見された片々のうちから、この貴重なる石のうちから、建設されなければならないものは、一大自由、巍然たる美、精神的な知識の宮殿である」

譯者註。この邊は原著者が現在ロシヤ政府に飽足もなく、それを脱出して了つたことゝ併せ考へる必要

靈魂の普遍的用語は無限に権要なるべきものである。而して特別なる考慮と鐘愛とを施すべきことは、即ち吾々が今までに誇るに足るその生活に自覺を有つ人々の名を物語らねばならないと言ふことである。

現在吾々の間には多くの差迫つた問題がある。然しそれ等のうちに於て、精靈に就いての眞の教養の問題はその柱石である。

何をこの精神上の教養に置換へることが能きるか。食物と勤労とは單に肉體と消化とに過ぎない。然し、精神生活が飢を感じてゐる時に際して一時的に肉體と消化との爲に手を伸ばし切つてゐることは人間の爲に最う澤山である。世界國民の精神的水準線は落込んで了つてゐる。かなり果てた總ての人々の面前に於て、また確實に恐怖すべき野蠻への復歸の面前に於て、この上の水準低下は致命傷である。人類の全史實を考へても、曾て、食物や勤労や、また精靈に依つての啓明を有したざる智に依つて、眞の文化が建設されたことは無いのである。而して特別の考慮を施すべきことは、即ち今にこの精靈の水準を高めることができると言ふことを總ての事柄に認容すべきことである。私は夢を見てゐるのではなくて確言してゐるのである。

改造の一歩々々の道程に於て、教育と美との水準はどうしても高められなければならぬ。

だが然し。美は盤石の如く存在する。

楣

が諸君を抱きかゝへて到底突破能きない障害を乗り越え行くことを知らないのである。然しつかは諸君は傷はれず、且つ久遠再生の目醒めが来るだらう。而て生とは切なく且つ厭ふしきものである時、また何處にも出口が見當らなく思はれる時、諸君は救助者即ち諸君自身の淨められたる精靈が手助けの爲に速力をかけ來ることを氣附かれないものであるか。然しこの救助者の道は長くして諸君の氣弱さはぐんぐん足を速める。然し一朝その救助者がやつて來た暁には、諸君のために「勇氣の劍」と「愛人の微笑」とを提げて來る。吾々は失望落膽の一家族が遂にその生命を炭の焔に化せしめた話を知つてゐる。今やこれは到底我慢の能きない耗弱である。而てこの來るべき精靈の勝利が到來した時に於ては、既に何等の命令なく飛去れるもの、戦きて惧れをなすものは彼等ではないだらうか。なぜかなれば、彼等はその場合當然その勞苦を適用すべき筈であつたにも拘らずその勞苦を使用しなかつたからである。無論勞苦そのものゝ何たるを問ふのではない。溺れんとする者はあらん限りの方法を盡して洪水と戰ふ。而て若し彼の精氣が強ければ其處に彼の肉體の力も豫想外に増加する。

が併し、如何なる方法に依つて諸君の精靈を振ひ起させらるか。如何なる方法に依つて諸君は人間の日々生活の片々の下に埋れてゐる體内の品を探掘するだらうか。再度ならず私は繰返

す。即ち、藝術の美に依つて、知識の蘊奥に依つてと。この兩者に於て、この兩者に於てのみ獨り精靈の必勝の誓願が藏されてゐる。而て淨化の精靈は諸君に如何なる知識が眞であるか、如何なる藝術が眞であるかを教へるだらう。私は諸君がその精靈を諸君への救助として呼寄せられることの可能を断じて疑はない。その精靈、その諸君の道案内、それは諸君に最上の道を教へるだらう。それは諸君を歡喜と勝利とへ導くだらう。然し勝利に對してさへ諸君を案内する道は巍然たるものである。其一段々々の段階は總て知識と美との投合に依つてのみ固められてゐる。嶮しき道を登る試練は全世界を相手として待つてゐる。即ち眞實の同化に依る試練である。火に依り、水に依り、鐵に依つての、中世風な試練の後に來るものとして、今や眞實の同化に依る試練が來てゐるのである。で若しこの精靈の力が人間を火や鐵に反抗して支へ止めるならば、其處でまたその同じき力は人間をして知識と美との階段の上に持上げるものであらう。然しこの試みは古代の試練よりも一層峻烈艱苦である。成就への覺悟！。日々の生活の問題であるその成就の爲への覺悟。斯く總ての事々に注意を怠らない間に眞實の識得は進歩への務めを果す。特別なる報恩の念を懷いて眼前に現る美の諸相の總てに對して近接せよ。今や總てこれ實に難事の時である。

しようではないか。

諸君は言ふ。「生は切ない。吾々は露命を繋ぐ爲に何物も無いならば、どうして知識のこと美のことなんかを考へることが能きようか」と。でなくば、「吾々は知識や藝術からずつとかけ離れて了つてゐる。吾々は先づ第一に嗜附くべき緊要なる業務がある」と。

然し私は言ふ。諸君は正しい。然しそうはまた同時に過つてゐる。知識も藝術も二つながら贅澤物ではない。知識も藝術も懶惰ではない。時はまさにこの二つは祈願であり精靈の仕事であると言ふことを記憶すべき時である。果して諸君は、人々と言ふものがたゞ、飽食の時、又は鯨飲の後に於てのみ、また不注意な懶惰の時間に於て、祈願を込めるものであると考へてゐられるのであるか。

否々さうではない。人間と言ふものは一大艱難の秋に於て祈願を込める。従つてまたこの精靈の信仰は、人間の全ての生ける力が振り落され、支持する力が缺乏した時、而てまた賢明な解決を乞求める時に於て、必要缺くべからざるものである。では一體何處に強大なる支持力と言ふものが存在するのであるか。一體何がこの精靈を更に輝かしく磨きをかけてくれるのであるか。

吾々は空腹や飢餓を感じないし、寒きが故にぶるぶると震へはしない。吾々は吾々の精靈が戸迷ふ故に頗えるのである。疑惑の故に！。根據なき豫感あるが故に！。

如何に屬々、吾々が働いてゐる時に、食物のことを忘れ、風や寒さや暑さに對して何等の注意をしないで過ぎて行くと言ふことを吾々お互は記憶しようではないか。

バガヴァード・ギタ第二章にかう言ふ句がある。

「武器もそれを斷割れまじ、火もそれを焼焦すまじ、水もそれを腐敗させまじ、風もそれを干かせまじ。何故ならば、それは斷割らるべきものにあらず、燒盡さるべきものにあらず、腐敗させらるべきものにあらず、また干乾べ去るべきものにあらざればなり。それは永遠・萬有、不變、不動である。…或る者は宿れる精靈なるものを奇怪なる事實と看做す。然るに或る者はそれに就いて驚異を感じて物語り他の者は同じくそれに就いて耳を傾ける。されど、縱しやそれを諄々と話され聽かうとも、誰ひとりその實體を見識るものはあらじ」

一體何に就いて萬の時代萬の國民の大慧智者は物語るのであるか。それは人間の精靈に就いて話す。上のかずかずの言葉の深玄なる意義及び諸君の生活の意味を看破することに想ひを凝らすべきである。諸君も知らるゝ通り精靈の力の及ぶ處限界はないのである。諸君はその精靈

ふことは何等取立てる必要のないものである。されど衣服は未聞の衝動を被ひ包む。而て彼等が口走る言葉の意味は、例令屬々偉大であり、切實に觸れ、且つよく統一するとしても、今やその意味は曖昧模糊たるものとなつてゐる。知識の守護は失はれてゐる。人々は既に暗愚の生活への慣習に傾いてゐる。

更に知識!。一倍と藝術。この二つの根抵は生活上有り餘ると言ふことはない。これのみが獨り吾々を統一の黄金時代へと導いてくれるのである。

一倍と吾々が知る。かくすればそれに連れて更に吾々は明瞭に吾々の愚を見る。されど若し全然何も知らなかつたとあらば、其處で吾々は自らが愚であることさへ知ることは能きないのである。而て事實さうであつたとすれば、吾々は何等進化の道を有たず、何等望みを遂げんと努める目的を有たなくなつて了ふ。斯くなれば、其處に暗愚なる愚俗の支配は免れ難きものである。このヤンガア・ゼネレイシヨンは輝かしき微笑を浮べて勇々しく知識と美との幻ぼしき光彩を眺めようと心掛けてはゐない。では一體何處から事物の真相に就いての知識が来るのであるか。一體何處から賢明なる相互關係が擡頭するのであるか。何處から統合が、その統合とは健實なる前進行動の眞の保證であるその統合が何處から來るのであるか。たゞ眞の美と眞の知識との二ツを根據とすることに依つてのみ其處に國民間に於ける誠の理解が達成さるべきものである。而てその眞の道案内とは必ずや知識と藝術の美との普遍的な用語である。この二つの道案内のみが將來の創造的な仕事にいと緊要の、その懇切なる見解を建設するものである。

憎惡の道、粗暴の道、欺瞞の道。それ等は何れも吾々に何等行手を示そうものではない。その方向のみに従つてゐては何物をも建てるとは能きない筈である。たゞ人性にのみ低迷してゐるだけでは道念ではないではないか。人間が人間である所以は常に正道到達の追求に在る。暗愚と去り、また吾々は努めて惡意や叛逆と袂別しようではないか。人類は最早暗愚の手に委ねられてゐることから御免蒙りたいと想つてゐる。

以上のこととは無意味な議論でもなく、單なる口先きの言葉でもなく、私が働く人の體得すべき欲求への聲—即ち生活の唯一の根據は藝術と知識とであると言ふこと—を呈するのであると諸君に告げる自由を有ちたい。且つ諸君もさう心に銘して貰ひたい。

かうした懇切なる二つの道案内を確然吾々の胸に喚起させねばならないと言ふこと、それは恰度現在のかうした苦しい勞働の日に於て、この惱みの時に於てである。而てこの試練の時に於て吾々が有つ精靈の全ての力を献げ、この二つの道案内を信ずると言ふことを相共々に公言

問題は、第一に緊要なる事柄である。憮いてはいけない。これは決して誇張でもなければ、またそれは凡論でもない。それは明確なる斷言である。

人間知識の相對性如何の問題に就いては常に煩さく論じられて來てゐる。併し今や人類の總體が既に直接或は間接に戰争の恐怖を感じ來た時に當つて、この問題は生存上必須の問題となつたのである。人々は既に、彼等が明白に微塵の知識も有つてはゐない事柄に就いて、それを考へやうとする習慣を造つたばかりではなく、臆面無く話すようにさへなつたのである。人は毎々にてんで根據の無い所論をいろいろと繰返してゐる。而てその如うな斷案は何れも世界に大きな害毒、救ひ難き害毒を流すものである。

過去數年の間歐羅巴の文化は全くその組立の第一步の處まで振ひ落されて了つたことは當然吾々が認容することである。その功業は未だ人間の手には歸してはゐなかつた文明や藝術の追求に専念して、頭上指して登る基礎的な階段は打ち毀はされて了つたのである。人性は到底恵まるべきではなかつた寶に縋り着かうと藻搔き、その結果、幸福の女神が覆ふ仁愛の面紗を裂き破つて了つたのである。

無論人類が未だ到達し得なかつたことも、軽ては到達し得る運命を有つ。然し如何に多數の

人々が將來とてもこの禁札門の破壊を贖ふ爲に懼まなければならないだらう！。如何なる勞苦を拂ひ、如何なる克己に甘んじて、吾々は新しい文化の根柢を建設しなければならないのであらうか！

圖書館の中に或は教師達の頭惱の中に幽閉された知識はそれを繰返へそうとも現代生活には殆ど何等浸透するものではない。或はまた活氣ある創造的な仕事にいゝ種を疎くことも失敗に終る。

近代生活は肉體的の要求を以て満ちてゐる。吾々は恐るべき魔法圈の外線に足を踏み近づけてゐる。而てその暗黒の守護者を呪ひ追ふ唯一の方法、及びそれから逃れる唯一の道は、眞の知識と美との護符に據るより他に方法は無いのである。

この護符が必需品である時、その時とは今日焦に迫つてゐる。

吾々は何等の吐達へた自恥なく、未開人のひねくれた考もなく、吾々は既に近々と野蠻に接近してゐることを告白しようではないか。なぜかならば、告白は既に進歩への第一步であるからである。

吾々は常に歐羅巴人の服装を纏ひ、而て吾々の習性を襲取して特種な言語を喋舌るからと言

當今に於て諸國民の神聖なる理想に對して「藝術と知識」なる標語は、格段なる嚴密の度を加へて來た。恰度今は、現代と言はず、同時に將來の爲に、この二つの偉きな意義の意義に就いて何か云々されなければならない時である。私の言ふこの二つの語の目的は、その目その耳が未だ日々の生活の價値なき事柄で充たされてはゐない人々、その心臓が所謂「機械的文明」なる機械の挺子に依つて休止されてはゐない人々へである。

藝術と知識！。美と慧智！。これ等の思想の永遠に就いて、且つ依然新味を繰返す意味に就いては態々説く必要もない。たゞ生活の道に一步を踏出すに當つて、どのみどり兒も既に本能的に裝美と知識との價値を理解してゐる。たゞ程經て、美を損した生活の矯飾の爲に踏みにぢられてこの精靈の光明は憂つてゐる。一方愚俗の王國に於ては、この精靈の光明は何等居住すべき場所も有たず、且つ全く未知のものである。左様、時代精神と言ふものは斯くの如き畸形にまでも踏着いて了ふ！

私がかうした門を叩いて覺醒の目醒めを與えやうとしたのは今が始めては無い。而て私は茲に再度諸君に訴える。即ち、

恐怖のだゞ中に於て、悶苦せる人々の圈内、人々の軋轢の圈内に於て、知識の問題、藝術の

盤

フ

タ

マ

シ

石

美と慧智の生活

竹内オリツヒ著
逸譯

編輯者

装幀

田士中田杏
廣川松五郎
王村堂

目 次

一六

譯者序

(一)

原著序 その一

(七)

原著序 その二

(二)

1 盤

(一)

2 楠

(三)

3 福祉の道

(五)

4 矮人

(毛)

5 蒙集家

(五)

6 扶助者

(奎)

7 莫斯科藝術座の情況

(七)

靈の衣

(九)

8 生の律動

(10)

9 活動

(11)

10 亞米利加の望樓

(12)

11 美征服者

(13)

12 悲憤慷慨

(14)

13 入關の權利

(15)

14 新紀元

(16)

15 藝術の歡喜

(17)

16 石器時代

(18)

(國北) 埃州の背景が現はれてゐる。而て此處にロオリッヒは總ての教導者中での最大異彩なる聖セルジュイス(譯者註。四世紀に死)がその北方自然の一大現象である北極光の前に燐光の橋に就いて純一なる默想を凝らして佇んでゐる場面を見たのである。

而して今やロオリッヒは矢張り亞米利加の山川のたゞ中に救世主の近づけることを見てゐるのである。これぞ眞に壯麗ではないか! なぜかならば、彼の系列作品「救世主」の一作にはグランド・カニオンが背景とされてゐるからである。最う一枚の作品に於て曠寥漠々たるアリゾナの山川がこの萬有的主題に認容されてゐる。この二作は往古の物語に根據を有つてゐる。一つは救世主が白雲に乗つて降來し、他は救世主の手に劍の如く慧星が降り来る場合である。この古き二つの巻本は新しい世界の理解を保持して吾々に散華降來するものである。

また吾々が彼の作品「聖徒物語」を見るに當つては、ひとりの若き男が、彼の手に古き巻本を握つて典型的アリゾナの山川中を歩いて行く。而て彼の脊後には最早白雲が凜々しい騎士の姿に於て顯れ、慧星は劍の如く閃く。この作品の題が「聖徒物語」であつて、黎明の深々しい緑色で畫かれてゐる。

他に「奇蹟」と言ふ題の作品がある。その作品はまたいと古き聖徒物語であつて、救世主は今

に橋を越えて降來すべきことを物語れるものである。その作品には既に七人の人物が今や橋に近づく最上に超自然な光明の前にひれ伏してゐる。實にこの奇蹟は恐ろしく偉大なるが故に、その威力ある發氣の一部分のみが見えてゐる。而て背景には恰も往古の寺院のやうにグランド・カニオン嶺の外廓が列び立つてゐる。

恐らく斯く亞米利加の生々と迫り来る山川が異國人に依つてそれ程までに理想を高揚し且つ普遍的なものとする要具に使はれたことは初めてのことだらう。だが然し果してロオリッヒは亞米利加に對して異國人なりと言ふ名を貰ふ筈なのか。眞に彼の精靈は國際的である。而てかくも氏が亞米利加と親しく接近してゐるが故に吾々は他の國人達と共に氏を吾々亞米利加の所有であると取扱ふことも能きよう。

その理由は、氏が亞米利加を訪れる以前既にこの國の精神生活に對する信任を示してゐたからである。而て今や氏は再びそのかすかずの創作品に依つてこの國の精神的將來の豫言を實證してゐる。なぜかならば、この若き世界には、この亞米利加の高嶺壯嚴の真ツたゞ中に、冠絶せる美の中に、偉なる統一の救世主が近づきつゝあるからである。

譽總長である。即ち統合藝術主學院とコロナ・ムンディとの二設置である。この第一のものは諸種の藝術教育に於ける一大集合分教體であつて、將來に於ける創造的作家達に新しい結合を使命としてゐる。然るに第二のものは創造的作家の爲にその制作品の排口バウトとしての設置であり、且つ社會と創造者との最も必要な媒介者となることを以てその任と心得てゐる。最早現在に於て、この二つの設置の影響は、反應を有ち、且つ實に迅速に成長したが故に、作家達の永久の家であることは既に確實となつてゐる。この二つの設置に協力して名譽總長としてのニーラ・ロオリッヒの他に、總長としての Louis L.Horch が在る。副總長として Maurice Lichtman 專務主事として Frances R. Grant が在る。而て教授團の方には Alfred Bosson, Alberto Bimboni, Claude Bragdon, William Coud, Federic Jacob, Robert Edmund Jones, Simonna Lichtman, Nicola Montani, Dhan Gopal Mukerji, Carlos Salzad, Lee Simonson, Albert Sternner, Deems Taylor, Stark Young. もの他同様の任に於て多くの人々が國際的に散在してゐる。ロオリッヒは彼の亞米利加訪問が無効に終らなかつたこと、なほまた彼の創始なる二つの設置が既に、彼が人及び藝術家として聲明せるもの、且つまた總ての人々の前に打開かるべき聖化の門、即ち美と言ふ國際的用語が弘められて行くその目的が着々と緒につき

始めたこと、その二つの確證を得て亞米利加を後に残して、今やロオリッヒは亞細亞方面指しての途上に在る。この旅行のいろいろと特殊な意圖は何も今發表さるべきものではなくて、彼がペトログラードに於ける佛教寺院建立の一助者として働いた時代以來長く彼は業に亞細亞方面の古き教義に心を動かせてゐることを顯してゐたのである。なほまた露西亞に於て、人々の記憶に残つてゐることは、ロオリッヒ夫人の父はペトログラードに於ける最上に美しき猶太教會堂の建立にその設計を與へた人であると言ふことである。

亞米利加に於てもロオリッヒはまた新しい作品にその靈感を見出したのであつて、更にまた吾々がそれ等の作品に面した場合、彼の視覺は明日の面紗ペールを看破したことを知る。彼の繪は恰も寓言のやうに新しい世界の來ることを豫言してゐる。昨日のもの明日のものゝ美しきものととりどりに満ちた彼の精靈は、この將來亞米利加なる新しい地に美しき往古の物語が成就されることを先見してゐる。

特にこの豫言的特性は、彼の系列作品なる「聖界」と「救世主」とに現れてゐる。これ等のうちの一作が「榮光の橋」であるが、この作品には、閃めく北極星のあるメイン州（譯者註。ノヴアスコチヤに近き合衆

藝術が官學的支配を脱した頃、即ち「ポンペイ最後の日」「皇帝への命」を描いたブルロフ時代のことである。露西亞美術史に於て特筆さるべき運動で、バトロンとしてはニコラス二世があつた。ロオリッヒ氏が宮中との關係はこれに依る。

(3) ミル・イス・クストヴァ。「藝術の世界」とでも譯すべきか。これは純民衆の藝術運動で、一八七〇年に創設のクラムスコイ一派の「巡回展覽協會」以後二十餘年にして起つた目醒しい運動である。つまり二科會とか國展とか言ふものである。最初は純團體組織であつたのが、自然その主導者株であつたロオリッヒ氏が會長に選ばれることとなつた。一九一〇年。

序 その二

「ロオリッヒの世界は眞實の世界である。彼の作品は地上の魂と地上ならざる啓示世界とを結び合はせるものである」

斯くレオニッド・アンドレイエフはその死前最後の一論に於て述べたのである。

而て今やロオリッヒが亞米利加を去り東洋に向つて旅の足を伸ばすに當つて、吾々はアンドレイエフの視覺の確性を明瞭に理解する。ロオリッヒが亞米利加に逗留してゐたその短かき時間に於て、吾々亞米利加の藝術生活に於ける彼の影響は素破らしいものであつた。それはこの國土全般に通じて永春圓熟の足跡を藝術家に印したものである。氏の二百枚の作品を提げての亞米利加の二十八都市に開催された巡回展覽會の結果は、此國民及び此偉きい人間の仕事を觀て刻苦勤勉してその行着くべき新境地を見出した若き藝術家達に、非常な反應を齎したのである。ロオリッヒの逗留中氏に與へられた個人的名譽及び殊遇に至つては枚舉に遑なきものである。が併し何れも藝術家と言ふものに對する高き貢を證するに足るものばかりである。この國に於けるロオリッヒの記念碑は二つの設置であらう。兩者共彼の創始で、彼はそれ等二つの名

悦ばれたのと同様、それからそれへと連續して個人的敬意を完全に握つて了つたのである。彼はボストン藝術俱樂部の名譽會員、コロナ・ムンディ結社—Corona Mundi—及び統合藝術主學院—Master Institute of United Arts—の名譽總長に任せられ、その他夥しき榮譽を享けたのである。

露西亞人に取つてはロオリッヒの名は、その國の天才達、例へばムウソログスキイやドストエフスキイ、及びロオリッヒがペトログラードに於ける藝術獎勵學校の主配者時代に於けるその感化力と言ふ風なものが、連鎖を有つて考へられてゐて、またミル・イスクストヴァー Mir Iskustva—の最初の會長として賞讃が過ぎてゐよう筈はないのである。

然し、例令この露西亞なり亞米利加なりへ躊躇なく彼を結合せしめた感ある親密なる關係があらうとも、ロオリッヒの影響は、事實彼の七百枚の作品が二十箇國の國々に散布されてゐることが明瞭なる證據を示してゐるやうに、何等單一なる國家に限られることなく、それを超越してゐる。彼の視覺は限界を知らざる一個の視覺である。彼の作品は、作品が素破らしいものである以外に、豫言を與へ得る特性を具へてゐる。例へば彼の國の或る人が一括して「ロオリッヒは秘境を知らざる者に較べて遙か遠く且つ明瞭に見る能を有つてゐる。眼前に垂れた浮世

の面紗の彼方に不變の世界を見る」と言つた風な特性を具へてゐる。

而て實にロオリッヒの視覺とは何人の世界であるかと言へば、秘義を究めんとして走せ参じた者共には不明に屬する卷本を讀む人の視覺なのである。彼の精靈は既に新しい世界の視覺を豫言したのである。其處には最早複雜も不調和も無く、行動を伴ふ美的の力が牢固たる愛と理解とに依つて人類を充たしてゐる。

而てこの理由に於て特別なる意義が本書なる氏の精撰されたる文章と關係を結んでゐる。それは吾々が本書なる刊行に於て多大の特典を有つものである。

サアジ・ホキツトマン

譯者註。

(1) コロナ・ムンディと統合藝術主學院。この兩者に就ては逐次本書の内容がその意味を示すだらうし、且つ「序その二」に於ても書かれてゐる。紐育河畔街三百拾番地に在る。コロナ・ムンディは「世界の榮冠」とでも譯すべきか。

(2) 藝術獎勵學校。これは元來は協會で、自然に學校の形式を帶びて來たものである。從つて書物に依つては、藝術獎勵協會或は藝術家獎勵協會など書かれてゐる。發祥の年代は不明ではあるが、兎も角

序 その一

美に因つての平和と慧智！。

右の如きがニコラス・ロオリッヒー Nicholas Roerich の使命である。世の多くの人々が、鎮壓に因り、軍備に因り、敵視に因つて、國際的平和の秘鑑を暗中模索する時、彼は必ずその時その使命を公言する。

亞米利加に對してロオリッヒの福音は格段の意義を有つてゐる。なぜかならば、彼の魂の中には何時も亞米利加に對しての深遠なる理解と愛とが宿つてゐるからである。かれこれ二十三年以前彼はその故國露西亞に於て吾々亞米利加の藝術的將來に就いて既に彼の信任を表明したのである。彼は露西亞に於ける第一回亞米利加藝術展覽會を輔佐したからである。それ以來彼はずつと亞米利加の篤實なる友である。一方また彼に對して亞米利加も、彼の作品がこの亞米利加に於て悦び迎へられたと言ふその深遠なる崇敬の念に依つて、相互應酬の賜を支拂つたのである。彼が一九二〇年に彼の作品展覽會開催の爲に亞米利加へ渡つて來たに當つて、彼は至る處で歡迎を受け、その亞米利加に於ける巡回の展覽會に於ては、その新作畫展覽會が紐育で

びである。技葉の問題は捨て、希くば本書が、例令内容に幾分の討議の餘地を有たうとも、藝術家の一家言なりと取扱はれる處があらうとも、少しでも世界人類平和の資料たらんことが譯者の願ひであり、恐らく原著者の生活も其處に在ることは疑ふ可らざるものであらう。人間は生れ而して死す。冀くば吾々はこの自明の理に對して輝かしき解釋を有ち、以て脱迷清朗の生活に運命を完ふしたきものである。恐らく現代より將來へかけての吾々兄弟の生活の河はこの地點めがけて流れ行くものであらう。…美と慧智！

千九百二十六年四月

譯者 竹内逸

附記。

1. 本書は講演集であつて原名は Adamant である。便宜上第一章中の一句から擇んで「美と慧智の生活」とする。なほ原著書は拾九篇であるが、叢書ペーチの都合上二篇を省くこととする。

2. 譯者としての責務上、原著者の評傳を草し、また原著書の巻末に添えられた主學院及びコロナ・ムンディの主旨、規約等を譯すべきではあるが、これも止むを得ず割愛した。畧

ば本書の内容に於て推定し得るものと思ふ。譯者著「藝術時代」—中央美術社出版—を参照して貰ひた。

3. 本書はかなり多くの固有名詞がある。ページの許す限りに於て註を加へ置いた。なほ人名は差當り必要でないものは却つて歐文のまゝの方が誤り少ないと考へ歐文のまゝ書入れ置いた。

の魂に訴えた素純なる統覺の美を讃え、果して現代の吾々は眞の文化人であるかに就いて判断を促してゐるからである。また本書讀了後の從屬的な反省として、藝術は「一」であると言ふ所論に踏ん立つて、吾々もまた吾々自國の藝術を吾々の手に依つて正しく踏査し、以て世界文化の將來に貢献すべきことを促すものである。なぜかなら、原著者の自らの國の藝術に對するその愛は到底吾々と比較にならない旺盛なものであるからである。

見方に依つては、本書は、原著者が名譽總長である統合藝術主學院及びコロナ・ムンディの宣傳用書として取扱はれる虞があるかも知れない。然し、譯者の社會觀から言へば、縱しや本書がかく取扱はれようとも決して差支へのないものである。なぜかならば、世には總ての事象をその事象そのものゝ價值批判に訴えないで、常に黒幕を探究する事、時には悲慘にも黒幕のみの探究に始終してその事象及びその運命を忘却する人間が實に多く巣喰つてゐるからである。また新しい一運動を開始する人間は常にさうした取扱ひを享けずして世に現れるものではないからである。なほまたかく取扱ふことが至當なら、世の何れもの事象も必ず一つの宣傳を含まざるものはないからである。然も茲に一個の皮肉は、本書の目的が、さうした狹量にして且つ偏見ある被造物を救濟して光明に輝く脱迷の生活へ導かんことが主體であることであつて、ま

た本書の示す處に據れば、狹量偏見の人間は、決して或る特定の一國家に多數巣喰つてゐるものではなく、現代は實にこの種の人間が世界に遍漫せることを示せることである。更にまた讀者が留意すべき點は、例令これが一個の宣傳用書であることが明顯であると取扱ふにしても、世に多く行はれる宣傳に終る宣傳に非ずして、本書に現れた彭湃たる理想を兎も角も事實に於て一個の設置に實現してゐる場合、恐らく本書は何と取扱はれても、世に多く生れ且つ死す貴族の慰事に等しい設置或は理想に較べれば、問題にならない正道の立場にあるものであらう。然もまたかうした意味での吾々に與へる從屬的な反省として、斯くまでに自己の信念を強調し且つその理想を實際化する媒體を設置し、以て世界人類の爲に盡さうとする意圖は、現代から將來へかけて吾々の最も學ぶべき點であるばかりではなく、この點は吾々兄弟の傳統が最も微温的な態度を恃して來たものである。

果して本書は日本の讀者にどれ程までの理解と反省とを與へ得るか。それは自然の結果に任せ置かう。たゞ譯者は自ら譯者たり得る資格を危ぶみながらも、編輯者の懇懃を得て、譯者自らも痛感する世界人類の渾沌と敵視とに對し、また譯者自らが生活の主體とする藝術と知識とに依り、世界的用語の遍漫を意圖する本書を譯了する運に出會つたことは何等誇張なき眞の悅

譯者序

原著者が畫家としての存在は既に何れもの露西亞美術史に於て著明なことである。然し、本書の内容が示す通り、藝術を本據としての、即ち渾沌たる世の生活は藝術を本據とするにあらざればその整理躍動は難しとするこの原著者は、思想家として、或はまた豫言者としてさへ許されてゐる。果して吾々も同じくかく許すべきものであらうか。それは自然本書の内容が讀者の心理に訴えるものに依つて定まるべきものであらう。何れとも本書は、當叢書成立の標語にある通り、「…新時代精神への冒險的同感」として取扱ふ點に於ては一つの相應はしき書あることは許し得ると思ふ。

先づ本書の主體を成すものは、國家と言ふ境界線を全然抹殺して世界人類を平等に取扱つての叫びである。而してまたこの現代に於ける渾沌たる世界狀態を美と慧智とを本據として救濟せんとするその愛、即ち原著者の痛感を述べたものである。この點は本書が主として露西亞の藝術を述べ、且つ亞米利加の聽衆を相手として述べられたものであるにしろ、藝術は歸する處「一」であると言ふ考は少しも動搖してはゐない。なぜかならば、本書は、頻りと、原始人間

ヒ ッ リ オ ロ

活生の知慧と美

願念るな眞純のへ國きよ地心住

竹
内
逸
譯



版出閣芳聚

海外藝術評論叢書 (6)

